

---

そして僕等は此処に居る。

唯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そして僕等は此処に居る。

### 【Nコード】

N3329B

### 【作者名】

唯

### 【あらすじ】

一週間前、ある理由で4つ年上の女と別れた。凄いショックでなかなか立ち直れない日々が続いてたけど、そんなある日、俺は1人の女子に出会った。同学年でちょっと引っ込み思案。そして、俺はその人に惹かれていく……。

## 第1話 彼女との思い出（前書き）

初の恋愛小説、そして初の一人称です＞＜；  
まだまだ未熟者ですが、読んでもらえれば嬉しいです。。

## 第1話 彼女との思い出

いつも通り俺は床に寝転がって漫画を読んだ。フローリングの床は夏に寝転がるには最高の温度。

そして今の時間——丁度昼の12時、下から母さんの呼ぶ声がする。

「晴樹<sup>はるき</sup>ー！ ご飯よー？」

ホラきた。そしていつも俺はこう答える。

「今行く」

でも俺、ついさっきポテチ1袋食べたばっかなんだけど……。

ま、いっか。

俺はポテチのカスを床にこぼしながら部屋を出た。そしたら兄貴と出くわした。

「あれ、晴樹、お前学校は？」

「何言ってるの。俺もう夏休みだよ」

「…そうだっけ？」

兄貴は25歳。いつ話してもボケボケ。今からそんなに老後どうなるんだよ。

兄貴の名前は光樹<sup>みつぎ</sup>。俺の親って「樹」が好きなんだろうか？

だって姉貴の名前までも真樹<sup>まゆ</sup>だし。俺ら3兄妹は小学校の時「みつはるまき」って呼ばれてて、「美味そうだ」って評判だった。

下に降りると母さんと、ついでに姉貴も居た。姉貴は22歳、そして俺は17歳の高校生だ。

「なんで居んだよ姉貴……。今日急いで出てったじゃんか」

「なによ、居ちゃいけないわけ！？」

「……や、そりゃ居ないで欲しいって方が強い……いででっ！」  
姉貴の得意技は『頭グリグリ攻撃』。俺はいつもこれの餌食になる。兄貴にはやらないクセに。

「今日は朝から蝉がうるさいわねえー……」

姉弟喧嘩が繰り広げられても全く動じない母さん。まあ喧嘩なんていつもの事だから慣れちゃったんだろうけど。

昼飯が終わったらゲームの時間………なハズなんだけど今日は姉貴に取られてるから出来ない。

姉貴の場合、飽きるまで絶対譲ってくんないし。早く彼氏でも作って外遊びに行けよお。

仕方なく部屋に戻るとに付けっぱなしだったパソコンにメールが来てた。

『ごめんなさい。お願い、許して。もう一度付き合いたい……』  
一週間前に別れた女からだ。

「お前が悪いんだろ……。今更なんだよ」  
思わずその言葉が口から出た。画面に向かって言っただけで伝わるはず無いのに。

返信はしない。そのまま床に仰向けに寝転がった。

俺は一週間前、4つ年上の女と別れた。

……そもそも、別れた原因はなんだっけ？

その前から思い出してみよう。えっと、あれは別れる3日前――  
|。

俺は友人の「大久保剛史」(通称 クボ)と学校の廊下を歩いた。  
た。

「お前今日何かある？ 用事無かったら遊ぼうぜ」

「あ、ゴメン。ちょっと今日は無理だ」

「なんで？」

「里砂に頼まれてる物があるから」

俺の彼女……つまり一週間前に別れたあの女の名前は「里砂」と言った。俺と里砂は同居していて、飯作るのが里砂の仕事。俺は歸りにたまに食材買って帰るくらいだ。

「そっかー。いいよなあお前ら、ラブラブだもんなあ」

「…そうか？」

「あ、照れてんだろ？」

「照れてねえよっ！」

「年上か。いいなあ」

「……」

「……照れてる？」

「だから照れてない、つつってんだろっ」

他愛ない会話。俺とクボはいつもこんな感じだ。

学校の門を出たところで分かれる。2人とも家は全く逆方向だ。

「じゃーな」

「おう、じゃあな」

俺は通り道のスーパーに寄った。里砂に渡された紙を取り出す。

買ってくる物が書かれた紙だ。その通りに食材をカゴに入れていく。食材を見る限りではカレーだろうな。

全部買い終わって外に出た。今気付いたけど、今日はこんなにいい天気だ。ちょっと寄り道して帰るのもいいだろ。俺は寄り道なら任せとけ、ってくらいベテランだ。

来世は猫にでもなるんじゃないかな。

寄り道する為、まっすぐな道を左に反れた。ガードレールを飛び越して草むらに入る。この草むらが結構広いんだよ。草丈もあるし。その草むらを抜けると丘がある。そこから街を一望できるんだ。俺はこの場所が大のお気に入りだ。里砂と喧嘩すると決まってココに来る。

ココで景色眺めると「謝らなきゃ」って気持ちになるんだよな、不思議と。

俺はいつもの場所に座ると、目の前に広がる壮大な景色をただひたすら眺めた。時折風が吹いてきて、なんとも言えず気持ちいい。

——気が付くと、俺は寝てしまっていた。

「……ヤベッ！」

急いで起き上がってスーパーの袋を引っ掴むと、草むらを走った。さっき左に反れた道に出れば、あとは少し歩くだけだ。

俺と里砂が住んでるのは、ちょっと古いアパートだ。でも全然不便じゃない。コンクリの階段を上がって3階に住んでる。アパートの敷地内にデカイ木が植えてある。夏になると蝉がうるさいのなんのって。

でも部屋の中で寝っ転がっているとそれもいい子守唄に聞こえてくるんだ。だから俺はココが気に入ってる。

2階から3階への踊り場。そこで1人の男とぶつかった。

「いてっ」

「あ……」

その男はこっちをチラッと見たと思ったら帽子を深く被りなおして、謝りもしなかった。そのまま行っちゃった。

「……なんだよ、感じ悪いな」

でも……ココに住んでる人であんな奴いたっけ……？

まあいつか。俺は早いところ里砂にこの食材を渡さないと。ちょっと重たいドアを開けると、里砂が出迎えてくれた。

「ただいま」

「おかえりー。買ってきてくれた？ あ、その袋だよな？」

「おう」

白い袋から人参の橙色が少し見えてる。俺はその袋を里砂に渡すと、部屋の中に入った。

「……？」

いつもとちょっと違う気がする——？

なんか……なんか違和感。なんだろう？

その時俺の頭の中にあの男が出てきた。何故かは解らないけど、あの紺色の帽子を被って黒いTシャツを着て……そして無愛想な態度。

………うわっ！　なんか思い出してたら急に腹立ってきた！！  
「晴？　どうしたの？　……うわ、タコチュー！」

里砂が俺の顔覗いて言ってきた。「タコチュー」？　ああ、きつと俺が口を尖らせて頬膨らませてるからだ。

………なんか急に里砂が愛しくなってきた、ギュッと抱きしめた。

「…晴……？」

「明日休日だね。…どっか行こうか」

「……うん」

里砂は笑顔でそう言った。「チクショー可愛いよ！　コノヤロウ！」　って思ってた更に強く抱きしめた。その2日後には別れるって事も知らずに。

次の日、俺と里砂はウィンドーショッピングに出掛けた。勿論里砂の希望で。出掛けるまでに1時間掛かった。全ては里砂の化粧のせい。でもまあいっつか。綺麗に見せたいのかな。

………でも、ちょっと口紅塗りすぎ……。そこだけ浮いてるぞ？　ま、努力賞ってとこだな。

「あ、ねえねえ晴。私、犬見たい！」

「犬か……。下にペットショップあったよね。行こうか」

「犬何が好き？」

歩き出した俺の腕を掴んで、里砂が聞いてきた。おい、照れるじやんか。嬉しいけど……。

「………柴、かな……」

「へーえ。私はね、パピヨン！」

「ああ。あの耳が蝶々みたいなヤツ？」

「うん！　走るとフワフワなって可愛いんだよお！」

ペットショップの自動ドアが音を立てて開いた。中は犬達の鳴き声と人の声で溢れてる。



「やーん可愛い！」

「え……？ あれ！？」

俺の横に引っ付いてた里砂は、いつの間にかケースに引っ付いてた。中の犬はパピヨン。やっぱいつ見ても蝶々だ。

「あ、晴ー！ 柴だよ、柴！ 可愛いー！ 柴ちゃん」  
はしゃぎまわってるなあ。

人間飛び回ってるし、子犬冷めてるし。これじゃあ立場逆転だよ。

「犬、欲しいね」

「そっか？」

「欲しい！」

あ、ワガママになる1秒前。仕方がないから俺はこう尋ねた。

「蝶々耳が欲しいの？」

里砂は俺の方を見ると、コクンと頷いた。でも値段見てみたら失神しそうになった。「今なら安い、500,000円！」とか出るんですけど。安くてその値段って……。

いくら何でも無理だよ、コレは。

「パピヨン……。可愛いなあ……。いいなあ」

そんな顔すんなよお。俺だって買えるもんなら買ってやりたいよ。でも金無いし……。

ポケットに入ってる財布が膨らむことは無いだろうな。頬ならいつでも膨らむのに。

「ごめんね、変なこと言っちゃって……。行こ？」

俺達はショッピングセンターを出た。でも、なんか納得いかない。何も言えなかったのが納得いかない。里砂が謝った事も納得いかない。

謝る必要なんてどこにもないじゃんか。

だけど、俺から謝るのもなんか情けなくて……。 「ゴメン、金無いんだ」なんて言えなくて……。

「晴？ どうしたの？」

「……ん、ううん」

「……ね、今日の晩御飯、何がいい？」

！　…言うなら今だ。犬を買ってやれないならコレしかない！  
代わりに俺が――

「俺が奢る……！」

「え？」

「奢るの、俺が。何食べたい？」

「いいの？」

「いいの。決めろよ」

里砂は少し迷ってた。きっとオムライスにしようかスパゲッティにしようか迷ってるんだ。

「じゃあ・・・スパゲッティ！」

「スパゲッティ？」

「うん。オムライスにしようか迷ったんだけど、今日はスパゲッティって感じだから……」

…俺凄い。

なんか今自分で自分を尊敬しちゃったよ。

「じゃ、行こっか」

俺と里砂は歩き出した。

夜の8時にはスパゲッティを食べ終わって、家に帰る。

「さあて。明日からまた学校だ……」

「頑張ってるね、晴」

俺は里砂に向かって微笑み、頷いて、それから・・・寝ちゃったんだっけ。気が付いたら朝だった。そこにはもう里砂の姿はなく、俺1人だった。

「……何時だ今……」

壁掛け時計を見ると、針は短いのが8と長いのが6を差してた。

「……。ヤバイ……！」

俺の上に掛けてあった上着を払い除けて準備をした。それはもう超特急のカンガル―便だ。2分で朝飯食べて1分で顔洗って着替えて、1分で学校の準備。最後の1分で鍵掛けてアパート出て終わ

り。全て5分で終了。

そこからは10分かけて走るだけ。

だけど学校は8時から始まっている。8時半って言ったたら遅刻は確定。でも俺には必殺技がある。思い切り走ってきたって言う姿を担任にでも見せれば許してもらえるはずだ！

……多分。

## 第2話 元彼と。

訂正します。人生そんなに甘くありませんでした。  
やっぱり怒られました。

そしてついでにクボに笑われました。

1時限目が終わった時、教室内で目立つのは「肩を小刻みに震わせる男」と「その首を引っ掴む男」。

前者がクボで、後者が俺だ。

「笑うなっ!!」

「だってだってだって……ぎやははははっ!」

「なに、大久保の奴どーしたの?」

後ろから友人の杉浦が声を掛けてきた。

「どーしたの?」って言われても……俺が「遅刻して武セン（武田先生）に怒られた」って言ったら爆笑しやがった。

そうとしか言えないんだけど……。

ってゆー……か、

「クボ笑いすぎだ!」

「あひっ……ああー………あー……窒息死するかと思った……」

「俺クボにだけは笑われたくねえよ! 何度も遅刻してるクセに」

「滅多に遅刻しない奴が遅刻して怒られた、って方が笑えるじゃないや、笑えないよ。笑う前に慰めの言葉の1つくらい掛けてくれたっていいじゃんか。」

「大丈夫だ榎本! 気を落とすなよ」

「笑われた後に言われるのが一番腹立つんだよっ!」

俺はクボの頭を小突いてやった。

榎本、っていうのは俺の名字。2話目で言うのもなんだけど。

校舎内にチャイムが鳴り響いた。やっと今日1日の授業が終わっ

た。

「今日も彼女とラブラブすんの？」

「おまつ・・・！ そーゆー事言うなよっ」

「何を？」

「……………ラブラブとか…」

そうやって言ったらクボの奴からかってきやがった。

「いやーん。榎本くんが「ラブラブ」とか言ったー。榎本くんったらエッチー」

「うるうるうるせえよ！！ なんかなんかそうやって言われると急に恥ずかしくなってくんじゃねーかつ！」

「いやんいやーん」

「まあたやってるよ、あの2人。仲いいんだなあ」

あ、杉浦あ！ そんなところで眺めてないで俺の味方になってくれりゃいいのに！

って…………あれ？ あ、こっち向かってきた。やった！

「杉…………」

「末永くお幸せにな」

そう言って素通り。クールに素通り。クボが更に調子に乗る始末。

「榎本くん。俺達末永くお幸せに、だって！ 仲良くなるーか！

ねえねえ榎…………」

ボコッ、って音を立ててクボの顔面にパンチを喰らわせてやった。そのままスタコラサッサと去る俺。

ちょっとやりすぎたかな？ まあいいか。いい葉だ。

廊下内に置いてきたから校門で「じゃあな」って言い合う相手は居ない。

たまにはいっかな、そう言うのも。

アパートに帰ってきた。今日の飯はなんだろ？

ウキウキしながら上がってくと…

(…この間の男……!?)

またあの男だ。紺色の帽子を被って黒のTシャツを着ていた、あの無愛想な男。

すれ違う時、今日もまた無視していった。

「……お、おいつ!」

俺が声を掛けると、無愛想な顔をこっちに向けた。うわ、目つき悪っ!

「なに」

「……………あんた、この前も居ただろう…?」

「ああ。…会うのは2回目だな」

声まで無愛想ときた。しかもスッゴイ棒読み。

「何……何してんだ…?」

「お前に関係あんの?」

「……………」

「じゃ」

その男は軽い足取りで階段を降りていった。

「おいつ……………」

俺がもう一回声を上げた時にはもうソイツは居なかった。モヤモヤした気持ちだけが残る。でもこのままココに突っ立ってても仕方ないから家に帰った。

「おかえりー」

いつも通り、里砂が出迎えてくれた。

「ただいま……」

靴を脱いで、そのまま座ったまましていると、里砂が肩に手を置いてきた。

「どうしたの? 元氣ない」

「怪しい男を2回も見た……」

「……………え?」

里砂の顔色が少し変わった気がする。

「ん?」「え?」って?」

「あ、ううん。……晩御飯にしよっか」

「なんか隠してる？」

俺は立ち上がった。里砂の華奢な肩がビクンとなった。

「……隠してないよ……？」

「隠し事は無しって言ったじゃん」

「だから何も……」

振り向く里砂の肩を掴んだ。驚いた顔だ。その拍子に服がちよつとズレた。

そこにあった物は……

「ち、違うの。これはね……」

「何が違うんだよ。キスマークじゃねえか、これ！」

「……………」

「……………アイツ……？」

「え？」

「さっき言った、変な男……アイツか!？」

俺は里砂の肩を持つ手に力を入れた。

「違うの! あの人が悪くなくて……」

「寝たんだろ? アイツと! 俺が居ない間にアイツと寝たんだろっ!？」

そう怒鳴ると里砂の目から涙が溢れだした。

ふざけんなよ、泣きたいのはこっちだ。なんで俺より先に他の男と寝れるんだよ。

何か俺に足りない物でもあったのか? 俺じゃ不満なのか?

「ゴメン……晴う……」

畳に涙ボタボタ落としながらそうやって言ってきた。

「……………俺じゃ……ダメなのか……？」

そう聞くと里砂は首を横に振った。でも今は……そんなの信じられない。どれだけ首を横に振られても信じられない。

「最初に……約束、したよな。絶対に浮気はしない、って」

「……………ごめんなさい……」

「約束の意味無いよな」

「……………」

里砂は黙りこくった。

黙ってないでなんとか言えよ……。俺どうしたらいいか分かんなくなるじゃんか。

「ごめんなさい、晴……………」

立ち上がろうとする俺の腕に里砂がしがみ付いてきた。

「ごめんなさい……………」

「……………アイツ、誰なんだよ？」

「……………高校生の時に付き合ってた人で……………」

元彼、ってワケか。ヨリを戻したいとかそう言うのか？ それと

もただの体目当て……………？

「今どこに居んの」

「……………」

「どこに居んの！」

「……………隣の地区の……………ココと同じアパートに……………」

「名前は？」

「……………犬塚康平……………あ、ねえちよつと！」

俺は飛び出してた。

あの男が許せない。里砂も悪いはずなのに、俺はあの男を許せない。

————あの男しか憎めない————。

隣の地区つつつってたな。今度こそ里砂に近づくなかって言ってやるから。

思い切り走ってたら、意外と早く着いた。

「犬塚……………犬塚康平……………犬塚……………あった！」



心臓がバクバク言ってる。走ってきたせいもあるけど、やっぱり緊張してるのもある。

…バカ、なんで俺が緊張するんだよ！　もっと堂々としてなきゃ……。

ちよつと震える手でチャイムを鳴らした。

数秒後、中から出てきたのは……当然だけどあの男だ。

「！　……………」

「どーもお」

俺はわざと憎たらしく挨拶をした。一瞬、ソイツの眉間にしわが寄ったのがわかった。

「里砂の元彼なんだって？」

ソイツは一瞬動きが止まったが、そのままドアを閉めようとした。けどそんな簡単に逃がしてたまるか。俺はもうすぐで無くなりそうな少しの隙間に手を突っ込んだ。

ドアを掴むと、強引にこじ開けた。

「逃げんなよ！！」

「……………」

「アンタさあ、人の女にちよつかい出しといて、ただで逃げれると思ってるのか？」

「……………」

「なんとか言っ…」

「残念だったな！」

急に叫んできた。なんだよ。なんだよコイツ。

「アイツの体はもう俺の物だ」

「はあっ！！？」

手に妙な感触が残った。気が付いたら俺はあの男……犬塚を殴ってた。玄関に尻もちを付く犬塚の上に座って体を倒させ、尚も殴る。…だって許せねえよ！　こんな奴を里砂は一生懸命にかばって…。なんでこんな奴かばうんだよ！

「……晴！？　晴！　やめて！　死んじゃうよおっ！！」

ハッとして後ろを振り向くと里砂が居た。俺を犬塚から引き剥がすとハンカチを取り出した。滲む血をそれで拭いてる。

「……放っとけよそんな奴……!!」

「バカ! 何言ってるの!? このまま死んじゃったらどうするの!」

バカ……? バカはそっちだろ…?

俺よりその男の大切なのか……?

「じゃあ……一生ソイツと居ろよッ!!」

俺は階段を駆け降りた。しばらくは後ろから里砂の呼ぶ声がしたけど、じきに聞こえなくなった。追いかけてくる気配も無い。

なんだよ。その男がいいんなら最初から俺と付き合ったりなんてすんなよ。

そのままアパートに帰る。里砂の出迎えが無い部屋はいつもよりシンとして、少し寂しかった。

「……里砂なんて……もう知らないからな……!」

誰も居ない空間に向かって、俺はそう呟いた。タンスの一番下の段を開けて黒い大きなカバンを取り出すと荷物を詰めた。もう服がグチャグチャになろうが構わない。とにかく一刻も早くこの部屋から出たかった。

だってこの部屋は————

——他の男が上がりこんだ部屋だ……。

そんな部屋でこのうと暮らしてられる方がどうかしてる。

俺が荷造りしていると里砂が帰ってきた。

「……晴? 何してるの……!?!」

「決まってるじゃん。出てくんだよ」

「どうして!?!」

「どうして」？ 聞くまでもないだろ。

「……そうだよな。とりあえずはそうやって聞いておかないとな」  
「え？」

「里砂はあの男……犬塚とか言う男と暮らせばいいじゃんかよ！  
俺は単なる暇つぶしの相手だったただけだもんなあ！？」

俺がそう怒鳴ると里砂の肩が震えた。

「そんな……そんな事ないよ………」

じゃあどうして他の男をこの部屋に……。

そう聞きたかったのに。ただそれを聞きたかったただけなのに。

俺の口から出たのは――――

「最低、だよね」

その言葉だった。里砂が凍ったのが分かった。だけど言うてから  
ダメだっと思ったってもう遅い。

引っ込みつかなくなった俺は、無言のまま出ていった。やっぱり  
さっきと同様、里砂が追いかけてくる気配はなかった。

### 第3話 奈美さんとその子

そっか。里砂……あの女が浮気したからだ。

最初は犬塚しか憎めなかったのに、段々と里砂も憎めるようになってきて……。

やっぱり、浮気は嫌だなあ……。された側の身にもなってみる、っての。

俺がそんな事思ってたなら、下から母さんに呼ばれた。電話みたいだ。俺はまだ携帯を持ってないから、電話は家を使うしかない。電話の相手は……クボ。下に降りてって母さんから受話器を受け取る。

「もしもし？」

【あ、なあなあ、今暇？】

「？ 暇、だけど……」

【じゃあ一緒に昼飯食べようぜえ〜！】

「悪い。さっき食べたところ」

【ガーーーーーン】

クボは電話越しに自分で効果音を作った。でもまあ、付き合ってあげよっかな。

「行ってもいいよ」

【マジ！？ じゃあ学校の近くのジョイフル来て】

「おう、分かった。じゃな」

クボも携帯を持ってない。「榎本くんが持たないんだったら俺も持たないんだーい」だってさ。きっとジョイフルの公衆電話から電話してきたんだな。

受話器を置くと、俺は財布をポケットにしまって家を出た。

はあー。真っ青な空がずっと向こうまで続いている。ココらは田舎だから邪魔するものが無い。あー、気持ちいい。

蝉の鳴き声もいい感じだし、俺の横を網持った少年達が通っていくし。

おーい君達、虫除けスプレー撒いたかー？ あっはっはー。

バカみたいに頭の中で会話していると、ジョイフルの黄色い看板が見えてきた。外からチラッと中を覗くと、クボは窓側の席に座っていた。一生懸命小銭を財布にしまってた。やっぱり公衆電話からだ。家に電話するだけでそんなに小銭使うわけないだろー。出しすぎだよ、クボ。

小銭がテーブルの下に落ちたのか、クボはしゃがみ込んだ。少し後、顔を上げた時に俺に気付いたみたいだ。手を振ってきた。俺も軽く手を振り返して中に入った。

「榎本ー！ やっぱりお前も俺と仲良くしたい……」

「早よ食え」

クボにそう言って、俺はアイスコーヒーを頼んだ。

「そいえばさ、年上の彼女とは別れたんだろ？」

「……ああ……」

「新しい彼女とかは？」

「そんな簡単に作れるわけないだろ」

テーブルの上に置かれたアイスコーヒーを飲みながら、俺はそう言った。だってアイツが初の彼女だったんだ。もう「彼女」にはコリゴリだよ……。

「じゃあもう付き合わないの？」

「時期が来れば自然と付き合うよ」

「ふーん……」

「クボ」

「ん？」

「この後……久しぶりに2人で遊ぼう」

多分「ちょっと照れ気味」な俺の言葉に、クボは一瞬驚いた顔を  
したが、いつもみたいにニカッと笑うと「おうっ」と言った。  
そこから俺は夜までクボと遊んで、家に帰った。

次の日、宿題をやり始めた。面倒臭いけどやらないとなあ………

レポートとか教科書とかが山積みになってる。それを見ただけで、  
空は快晴なのに俺の心には雨が降りまくった。

俺は毎年、夏休みになつては「宿題は1日3ページ」と決めてる。  
……が、それが達成された試しは無い。威張ることじゃないけど。  
だけど今年こそは……!!

俺は机の上に転がってるシャーペンを手にした。レポートに芯を  
擦りつけてく。

しばらく経って、手を休めて見てみると今日やったのは4ページ。  
……やった！ 本日のノルマ達成だ！ あー。もう今日は心置き  
なく好きな事が出来る！

姉貴は仕事だし、ゲームやりまくりだ!! 今日『ドラクエ』  
をやる。この頃全然進めてなかったから。

その日、俺はドラクエを気が済むまでやりまくって終わった。

「……出校日、かあ」

気が付くともう夏休みは後半まで来ていた。

と言ってもウチの学校は夏休み2週間しかないけど。そして今日  
は出校日だ。今日までに出さないといけない宿題は……レポート2  
5枚、ノート2冊、教科書30ページ。

これを約一週間でやれ、ってのはちょっと拷問に近くないか？  
これが普通なのかな？

一番心配なのは、クボがやってきたかどうか、って事。俺は一応

やったけど。

学校に行くと、予想通りクボは俺に泣きついてきた。

「榎本くん俺ってばどーすりゃいいのよ!? レポート10枚しか出来てねえよおお! ノートも1冊半だし。……教科書なんて30ページも出来るわけないじゃんかよおお!」

「俺に言うなよ……」

「だってだって教科書の問題、あんなの分かるわけねえじゃんかよおお!!」

「剛史!」

教室の窓の方から声がした。

あ。あれは、クボの彼女の「楠本奈美<sup>くすもと なみ</sup>」さん。同学年なんだけど、なんとなくいつの間にか「さん」付けになっている。

俺がクボと友達になってから彼女って事を知って、奈美さんとも友達になったんだ。奈美さんは3組で俺らは5組。クラスが違うけど、結構会う機会がある。

クボはよく俺に「可愛いからって奈美ちゃんをとるなよ?」って言うってくる。確かに顔は可愛い……って言うより綺麗な。とにかく整った顔をしてる。んでもってアネゴ肌。

だけど人の彼女なんだからとらないっての。アイツと同じになりたくないし……。

「あっ! 奈美ちゃあああん!」

今度は奈美さんかよ、クボ。

「何してんのあんた」

「宿題が全部出来てないんだよおおう!」

「榎本くんも苦勞してるねー。コイツと同じクラスなんて」

「あ、いや。まあ……」

奈美さんは窓のレールに肘を付いて笑ってる。

なんて答えたらいいか分からなかったから曖昧な返事になっちゃったけど……まあいいか。

——ん？

そう言えばさっきから奈美さんの横に居る子……誰だろ？

「あ、じゃ、そろそろ戻るね」

奈美さんと隣に居たその子は自分達のクラスに帰っていった。その直後チャームが鳴って、1時限目が始まった。

クボは先生に少し怒られて、また俺に泣きついてきた。しかも泣き言が凄い理不尽……。

「だって榎本が俺に宿題見せてくれないからー！」  
だとか。

お前毎日奈美さんに「自立しなさい」って言われてんのにまだ懲りないのかぁ？

「なあ、今日遊ぼうぜ」

急に話題を変えるなお前は……。

「悪い、今日は無理」

「なんで？」

「クボと同じ目に合いたくないから宿題やんない」と

ちよつと意地悪してそう言っていると、クボは泣き叫んで走ってった。

向かった先はとゆーと……。

お決まり、奈美さんのクラス。窓から大声で「奈美ちゃああん」

なんて叫んでるから……ああホラ、やっぱりゲンコツ喰らってる。

決めセリフは「うるさいっ!!」だ。

その時にも、あの子は奈美さんの隣に居た。クボと奈美さんのやり取りを見て少し笑ってる。なんだろう。印象としては……「可愛らしい」子。

カッコイイ系の奈美さんとは対照的だなあ。でも逆にバランスが取れてるのかも。



……つかマジでこんなところで分析してる場合じゃなかった！  
宿題ってのは口実。今日は姉貴の仕事が早いから、帰ってくるその  
前にゲームをやりまくらないといけないんだ。

俺はクボに「先に帰るから」と言って家に帰った。

帰ってから30分だけは俺の時間だった。

## 第4話 小田さん

夏休みはあっという間だった。

1日はボーッとしてるとすぐに過ぎてっちゃうし。

そして今日は学校。始業式。

クボの奴、まだ懲りてないみたいだ。今日も俺に泣きついてきた。勿論奈美さんにも。

ああ。同情します、奈美さん。

夏休み明け最初の1日、つまり今日だけは学校が半日。明日からはいつも通り6時間授業になる。

なんかもう、考えるだけで憂鬱だ・・・。

しかも俺は失敗した。夏休み中にバイトをしようと思ってたのに、すっかり忘れてた。

おかげで財布の中は空っぽ。早いとこ食料与えてやらないと。

でもそれは思うだけ。現実とは与える食料も無い。学生はお金が無いって本当なんだ。

トボトボ教室に入ると、クボが満面の笑みで手を振ってきた。

「やっほー！ 榎本ー！」

「あれ？ 先生に怒られたんじゃないのか？」

「うん、怒られた」

「なんでそんなにテンション高いんだ？」

「聞きたい？」

「……？ なんだコイツ？」

「いや、別にいいや」

「聞きたい？ 聞きたいんだろ？ もうしょうがないなあ榎本く

んは」

しょうがないのはどっちだよ……。

「だから別にいい……」

「特別に教えてやるよー。しょうがないから！」

クボは「しょうがない」を強調して言った。ちよつとムカツときたけど、一応聞いてやろう。

「俺ね、今日奈美ちゃんとラブラブするんだ」

「……なんだ」

「ん？」「なんだ」？　なんだってなんだ？」

「デートって事？」

「うん！　そう！　羨ましいだらおう？」

「……………」

そうだな。クボからいい情報を聞けると思った俺が間違いだった。デートってだけでこんなに嬉しいがる男も珍しいなあ。よほど相手にされてないのか……。

そう言うわけで、今日はクボの奴、ピョンピョコピョンピョコ飛び回って先に帰った。

俺が呆れながら校門を出ると……。

「あっ！」

あの子だ。あの奈美さんの隣に居た子。思わず声出したから向こうも気付いたみたいだ。

「え？」

「あ……………いや。奈美さんの友達だよね？」

「そっちは？　…あの……………奈美の友達、ですか？」

「まあ一応……………」

話してみるとその子は思った通りの可愛らしい子だった。声は高すぎず低すぎず、聞いてて丁度いい感じだ。背は俺より10cmくらい低い。

その日、何故だか俺は1日中気分が良かった。

次の日、偶然に偶然だ。

今度は玄関で会った。向こうも俺を覚えてたみたいで、少し控え

めに「あ……」と言った。

挨拶しようかどうか迷ってるっぽかったから、俺が先に近づいて挨拶した。

「おはよ」

「おはよう……!」

あ、嬉しそう。先に挨拶して良かった。彼女の名前は「小田彩乃」おだ あやの。奈美さんには「彩乃」と呼ばれてるらしい。でもやっぱり出会ってすぐだから、俺は「小田さん」と呼ぶ事にした。

俺が自己紹介したら、小田さんの方も「榎本くん」と呼ぶ事にしてみた。お互いに呼び名を決めたところで、教室に入るまでに少し会話をした。

「小田さんは……部活とか入ってるの?」

「ううん。なんか大変そうだから……」

「そっか」

「榎本くん、は?」

「俺はバスケ部に入ってる。もう練習が大変で……」

「そうなんだあ」

小田さんは笑ってそう言った。なんか見れば見るほど可愛い、優しい顔だ。まだ「榎本くん」って呼ぶのに慣れてないみたいで、呼んだ後には必ず少し間が開く。

でも全然イライラしない。逆に初々しくていい。

なんかこっちも初恋の時に戻ったみたいで新鮮だ。

この言い方だと何度も恋してるように聞こえるけど、実際今までの彼女は1人だけ。

その1人ってのは……言うまでもない。

小田さんと別れて教室に入ると、クボが近寄ってきた。

「あ、クボ。おは……」

「仲良くなったの?」

満面の笑みで聞いてきた。しかも手はゴマスリ状態。もう、なんだよコイツ。

「ねえねえなつたの??」

「：邪魔だ！ 退け！」

俺は目の前のクボを横にどけると、自分の席にカバンを置いた。後ろではクボがブツブツ言ってるけど、気にしない、気にしない。だって別に女の友達がいたっていいじゃん。全然変なことじゃないだろ？

授業中もクボと席が近いのが運の尽き。先生の目を盗んでヒソヒソ話掛けてきた。

前向けよ、って言っても後ろ向いてくる。づくづくなんだよコイツ。

放課になってやっと離れた。

だけど、いつもなら「仲良くなつたの？」って聞かれると即「違う」って言えるのに。

今回はそれを言うのがなんか嫌で……………。

廊下に座って考えてると、小田さんと奈美さんだ。笑いながら歩いてきた。奈美さんは俺に気付くと、「あ、榎本くん」と声を掛けてくれた。

「なにどしたのー？ あれ、そいえば剛史は？」

「今はちよっと、ね…………」

「喧嘩？」

「喧嘩ではないんだけど…………たまには一人もいいなあって」

俺がそう言うのと奈美さんは笑って「アイツうるさいからねえー」と言った。そんな奈美さんの後ろで、小田さんがこっちを見た。小さく手を振ってる。俺も小さく振り返した。

「なに？ なに？ 友達になつたの？」

「えへへ…………」

奈美さんに聞かれて小田さんはちよっと恥ずかしそうに笑ってた。奈美さんは「あっ」と言って俺のクラスの時計を見た。

「ヤバイ。彩乃、もう行かないと」

「あ、そうだね」

「じゃあね榎本くん」

「うん、じゃあ」

俺は小走りで音楽室に向かった二人に手を振った。二人が曲がり角で見えなくなった時、丁度チャイムが鳴った。かったるいけど行かないとなあ。

ノロノロ立ち上がると教室に入った。

学校が終わって帰り道。

俺はまた一人校門を出た。今日放課後にクボに「今日は奈美さんとデートしないのか？」と聞いたら、クボは泣き叫んで出ていった。俺が二人の関係を知ってから、ずっとあのまんま。何の進展も無し。春に知ったんだから、もう9カ月は経ってるハズ。まあ俺の方がもっと進展無しだけど。

新しい彼女も作れないままなんとなく学校に通う日々。全然つまんなかったけど……。

でもこの頃学校に行くのが少し楽しくなってきた。

それはクボや奈美さんが居るから、ってだけじゃない――。

考えてると家に着いた。「ただいまー」と言っただけドアを開ける。

でも返事は無かった。

「あれ？」

いつもなら誰かしら居るのに。

台所に入ったらテーブルの上の白い紙が目に入った。何か書いてある。何枚にも重ねてあった。

一番上の紙『急に仕事が入ったから家に居れない。姉』

二番目の紙『彼女とデートの約束が入っちゃったー！　じゃあな。兄』

三番目の紙『ご飯ちゃんと食べるのよー。母』

四番目の紙『いつも通りの時間に帰る。父』

合計四枚。みんな色んな事情があるみたいだ。母さんの事情は分かんないけど。

俺の家は結構広い。二階建てで、5人住んでもまだ全然余裕がある。こんな家に1人。なんか某映画っぽい展開だなあ。ホントに泥棒来たりして。あはははー！

考えてたら外からガタガタって音が聞こえてきた。

「……!!!!？」

反射的にテーブルの下に隠れた。

……俺何してんだ……。何17にもなってテーブルの下隠れてるんだ。地震でも無いのに。ここは外を見にくいしかないな。

でもやっぱり立って行くのは怖いから四つんばいになって見てみた。庭に出る為のガラス張りのドアをガラガラと開ける。

どうやら生垣の向こうから音がしてるみたいだ。緑色の小さい葉っぱの上から顔を出して見てみると——居たのは犬だった。

「子犬……？」

犬か。里砂が飼いたがってたな。

その犬は俺の方を見てきゅんきゅん鳴いてきた。

「迷子かな？」

みかんのダンボールに入ってる。いわゆる「捨て犬」かな？

俺はとりあえずその子犬を抱き上げた。耳が途中まで下がって、目がまん丸だ。

口の辺りが黒い。他のとこの色は全部茶色と白だった。胸と腹が白で、あとは茶色。

それとにくきゅうがピンク色。確か里砂に聞いた話ではにくきゅうがピンクいのは子犬だから、だったなあ。理由は忘れたけど。

だけど俺のここに来てきつと飼ってやれない。姉貴と母さん動物アレルギーだし。だからウチには金魚しか居ない。こういう動物も飼ってみたいと思うけど、反対されるよなあ。

誰か飼ってくれる人、居ないかな――。



## 第5話 犬の名前

「クボ、犬じゃない？」

次の日、俺は学校でクボに聞いてみた。

「犬？　なんでまた」

「や、昨日さ、俺の家の生垣んトコに居たんだ。子犬なんだけど」

「榎本ん家で飼えばいいじゃん？」

「ダメなんだよ。姉貴も母さんも動物アレルギーなんだ」

そう言くと、クボは自分の顔の前で手を横に振った。

「俺もダメなの。小さい頃に犬に噛まれた経験があってそれ以来ずつとダメ。小さくても大きくても」

ああ。そいえばそんなような事前に言ってた気がする。どうしようかな。クボの他に誰か……。杉浦とかどうだろ？

あ、でもアイツも犬ダメだって言ってたなあ。確かハスキーに伸し掛かれたんだっけ。噛まれてもそうだけど、それも結構シヨツクが大きいな。うーん……。どうしよう……。

「あつ奈美ちゃああん」

考えてると、クボが急に大声を出した。窓の外に奈美さんが見えた。やっぱり小田さんも一緒だ。

——そうだ！　奈美さん犬飼ってくれないかな。前に話した時に言ってたよな、犬好きな方だって。

「奈美さん」

俺はクボより先に奈美さんに近づいてった。

多分後ろではクボがしゃがみ込んでなんとも言えないオーラを放出してるだろうな。焼きもちで。ホントに奈美さんラブな奴だから。でも奈美さんはクボを気にしてない。もう慣れっ子になったみたいだ。

「なに？　どしたの？」

「犬いない？」

「犬？」

俺は奈美さんに昨日の出来事を話した。

「子犬かぁ。うん、確かに好きなんだけど、家マンションだからさあ……」

あ、そっか。問題はそこなんだ。奈美さんもダメとなると……元居た場所に戻すしかないかなぁ……。もっと早く現れてれば里砂に……って何考えてるんだ俺！

「そいえば彩乃、犬飼いたいって言ってなかったっけ？」

「え、そうなの！？」

「あ……うん。でも……聞いてみないと分からないし……」

「そっか。じゃあまた飼えるんだったら言って」

「うん」

やった！ 飼い主候補第1号！ これであの子犬も幸せになれるかな。

でもまあ、まだ決まったわけじゃないけど。

次の日、俺と小田さんはまた下駄箱で会った。

「おはよ！」

「おはよう！ ……あのね、聞いてみたの」

「あ、犬？」

「うん、そう」

2人で歩きながら話した。小田さんが家族に聞いてみてくれた結果、飼ってもいいとの事だったらしい。

「マジで！？ やった！」

「犬の種類はなんだった？」

「……あー俺ね、犬ってよく分かんないんだ」

「そうなんだ」

「多分……雑種、かな？ 血統書付きじゃなくて大丈夫？」

『血統書』と言う言葉に、自分で言っておきながら少し不安になった。だってあの子犬、もしかしたらその理由で捨てられたりしたのかも……。

「大丈夫だよ」

小田さんから帰ってきたのは俺が心配してたのと逆の答えだった。

「あのね、血統書付きよりも雑種の方が体強いんだよ。色んな犬が混ざり合ってるから」

「え、そうなんだ!？」

「うん」

「犬、詳しいの？」

俺がそう聞くと、小田さんは少し照れながら「詳しいって程でもないけど……」と言った。こんな人に飼ってもらえれば、あの子犬も幸せだよな、きつと。

あ、もう俺のクラスだ。

「じゃあ、どうしようか。犬」

「どうしようか、って……?」

「学校に連れてくるワケにはいかないじゃん」

「あ、そっか」

結局、小田さんの家の位置を聞いて、犬を渡す場所は、俺の家と小田さんの家の丁度中間辺りにある公園に決めた。

飼い主が決まって俺のテンションは最高潮になった。

「榎本おおお!! 俺より先に奈美に近づくとどーゆー事だよお  
お」

「あ、ゴメンなクボ!」

「俺イジケてんのになんでそんな笑顔なんだよう」

「なんでもねえよー」

「なんでもないって顔してない……」

授業中もずっと笑顔だったみたいで、何度か先生に注意された。でも口角を下げようとしてもまた上がっちゃうみたいで、クラスメイトに笑われた。

それでもいいや。笑われようが注意されようが、口角が上がるのは仕方ない。上がらせとこう。

この頃は休憩してたクボとの「じゃあな」。今日、久しぶりに校門の前で言った。

「じゃーな」

「おう、じゃあな」

なんか凄く久しぶりな気がした。実際は3日間くらいやってなかっただけなのに。

さて。早いとこ家に帰って着替えて公園へ！

家に帰ると、庭から子犬の声が聞こえた。家の中に入れると怒られるからとりあえずは母さん達に言い訳して一時的に庭で飼ってたんだ。でも今日からは堂々と暮らせるぞー。

良かったなあ、犬！ 小田さんなら大事にしてくれるだろうから。俺はちょっと子犬の頭を撫でて、家に入った。すぐに着替えて犬を抱き上げて、公園に向かう。俺と小田さんの家は結構近くにあるみたいだ。俺の家が3時の方向だとすると、小田さんの家は12時の方向。

……そこまで近くないかな。

でもクボの家と俺の家を比べたら近い方だ。だってアイツとは本っ当にに真逆だから。

犬を撫でながら歩いてると、子供が何人か寄ってきた。

「犬だ犬だー！ これおにいちゃんの犬ー？」

えーっと、なんて答えればいいんだろう。これからは違うくなるんだ、なんて言ったらなんか捨てるんだと勘違いされそうだし。一応、なんて言ったら子供は何でも知りたがるから詳細を聞いてくるだろうし。

「友達の犬だよ」

そう答えておいた。そしたら何も聞かれなかった。「へえー」って言われたくらいだ。

ちよっただけホッ。でもその反面ちよっただけ寂し。

でもそんな事に気付くはずも無く、子供たちは犬を撫でまくりながら「可愛い！」と連発していた。

世界には色んな人間が居るんだなあ。

俺は改めてそう考えた。だって日本の中の、しかも俺の住んでる町の中にだってこんな違う人間達が居る。犬が嫌いだったり大好きだったり、犬に詳しくなかったり詳しくなかったり。

本当に十人十色なんだ。

「みんな犬好きなんだね」

「うん、大好き！」

「おれも！」

「よっちゃんも大好きだよ！」

よっちゃんとは君の名前かな？ お兄さんに言われても分からないけど……とりあえず「そうなんだー。よっちゃんも大好きなんだねー？」って言うっておこう。

そして子供の中を抜けて公園へ。

まだ小田さんは来てないみたいだ。

「もうすぐ新ご主人に会えるからなー」

俺は子犬の頭を撫でながらそう言った。半分垂れ下がった耳は風が吹くたびピロピロ揺れる。大きくなってもこのままなのかな、それとも耳立つのかな。

ブランコに座って撫でてると、走る足音が聞こえてきた。足音の方を見ると――小田さんだ。

「お待たせ……」

ハ―ハ―息を切らしながらそう言った。俺はブランコから立ち上がると、「コイツだよ」と言っ小田さんの前に犬を出した。

小田さんは犬を見ると、疲れなんか吹っ飛んで笑顔になった。

犬も小田さんを見て、短くて細い尻尾をしきりに振ってる。なんかいいコンビだ。

「名前決めたら教えてね」

「もう決まったよ」

「え、早いね。何にしたの？」

「……ゆん」

「ゆん」？ それとも聞き間違えて「ゆう」？

「……………もっかい言って？」

「ゆ、ん」

小田さんはゆっくり言った。やっぱり聞き間違いでもなんでもなくて「ゆん」だった。

「ゆん？」

「ゆん」

なんか珍しい名前だけど、いいかも。韓国っぽい。

「いいね！」

「…そう？」

「うん、いいよ！」

小田さんは静かに微笑むと、「ちょっと心配だったんだ」と言った。

「心配？」

「変な名前じゃないか、って……。却下されちゃったらどうしよう、って……」

「却下なんてしないよ。飼い主は小田さんなんだから。小田さんが決めた名前ならなんでも喜ぶって！ なあゆん？」

上手い具合に吠えたりはしなかったけど、さっきよりも尻尾をブンブン振ってるように見えた。気のせいかもしれないけど、喜んでる事にしておこう。

だってその方が小田さんも犬も幸せだし。……勿論俺もね。

## 第5話 犬の名前（後書き）

話に出てきた子犬、ウチの犬がモデルになっています。そして実は名前まで一緒だったり・・・（笑）

## 第6話 ザ！おばさんカップル

あの犬——ゆんの事で、俺と小田さんが話す機会が多くなった。ゆんが小田さんに貰われてから1ヵ月が経った。

「ゆんね、ドンドン大きくなってくの」

「今どれくらい？」

「うーんと……これくらい」

小田さんは自分の膝より少し上くらいに手をやった。

「もうそんな！？ 犬の成長って早いの？」

「少なくとも人間よりは早いよ。1年で18才になっちゃうの」

「すごいね」

犬も小田さんも。よく犬の歳なんて覚えられるなあと思うよ。

俺なんて家族の誕生日覚えるだけで精一杯なのに。あ、今もう忘れかけてる。特に姉貴。

まず何月だったっけ……？

「あの子、産まれて2、3ヵ月は経ってたみたい」

そんな経ってたんだ。じゃあ母さん達に「外にやりなさい」って言われてた事とかも分かってたりすんのかな。

「じゃあもう3、4ヵ月？ 人間で言う……何才？」

「4、5才くらいかな」

「もう人間の言葉理解出来たりするの？」

だって公園で、あんなに尻尾ブンブン振ってたし。でももしそうなんだったら母さん達の言ったことは尚更可哀相だよなあ。

「理解かは分からないけど、しつけは6ヵ月くらいからなんだって」

「ふーん。なんで6ヵ月？」

「本で読んだだけだから詳しい事は分からないんだけど……」

「ん、そっか」

6ヵ月か。人間にすると何才だろ……？

……考えたところで何も分かんないや。犬の歳の取り方もイマイ



チ分かんないし。

かと言って何度も小田さんに質問するのもどうかと思うし。

「あ、もう教室だから…じゃあ」

「うん。バイバイ」

教室に入ろうとした時…：またクボかよー。

「随分仲良さそうじゃないの」

どこのおばさんだよ、お前。しかもその手。上下に振ってるから更におばさんっぽさ倍増。

「剛史ー」

「あ、奈美ちゃん」

俺はもうどうでも良くなったみたいだ。奈美さんの方に駆け寄っていった。何か話してる。奈美さんは何度か「え！」とか「うそ？」とか言ってた。

まさか俺の世話してるんじゃないだろうな。

だって怪しすぎ。奈美さん何度も俺の方見るし。

…でもまあいくらクボでも人の事ペラペラ喋るはずが――

「え、なに、榎本くん付き合ってるのー？」

奈美さんにそう言われて、俺はクボの胸元を引っ掴んだ。

「クボお前どんな説明したんだよっ！！」

「え？ 榎本ちゃんと彩乃ちゃんが仲良く喋って登校してて、もうすぐキスしそうだったよーって」

「……」

…：クボだもんな。まともな説明するワケないよな。

「付き合ってるの？ ねえねえ付き合ってるの？」

おばさん第2号。『ザ！ おばさんカップル』。

おばさんになろうがおじさんになろうが勝手なんだけどさ、でもとにかく、お願いだから2人して迫らないでくれ。なんか怖い。

あ、幸いもうすぐ朝のホームルームが始まる！

キーンコーンカーンコーン……

鳴った!! さあ奈美さん、自分のクラスに帰ってください。

「あー。鳴っちゃったー。また聞かしてねえ」

そう言って奈美さんは手をヒラヒラさせて、帰っていった。とりあえずは助かった……。だけど問題はクボだ。

また授業中に俺の方を向いて聞いてきた。やっぱり前を向け、と言っても意味無し。

でも俺、付き合ってねえよ、とは言えない。言いたくないって方が正解のかな。

授業も終わり、放課後、俺は部活に行く準備をしていた。もうすぐ大会だから気合入れないとなあ。練習は大変だけど。マイバスケツトボールを持って、体育館に向かおうとした時、3組の方から小田さんが走ってきていた。

「小田さん？」

「え…あっ！」

俺には今気付いたみたいだ。そんな一生懸命走って何してんだろ？

「どうしたの？」

「あ、あの、あのね……？」

息を切らしながら途切れ途切れに話した。なんでも家族が目を離してる隙にゆんが脱走したらしい。しかもその向かった先は――

「学校!？」

小田さんは叫ぶ俺に向かってただひたすら首を縦に振った。先生とか生徒とかに見つかったらヤバイじゃん!

「俺も手伝うから…えっと……じゃあ小田さんあっち捜して!」

「う、うん」

俺と小田さんは逆の方向に向かって走った。ボールが教室内で寂しく転がってたけど、今はもうそんな関係ない。

階段を駆け上がって2階を捜したけど……居ない…。

――お?

向こうから何か聞こえる。美術室の方だ。カチャカチャカチャ……って……。

あ。あの顔が黒いのは……ゆん!?

走ってくる走ってくる——あ、滑った。最後はスライディングっぽくなって俺のそばに寄ってきた……と思ったら素通りした。しかもスッゴイわざとっぽい。

美術室と反対側にある教室、音楽室の扉にぶつかりそうになった時、ギリギリで止まった。

「ゆんー! 何脱走してるんだよ」

俺は後ろからゆんを抱きかかえるようにして捕獲した。滅茶苦茶なくらい嫌がってるけど、絶対離さないぞ。

「榎本くーーん」

さっきゆんが走ってきた方から小田さんも走ってきた。あ、滑った。

俺の目の前でズッテンと転んだ。

「だ、大丈夫……?」

俺が手を差し出すと、顔を赤らめてそれを掴んだ。

「はい、ゆん」

「ありがとう。……ゆん……! 脱走しちゃダメでしょ! 車にでもひかれたらどうするの!？」

小田さんはゆんに向かってそう叫んだ。ゆんは元々申し訳なさそうな顔してるけど、その顔がもっとヘタレくんになった。

……でも安心した。やっぱり小田さんはゆんを可愛がってくれてるんだ。

2人で笑っていると、他の生徒達が話す声が聞こえてきた。

「ヤベッ!」

隠れるところを探したけど、どこも無い。仕方なくダメ元で音楽室のドアに手を掛けると、狙ってたんじゃないかってくらい運良く鍵が開いてた。

「小田さん、早く!」

「あ、うん」

嫌がるゆんを無理矢理連れて、俺達は音楽室の中に入った。入っちゃえばとりあえず安心。

だけどずつとゆんを抱いていた小田さんの制服は毛むくじゃらだった。

「ゆん、毛が抜けやすいの？」

「そうなの！ だからこの子が座った後のソファなんて座れない状態」

「え、じゃあどうしてるの？」

「もう飼うところを玄関先に移したの。靴は毛だらけだけど、家中じゃないだけまだいいから……」

そうなのか。脱走するだけじゃないんだ、迷惑さは。あれ？ しかもゆん……。

「ねえ、ゆん、なんか歯出てない？」

「あ、そうそう！ なんか成長するに連れて下の歯が出てきちゃって………榎本くん？」

しまった！ 笑っちゃった。だって凄いマヌケ顔だし、反っ歯だし、笑いを止めようと思っても止まらない！！ それにゆん、自分の事を笑われてるって気付いてないのかな。俯うつむいてる俺の頭の匂い嗅いでる。フンフンフン鼻息が聞こえて、時々硬いものが当たる。

その予想は大体つく。それは、下の歯。

「あー苦しかった。でも最初見た時は歯なんて無かったよね」

「最初は唇だけちょっと出てたの。だけどこの間フツと見たら白いものが見えて……」

「それがこの歯だったんだ？」

また笑いそうになった俺が聞くと、小田さんも笑って「うん」と言った。

そろそろ声が聞こえなくなったので、外を確認してから急いで出た。小田さんはゆんを抱いて帰っていった。最後に「ありがとう」

と言って。

「さてと。俺も帰……」

部活忘れてた！！！！ 顧問に怒られる！ またクボに笑われる！

！ 早く行かないと！！

俺は教室に戻ってボールを持つと、急いで体育館に向かった。

30分の遅刻は大きくて、やっぱり怒られた。

そしてクボに笑われた。

## 第7話 ジャングルジムの向こうに

昨日、部活中ずっとクボに笑われてからかわれてたのは嫌だったけど、成長したゆんを見れて良かった。

小田さんもゆんを大事にしてくれてて本当に良かった。ゆんも絶対幸せ……

「おはよう」

「……ん、え！ あ……おはよ！」

考え事してたら、今日は小田さんの方から挨拶してきた。ビックリした……。

「あ、驚かせちゃった？ ごめんね」

「いやいや。なんか今日元気だね？」

「そう？」

「何かいい事あった？」

そう聞くと、小田さんは少し恥ずかしそうに「昨日……」と言いつ出した。

昨日……は、ゆんが脱走した日だ。それと小田さんからゆんに対する愛情度が分かった日。

「あんなにね、一生懸命捜してくれて……嬉しかった。だから……ありがとう」

「昨日の帰りにもお礼言われたよ？」

「でも今日も……本当に嬉しかったから……」

俺も小田さんにお礼言いたいんだよ。

「ゆんを大事にしてくれてて、ありがとう」  
なんかちよつと臭いセリフだったかな……。

あー！ ヤバイ！ 言った後に恥ずかしくなってきた！……！

俺は頭を抱えて廊下の隅に座り込んだ。後ろから小田さんが呼んでるけど、顔見れないよ……！

「榎本くん？ ありがとうね？ あの……嬉しいよ？ 犬くれただ

けでも嬉しいのに「ありがとう」なんて言われちゃって…なんか本当に嬉しいよ？ あ、そうだ！ あの、またゆんと遊んであげてくれる？」

「……え？」

ゆんと、遊ぶ？ そりゃもう喜んで！

「い、嫌？ 嫌なら嫌って言って？ あの……」

「うん。遊ぶよ！ 喜んで」

俺がそう言うと、小田さんは嬉しそうな安心したような笑顔を見せた。

「何よ、何よ。やっぱり付き合ってるんじゃないの？ その2人」

「うわっ！ 奈美さん………とクボ」

「俺はオマケかい？」

声は奈美さんの物だ。クボは本当に商品のオマケみたいに奈美さんの横に立ってる。

オマケって言われても仕方ないんじゃないかってくらいヒッソリ立ってる。

「ねーえ、やっぱり付き合ってるんでしょお？」

「ちっ違うよ！ 付き合ってるなんてないよ！ 私と榎本くんはただの友達！」

——あれ？

なんか今、ちょっと胸がズキン、って……。  
ズキン、って言うかドキン、って言うか………なんだろこれ……。

「友達？ ただの友達い？ 本当かしら」

友達って言葉にズキズキする。なんだ。

…なんだこれ……。

「榎本くん。彩乃ちゃんはただの友達って言ってますが榎本の意見はどうで…」

「やめろよッ！！」

——あ、しまった……。つい怒鳴って……。

その場の空気が凍るのが、分かった。

「榎本お、何怒ってんだよう。悪かったよー」

放課後に、クボが謝ってきた。

「だからもういいって」

「ホラホラ、なんかその言い方まだ怒ってるでしょ」

「怒ってねえよ」

「あーっ！ 今のもそうだー！ まだ怒ってるー」

「うるせえな怒ってないっつつってんだろ！！」

……また怒鳴っちゃったよ……。俺って短気なのかな……。

「ご、ごめんってばホントに」

「ごめん、クボ。なんかさっきから異様にムカムカしてて……」

「ムカムカ？ なんでだよ？」

「……分かんないんだ」

本当に分かんない。付き合ってるの？ って聞かれて付き合っていないよって言えないのは……。小田さんに「友達」と言われて胸が痛んだのは……。

なんでか分かんない。こんな感情、初めてだ……。

小田さんとは友達で、間違っても恋人同士ではなくて……。

「いい友達」なんだ。俺が犬をあげて、その犬を通じてより仲良くなって、友達のレベルが上がって……。

ただそれだけで……。

……なんでだよ。

友達だ、と自分に言い聞かせれば言い聞かせるほど胸が痛む。……締め付けられるんだ。

これは……「好き」って言う感情……？



里砂の時には感じなかった気持ち——。

その日、俺は家に帰ってから考えた。小田さんと出会ってから1カ月は経ってる。最初に奈美さんの後ろに居たのを見た時から好きになってたのかもしれない。

いわゆる「一目惚れ」ってヤツだ。

だけど、俺は彼女を作るのが怖くて。また他の男に取られるんじゃないかと怖くて、勇気がなくて、小田さんを好きって気持ちを自分で抑えつけてたのかもしれない。

でも俺今、小田さんの顔思い出すだけで心臓が張り裂けそうなんだ。

顔を思い出す際に不思議なのは……

それをゆんのマネケ顔が邪魔をするって事。

どうも俺はあの反っ歯にハマってしまったみたいだ。

あのなんとも言えないヘタレ顔。マネケ顔。小田さん曰く『散歩では豹変する』らしい。

愛嬌のある顔って言えばあるけど、俺の頭の中にはケンケンしか思い浮かばない。

ゆんが「キッシッシシ」って笑ってる姿。チキチキマシン猛レースに出てる姿。

なんでゆんが出て来るんだよ。俺は小田さんを思い出してるのに……。

「……おい、まさか」

俺は……

ゆんに恋してる!?

——我ながらバカな事を考えてしまった。

ゆんに恋するハズが無い。だってアイツはオス、俺もオス。同性愛になっちゃうじゃん。

今の天気は雨。外からザーザー音が聞こえる。その夜の俺の夢には、ゆんばかりが出てきた。あの白い下の歯を俺の顔にこすり付けてる夢。

痛いよ、ゆん。

次の日、学校は休みだった。昨日の雨が嘘のようない天気だったから、俺は散歩に出た。

そうだ。久しぶりにあの公園に行ってみよう。あの小田さんにゆんを渡したあの公園。

行ってみると、昨日の夜の雨で出来たぬかるみに犬の足跡が付いていた。

「ゆんか……?」

まさかね。……まさか。……マジで?

そう、俺は見えてしまった。ジャングルジムの向こうに見える黒い顔。黒い中に出てる白い物を。

「……ゆんっ?」

声をあげると、1秒遅れて俺の方を見た。柔らかそうな薄っぺらい耳がピロッと揺れた。

そしてその向こうに居るのは——小田さん。

さっきまで強かった日差しは雲によって隠された。俺は額に置いてた手を下ろして小田さんとゆんを見た。

小田さんはまだ俺に気付いてないみたいだ。ゆんだけがこっちを見てる。カラフルなジャングルジムの向こうから。

黒い顔の下からは赤い首輪が覗いてた。リードも赤。俺の中では「青はオス」、「赤はメス」って感じで勝手に決まってたから少し変な感じもした。

だけど何故かゆんには似合ってる。ゆんにはシックリくる。赤い首輪、赤いリードが。

ずっと見てたら小田さんの黒い髪が見えた。短めのショートヘアがそよ風に揺れてる。サラサラだ。

俺は今どんな顔してるんだろう。マヌケな顔してるのかな、ゆんに負けないくらいいの。小田さん見ると顔に力入れる事さえ面倒くさくなる。小田さんはどんな顔でゆんの散歩をしてるんだろう。

話したい。顔を見たい。でも今行ったら言いたくなる。言いたいけど、物凄く言いたいけど、言ったら小田さんは、きっと俺を傷付けないように、って考えて優しく断る方法を考えるだろうから……。

小田さんを苦しませる結果になってしまうのは嫌だから……。

言いたいけど言わない。言えない——。

(……とりあえず帰ろ)

俺は公園を出た。ゆんがずっとこっちを見てたのは分かってたけど、振り返る事が出来なかった。

「今なら間に合う」、「今戻れば言える」って。そう思って早まりそう。

今回気付いた。俺は慎重型なんだ。直球型じゃないみたいだ。直球でいければ……どれだけ楽だろう。

クボは直球型の典型的な例だろうな。

——公園を出てから心にモヤモヤした物が引っ掛かってる。

それは俺の心へ光を当てない物で、闇のモヤモヤで、俺の心に配布される光の道を遮る物。そして光が当たらない限り俺に勇気はわからない。

きっと今そのモヤモヤのせいで言えないんだ。  
きっと……。

居るのに。すぐそこに居るのに、言えない。

カラフルなジャングルジムを抜ければ目の前に顔があるのに、  
そんな近くに居るのに、言えない。

もどかしい気持ちが俺を攻撃する。今弱ってる心に傷をたくさん  
入れてく。

俺は、

どうしたらいい———？

## 第8話 彼女と犬と公園で

俺は今この気持ちをどうしたらいいのかわからなくなってる。

あの公園で小田さんを見てから1週間が経った。

季節は秋、外は落ち葉でいっぱいだ。

清掃委員の人達が必死こいて落ち葉を集めてる。後ろからクボが話し掛けてきてるけど、耳に入らない。俺には目に入るものがあるだけ。運動場を奈美さんと歩いてる小田さんだけ。

気付かないうちに、無意識のうちに、俺は小田さんを捜してる。捜し出すとずっと目で追ってる。なんかストーカーっぽいけど、どうしようも無いんだ。

やめようと思ってもやめられない。

「……はあ……」

俺の口からため息が零れた。なんでこんな恋する少女、みたいになってるんだよ。

「榎本ー？ 俺、もう帰るよ？」

「……………」

「無視かよー！ 奈美ちゃあああん！ 榎本くんが素っ気無ーーい！！」

クボはそう言って出てった。ごめんな、今お前の相手してられるほど心に余裕無いんだ。

じきに小田さんは校門を出て、見えなくなった。教室には俺だけが残っていた。

仕方ないから帰ろう。

帰り道、秋の景色が凄く寂しく思えた。だってそうだろう？

例えば木の上の葉っぱに同じ木の葉っぱが恋してるとしても、季節が来たら別れなくちゃならない。嫌でも別れなきゃならないんだ。

下で会える可能性は少ない。同じ木に居るのに迷ってたら、「好き」

って言えないまま生涯を閉じなくちゃならない。

はあ……哀しいねえ。

そんな事を思いながら、俺は葉っぱと自分を重ね合わせてた。

あの時、あの公園で見た時。

俺はすぐにでも駆け寄ってって「好きだ」って言うべきだったのかもしれない。だって人間だっていつ死ぬかなんて分からない。

もしかしたら帰り道事故にあってたかもしれないし……。

言いたい時に言わないとチャンスはどんどん逃げてく。

俺なんて見す見すチャンス逃してしまった大馬鹿だ。1週間ずつと心にモヤモヤが掛かったまま。

「……闇のモヤモヤなんてクソ食らえー!!」

道路の真ん中で叫んだ。通行人の中には笑う人も居た。驚く人も、バカにする人も、呆れる人も。

俺の叫び声は何十キロも遠くの山の方まで凄いスピードで走っていった。そして少し仲間を置いて俺のところに帰ってきた。往復1秒も掛かってない。人間だったらギネスブックに載れるなあ、絶対。

……また今度「ゆんと遊びにきた」って口実で小田さんに会いに行こうか……。

ゆんを渡す時に住所聞いたし。

でもなんで急に来るの、なんて思われたら嫌だ。そんな事思われたらもう終わりだ。こんな時、里砂の時ならどうしたっけ……。

——あ、そうか。里砂の時は向こうから告白してきたんだっけ。だから俺はこんな歯痒い思いをしないで済んだんだ。

あーもー! こんなの経験無いからどうしたらいいのか分からないよ!

クボと奈美さんはどうやって付き合ってたんだろう。

明日聞いてみよう。

「えー？　なんか友達になって自然に付き合ってた感じだよ」

俺は次の日、学校でクボに聞いてみた。奈美さんと付き合ったキツカケを。

「自然に？」

「そ。俺が何度も何度も「奈美ちゃん」って呼びに行くから付き合ってるって思われて、それで噂されて」

「へえ……」

そうか。そんな事もあるんだ。そんな付き合い方だってあるんだ・。。

俺もそうすればいいのか！

毎日毎日3組に行って「小田さーん」って！

……………。

……無理に決まってんじゃなかよお！！

しかも「小田さん」なんてまだまだ全然他人行儀だし……。何か用なんだ、くらいで終わるのがオチだなあ、きつと。

ああ。今回ばかりはクボが羨ましい。

やっぱ俺は告白タイムを設けるしかないのか……。

でもこのモヤモヤが取れない限り告白なんて出来るハズねえよお！

「クボおおっ！」

「あらヤダ榎本くんたらこんなトコで」

……こんな奴にしがみ付いた俺がバカだった。誰かモヤモヤを取る方法を教えてくれー！

「あ、奈美ちゃん！　彩乃ちゃんも」

頭を抱えてる俺の隣で、クボが声をあげた。いつもみたいに奈美さんが窓からこっち見てる。そしてクボが犬みたいに寄ってくる。最初「彩乃」って言われても分からなかったけど、小田さんだ。

「ホラホラ、榎本くんもおいでー」

ちよっと迷ったけど行くことにした。今は昼。「おはよう」なら軽く言えるけど「こんにちは」とかになると少し小っ恥ずかしいっ

て言うか、照れるって言うか、言いにくいって言うか……。

「こんにちは、榎本くん」

ワタワタしてたら小田さんから声を掛けてくれた。ああ、良かった。言い易くなったかな。

「こんにちは」

あー。こうして目の前に居られると余計言いたくなる。いや、居てくれていんだけど、嫌じゃないんだけど……全然嫌じゃないんだけど……。

「あ、ねえ……前に言ったでしょ？ ゆんと遊んでほしい、って……」

「ん？ ああ……」

「それでね、今日はどうかなって……」  
今日……！

急だけど今日……！

急だけどいいよ！ 全然いいよ！

「うん、いいよ！」

「ホント！？ ありがとう！ じゃあ……あの公園、来てくれる……」

「分かった」

笑ってる俺達の隣でクボと奈美さんが話してる。隣だから嫌でも聞こえた。

「ねえねえ奈美ちゃん、あの2人……」

「仲良いわよねえー」

「うん、そう！ 仲良い！ なんで付き合わないのか不思議なくらい」

「彩乃って男子と話すの苦手なのよ。でも榎本くとだとあーんなに！」

へえ、苦手なのか。うん、まあなんとなく分かるけど。男子とペラペラ喋るようなタイプじゃなさそうだしね。

でもだったら尚更嬉しい。だってなんか俺だけ特別って感じがす



る。

「あ、もうすぐチャイム鳴るよ」

「ホントだ。じゃあ……来てね……?」

「うん」

俺は小田さんに軽く手を振って席に着いた。

放課後、午後6時。

いつも通りクボと校門の前で別れて家に走って帰ってきた。

ゆんに会える、それも嬉しいけど、小田さんに会える!

そっちの方がもっと嬉しかった。

私服に着替えて家を出た。公園までは歩いて8分、走って5分と言ったところ。

小さい頃に調べたから分かってる。

さすがに今の季節には「虫網持った半袖半ズボンの少年等」は通らないけど、紅葉を「綺麗だ」って見にくるおじさん、お婆さんは居る。みんな愛想がいいからこっちも挨拶したくなる。

「こんにちは」

「あらこんにちは。紅葉が綺麗ねー」

「はい、もう少し経つともっと綺麗になりますよ」

「そうなのー。大体何月頃かしら?」

「今月の下旬頃には」

「じゃあまた見に来させてもらうわねえ」

「是非!」

紅葉の季節の会話はこんな感じ。小さい頃から「観光客の人にはちゃんと挨拶しなさいね」って言われてきたからもう慣れた。変な質問さえされなければドモる事はない。

変な質問って言うのは例えば……。

「こんにちは」

「こんにちはー！」

「元気だね、小学生かな？」

「そうだぜ！ おれ達子供だけで来たんだぜ！」

「へえー。凄いねえ」

「ねえねえ彼女居んの？」

「こんなのとか。」

この頃は変な事聞いてくる子供が増えたから困ってる……。この間なんて「もうエッチした！？」って聞いてくる子供まで居た。

小学校高学年くらいは色んな事聞きたがるからなあ。どんな返ししたらいいか分かんなくなるよ。でも今回はそんな子達居なかったからよかった。

毎年毎年紅葉ばっかで見飽きたけど、やっぱり綺麗なのは否めない。公園に着くまでの間、俺は久しぶりに紅葉を満喫した。

公園に着くと、小田さんとゆんはベンチの所に居た。

「小田さん」

俺が声を掛けるとハッと顔を上げて立ち上がった。

「ゴメンお待たせ」

「ううん、大丈夫」

「ゆん、大きくなったな、お前」

「もう体重が13キロもあるんだよ」

「え。そんなに？」

でもやっぱ人間よりは重くならないんだ。そりゃそうだよな。でなきや病院とか行く時大変だし。

「抱いてみる？」

「あ、うん。じゃあ折角だから」

一度小田さんが抱き上げて、そこから俺に抱かせてくれた。小田さんの手から俺の手に渡す時にちよつと触れてビックリしたけど、むこうはそんなに意識してないみたいだ。

「前足の下とお尻を持って抱え込むように……そう、上手！」

「…う……お、重いね……」

「あ、重かったら下ろしていいからね？」

「うん」

ゆん暖かい。小田さんの手の温もりも残ってるようで……もっと暖かく感じた。

でもさすがに腕が痛くなってきたからゆんを下ろした。

それから犬の事をたくさん教えてもらった。抱き方とか種類とか、餌とか。

犬は前足の付け根部分だけで抱いちゃいけないみたい。腰や背中に負担が掛かるから。

種類もたくさんいるんだ。今日初めて知った名前とか凄い出てきた。中でも一番長かったのは………。

「一番長い名前の犬、なんだっけ？」

「ノヴァ・スコティア・ダック・トリーング・レトリバーだよ」

うーん、さすが。3回言ってって言われたら俺には無理。まず覚えられない。

その犬種はレトリバーの中でも最小らしい。

小田さんは犬の耳の種類とかもよく知ってた。

「…パピヨン……」

「え？」

「パピヨンの耳ってなんて言うの？ あの蝶々みたいなの」

「ああ、あれはバタフライ・イアって言うの。榎本くんの言った通り耳が蝶々みたいだから」

「へー。そのまんまなんだ？」

「うん」

バタフライ・イア。あともう1個は、ノヴァ………。

ノヴァ……スコピオン・ドック・トリーニング・レトリバー……？

…絶対違うな…。

まあいつか。——あ、そういえば……

「小田さんって携帯とか持ってるの？」

「ううん。持つんなら自分で払いなさいって言われてるからちょっと……」

「そうなんだ」

「榎本くんは？」

「俺もまだ。調子乗って凄く使っちゃいそうだから」

頭掻きながらそう言うのと、小田さんは笑って「私も」と言った。その後、俺はゆんと一緒に走り回ったりして遊んだ。

気が付くと辺りは暗くなって、紅葉を見に来てたおばさん達ももう居なかった。

時刻は8時。ヤバイ、遊びすぎた。

「もうそろそろ帰らないとマズイね」

「え？ あ、ホントだ！」

小田さんも今気付いたみたいだ。

「暗いから家まで送ってくよ」

「え、大丈夫だよ！ そんなの悪いし……」

えー。ホントに大丈夫かなあ？

だって何かあってもゆんじゃ助けてあげられそうにないし。

ホラ、今でも何か音がするだけで尻尾足の間仕舞い込んでやうような犬だし。

「いいよ、送ってく」

「でも……」

「ゆんじゃ頼りないじゃん」

俺は笑ってゆんの頭を撫でた。怖くても俺の匂いは嗅ぐみたい。

緊張して泡の出てきた口（鼻？）を俺に近づけてきた。

それを見て、小田さんは笑った。そして「じゃあ……お願いします」と言ってくれた。

帰りはゆんのリードを俺が持った。ゆんは見かけによらず凄い力で、気を抜くところちが引きずられそうだった。

「こんな力でいつも散歩してるの？」

「凄い力でしょ」

「うん。やっぱオスなんだね」

「私も散歩の時に初めて実感した！」

「オスって事を？」

「そう」

また笑った。

小田さんはよく笑う。可愛らしい笑顔をよく俺に見せてくれる。その笑顔を見てると独占したくなる。笑顔を、そして小田さん自身を。

……なんかこんな臭い事考えてるのが自分で恥ずかしくなってきた……。

「ここだよ」

隣で声がした。指を差された方を見ると、結構大きめな家が建ってた。表札には『小田』って書かれてる。まあ当たり前だけど。

小田さんの家は意外と普通。門があってドアがあって……ドアは白い。なんだか小田さんらしい。

でもその足元を見ると——黒い。

ゆんの顔は黒い。真っ黒。その黒い顔からピンクい舌を出してこっちを見てる。

真っ白なドアを開けて出迎える顔が真っ黒なゆん。

ギャップが激しすぎて腰抜かしそうなほど真逆。まるでオセロ。

「じゃあ、ありがとう」

門を開けて、中に入りながら小田さんは言った。ゆんも門の中に入れてから、俺の方を見た。

「うん。また明日」

「気をつけてね」

「ありがとう。バイバイ。……じゃあな、ゆん」

最後にゆんの頭をちょいと撫でて、俺は家に帰った。

——その後姿を小田さんが見つめてるとも知らず。



## 第9話 闇のモヤモヤ吹き飛んだ！

小田さん家のゆんと遊んでからもう5日が経った。

何事も無く、凄く平和。葛藤が起こってるのは俺の心の中だけ。

『告れ君』と『告るな君』が戦ってる。今の所優勢なのは『告るな君』。だから俺は告白しない。こじ付けがましいけど本当にそうなんだ。

未だ心のモヤモヤは取れない。何がどうなってモヤモヤが付いたのか分からないけど、とにかく取れない。歯と歯の間に挟まったササミ肉みたいに取れない。

そんなある日、俺は1人の女子に呼び出された。朝学校に来てみたら机の中に手紙が入ってたんだ。

場所は体育館内の『器具倉庫』。放課後に来て、との事だった。なんでこんな所なんだろう、って思ったけど、見つかりにくいって言えば見つかりにくい。

部活でも無ければこんな所にわざわざ入ってくる人なんて居ない。俺が待ってたら、倉庫のドアが開いた。女1人と男1人。呼び出された理由は分かる。

「ごめんね、待たせた？」

「別に……」

「……あたしね、晴樹の事が好きなの」

ちなみに俺は学校内のイケイケギャルっぽい人達には「晴樹」と呼ばれてる。

普通の子達は「榎本くん」とか「エノ」とか「榎本」とか呼んでくるけど。

「晴樹はあたしの事どう思ってる？」

「……………」

「……ねえ」

「ゴメン！」

「……え？ ……ダメ……？」

「俺今好きな人が居る。だから……ゴメン」

俺が下向いて謝ると、その子は俺の顔を覗きこんだ。

「……小田さん」？

「え！？」

焦って顔を上げると笑ってた。「なんで知ってるの」って聞いた  
ら、「仲良さそうじゃん」って言った。ついでに「晴樹分かり易い  
よー」とも言われた。

その子は玉砕覚悟で告白してくれたらしい。「頑張りな」って背  
中を押された。

この瞬間、俺の中で『告るな君』を倒した者が居た。紛れも無く  
『告れ君』だ。

「……ありがとう……！！！」

俺はその子にお礼を言った。相手は「何の事？」って顔をしてた  
けど、俺にはちゃんと勇気がわいてきていた。闇のモヤモヤも取れ  
た！

久しぶりに心に光が当たったんだ。ありがとう、イケイケギャル  
！！！！

俺は走って3組に行った。でももう誰の姿も無かった。次は下駄  
箱。結構たくさん生徒は居たけど、彼女の姿は無い。

上履きのまま運動場に出た。そのまま真ん中を突っ切って校門へ。  
他の生徒達が興味本位で見てきたけど、もう関係ない。

中には「(何だか分かんないけど)頑張れー！」と叫んでくれる  
奴も居た。校門を出て左右を見渡す。向こうの方にそれらしき人物  
が————居るような居ないような……。

違ってもいい。とにかく走った。その人が角を曲がった時、や  
っと追いついた。肩を掴むとその人は驚いた顔でこっちを見た。

……違う。

「すいません間違えました」

そう言ってまた走る。一応見つからなかった時の最終目的地は小



田さん宅。この間送ってって良かった。

小田さんの家目指して走る、走る、走る。足がもつれて転びそうになったり、口や喉がカラカラに乾いたりしたけど、走った。思った時に言わないともう言えない。

俺は一度ジャングルジムでチャンスを逃してしまったから、今度こそは失敗しない。逃さない。

今度こそ——言う！

あの公園を抜けて、とうとう小田さんの家の近くまでやってきた。だけどそれらしき人物は未だ見つからず。

家に帰ってるのかな。

門の前に立った。白い柱に黒いインターホンが付いてる。

……押さないと……。押さないと出てこない。出てこなきゃ言えない。

だけどボタンのすぐ前で俺の指は止まってしまう。何て言ったって女の子の家だ。男が来たら両親は驚くに決まってる。

……どうしよう……。

あともう少し。

あとほんの一握りでいいんだ。勇気が欲しい……！

届け……。動けよ、俺の指……！

「あつれー!? 榎本くん？」

ピーンポーン（正解音&インターホン）。

……ああああああああッ……！！！！

おおおおお押しっ……押しっ……押しちゃった………ツツ！

!!

後ろに居たのは……奈美さんだった。

「……な、ななな奈美さん……」

「え、何？ どしたの？ あたしなんかマズイことしちゃっ……」

「ありがとう……!」

なのか？ うん、まあいいや。押せちゃったんだから仕方ない。不思議そうな顔の奈美さんの前で、1人納得しているとドアが開いた。あのゆんとのギャップが激しい真っ白なドアが。

中から出てきたのは、中年の女性だった。多分小田さんのお母さん……。

なんか目が似てる。

「……あら……。どなたかしら？」

「あのっ！ えっと……小田さんの……」

「彩乃のお友達……？」

「あ、はい……。あの、小田さんいらっしゃいますか……？」

「ごめんなさいね、まだ帰ってきてないのよ」

「……ああ。そう、ですか」

「あのー、良かったらお茶でも……」

小田さんのお母さんの中には入れようとしてくれたけど、そんな大胆な事が出来るはずがない。

「けけけけ結構です！ すいません気を使わせてしまっ……!」

あのっ……し、失礼します!!」

俺は走ってその場を抜けた。

あーもー!! なんてここまで来てっ……!!

しばらく走ったところで体力も限界。倒れ込んだ。下はお世辞でも綺麗と言える所じゃないけど、もうなんでもいいや。もうダメ。もう走れない。

上履きが削れて足が痛い……。せっかく『告れ君』が勝ってくれたのに。きつと明日になったらまた『告るな君』が優勢になるだろうな……。

きっとこのまま小田さんに告白出来ないまま高校生活終わるんだ。  
この状態がエンドレスなんだ。勇気をくれ……。

誰か……勇気を俺にください……………。

「榎本くん。大丈夫？」

気が付くと奈美さんも自転車で追ってきてたみたいだ。俺の顔覗きこんでる。

「……大、丈夫……」

「ね、やっぱ彩乃の事好きなの？」

……もう誤魔化す事はない。俺は小田さんが好きだ。誰にも隠す事なんてない。

「……好きだよ」

俺は秋の空を見上げながらそう答えた。もう言うってから恥ずかしいなんて、そんな思いは無い。だって本当の気持ちなんだ。

そこで奈美さんがフツと笑ったのが分かった。

「そっかぁ……」

「ねえ奈美さん」

「うん？」

「小田さんは……俺の事嫌いじゃないかな」

少しの間沈黙が流れた。なんかちよつと緊張する……。夕焼けに照らされた山の方でカラスの鳴き声がして、奈美さんが口を開いた。  
「あたしには分からないなぁ……」

……やっぱそうだな……。奈美さんと小田さんは別人なんだから。

「でも」

奈美さんは山の方を見て言った。「嫌いではないと思うよ」って。そう言うのと立ち上がって、「あたしが見た限りではね」って言った。今は凄くありがたい言葉。やっぱりまだ俺の中では『告れ君』が『告るな君』の上に申し掛かったままだ。言わなきゃ。

上履きが削れても喉がカラカラになっても足がもつれて転んでも。  
言わなきゃ……………!!

「奈美さんありがとう!!」

起き上がってそう言くと、奈美さんは笑顔で頷いてくれた。  
そしてまた俺は走った。

小田さんが見つかからない限り地の果てまで行く覚悟で。

## 第10話 決心

地の果てまで行く覚悟で走り出した俺。

でもそんな覚悟とは裏腹に、果てまで行かなくとも小田さんは居た。俺の住む町の果てまでも行かないほど近い所に。

小田さんが居たのはあの公園だった。制服のままブランコに乗ってキーコキーコ漕いでた。

「……1人じゃ、危ない、よ……？」

俺は近づいてって声を掛けた。息が切れてるせいで切れ切れになっちゃったけど、小田さんの耳にちゃんと届いたみたいだ。

「あ！ ……………」

「……どうしたの？」

「ちょっと……寄り道」

小田さんは困ったような笑い顔でそう言った。

「それにしたって……危ないよ」

「えへへ……。そうだね」

「……何かあった？」

俺はブランコの柵に座って聞いた。小田さんは最初は「ううん」って首を横に振ってたけど、段々無理に上がらせてた口角が下がってって、最後にはポタポタ涙を落とし始めた。

「ちよっ……お、小田さん！？ だいじょ……」

「ごめんね……大丈夫………」

涙を拭いながら言った。泣いてる小田さんを目の前にして、俺は少し戸惑っていた。

……告白するって決めたはいいけどなかなか言うタイミングが掴めない……。

とりあえず、俺は制服のポケットに手をつ突っ込んでハンカチかティッシュを探した。でも狭いポケットの中で、どれだけ自分の手を探検させても見つからなかった。制服の胸ポケットも探したけど、

入ってるのは生徒手帳と何故か500円玉だけ。

探してると小田さんは自分でハンカチを取り出した。

……俺ってとことんダメな奴……。こんな時、ハンカチの1つでも持っていれば小田さんに差し出してあげたのに。ハンカチ王子の真似をして笑わせる事も出来たかも知れない。

俺、ゆんよりマヌケかも……。失礼だけど。

涙を拭き終わって、小田さんはブランコから立ち上がった。

「ごめんね。なんか……」

「別に……いいよ」

「じゃあ、そろそろ帰るね……」

「暗いけど……」

「大丈夫」

小田さんは笑った。でも作り笑顔だって事はすぐ分かる。だって口の端が震えてたから。最後にまた「ごめんね」と言うと、小田さんは公園を出ようとした。

俺の頭の中では1つの言葉だけがグルグル回ってた。

「言え」。ただそれだけ。「好きだ」、その3文字を言えば自分の気持ちは伝わるのに、どうしても言えない。最初の言葉が出てこない。

喉の辺までは出掛かってるんだ。だけど心臓が尋常じゃないくらい音を立ててそれを邪魔する。でも………。

でも……イケイケギャルから貰った勇気があるじゃないか。奈美さんから貰った勇気があるじゃないか。

2人からグラムでもキロでも表せないくらい沢山の勇気を貰ったじゃないか。

そしてとうとう、

小田さんが公園の黄色いポールを通り過ぎた時、

俺は動き出した。

黒く汚れた、底が削れた上履きで。

「小田さん!!」

緊張で声がふにゃふにゃだったけど、小田さんは振り向いてくれた。俺も黄色いポールを通り過ぎて、彼女の目の前に立った。

「……どうしたの……?」

「俺………。好……」

そこで公園の時計が音を出した。針は9時を差してた。「公園に座ってないで帰れー」と言う為の音楽だ。その音楽によって俺の言葉は止まってしまった。

「好きだ」と言っただつたけど、小田さんには「好」しか伝わってない。

「……………」

どうして神様は俺の味方をしてくれないんだ……。俺悪魔に取り憑かれるような事した覚えはないです、神様。

「ス……………」

「……………すすすスケボーにハマってるんだ、俺!」

あぁっ!! 俺のバカバカ!! もう本当に大バカ!!!!!!!!

スケボーなんてやるわけないじゃんっ!!!!

いくらなんでもバレ……………

「ええっ! 凄い!」

……………凄いのは貴方の純粋さだ。苦笑いで「え?」って返され  
ると思ってたのに。

本当に凄いつて思ってる顔だ。なんか、なんかなんか、輝いてる。

「また私にも見せてね！ あ、ゆんも見たら驚くかも！」

「……うん……。ははっ……そう、だね……」

「じゃあもうそろそろ帰らないと……榎本くんも気を付けてね！」

「……小田さんも……」

「うん！ バイバイ！」

バイバイ。俺の告白タイム……。

俺はまたチャンス逃してしまった……。直接的にはないけど、イケイケギャルと奈美さんに作ってもらったチャンスを……。帰り、俺の心にはまたもモヤモヤが付いた。やっぱりそのせいで光を通すことは無かった。

ついでに『告れ君』も『告るな君』の逆襲を受けてバタンキューした。

そしてまたついでに、上履きを靴に履き替えようと学校に行ったら、もう玄関は閉まっていた。

本当にツイてない……。もうこんなのショックすぎて立ち直れないかも知れない。

食事も喉を通らない……。今日は早く寝よう。あまり遅くまで起きてると自分を責めまくりそうだから。俺は夜の11時に寝た。

当然、次の日は早起きだった。朝の5時半に目が覚めて、1人で朝ご飯を食べた。

「……今日は早めに行こうかな……」

パンを口の中でモゴモゴさせながら呟いた。食べ終わって顔を洗おうと洗面所に行く。鏡を見てビックリした。いつもより早く寝たはずなのに顔色が悪い！ なんか青白くなってる。髪もボサボサ。

いつもの俺の髪型を知らない人が見ても、セットしたのか寝癖なのか、って聞かれて即寝癖と答えられるくらいボサボサ。ブラシで梳いても直らなかった。水で濡らしてもダメ。仕舞いには蒸しタオルを頭の上に乗せる始末だ。

そしたらなんとか直った。……けどペシャンコ。



ついでに俺の『やる気ボックス』もペシャンコ。

しばらく鏡と睨めっこしてると母さんが起きてきて、鏡に向かっている俺を見るやいなや「あらあらまああ！」と声を上げた。

「……あ、おはよ」

「晴樹、顔色が悪くない？」

「やっぱ……そう思う？」

「もう、暢気な子ねえ。「そう思う？」じゃないわよー」

母さんには負けるよ、と言いたかったけど堪えた。

「体調はどう？」

俺の頬や首に触りながら聞いてきた。でもさっき朝ご飯のトースト食べれたし……。

「大丈夫」

そう答えた。少し心配そうな顔をしてた母さんだったけど、手を放すと「でも一応熱測っておきなさいよ？」と言ってキッチンに入っていた。母さんに言われた通り、俺は2階に上がって体温を測った。

見てみると「35.6」だった。

（なんだよ、全然平気じゃん）

体温計をケースにしまって着替えた。て事は顔色が悪いのは……

……シヨックからかな。昨日告白タイムを時計から出る音楽に邪魔されたから。

カバンを持って外に出ようとした時気が付いた。上履きのまま帰ってきたんだった。

……仕方ないから黒く汚れた上履きを履いて登校した。

俺が学校に着いた時間は6時50分。早く来た事なんて無かったから、まずこの時間から学校が開いてる事に驚いた。そして教室に入るとクラスメイトが1人居た事にも驚いた。

なかむらかずとし

あ、騒がしいこのクラスで1人静かな「中村一寿」。いつ見ても分厚い本を広げてる、言わば「ガリ勉優等生」……？　そういえば1度も喋った事無かった。いい機会かもしれない。

「おはよ」

声を掛けると、その人は牛乳ビンの底のような眼鏡を上げて、俺の顔をチラリと見た。そして本を閉じた。バン、と言う大きな音を立てて。

「おはよう、榎本晴樹」

……………。なんかちよつと嫌な感じ……………って言うか嫌な予感……………。その人はズカズカ歩いて俺の目の前にやってきて、顔をすぐそこまで近づけてきた。

「あ、あの……………」

「君は僕になんの恨みがあるんだい？」

「……………はい？」

「なんでも小田彩乃の事が好きらしいじゃないか」

……………なんで知ってるんだ？　もしかして昨日のイケイケギャルが情報をもらったのか……………！？

「どういうつもりだい？」

「……………はあ……………」

「はあ？　じゃないよ！……！」

うわっ怒鳴った！　なんで？　なんで俺怒鳴られてるんだ？　何か悪い事したかな……………。

「僕だってあの子の事が好きなんだ！」

「……………」

うわ……。う、うわ……。これは……………どう受け答えしたら……………？

「べ、別に誰が誰を好きになろうが勝手じゃ……………」

「綺麗な顔してるね」

……………話噛み合ってねえよ、おい。

っていうかコイツ……………もしかしてもしかしたらゲイ？　だってなんか今現に俺頬触られてるし……………あああ！　なんか背筋がゾゾーッ……………。

「僕の好きな人を取るなよ！」

そう言ってノロノロ席に戻ってったけど……………うおー！　怖い

ええ!!!!

なんかあれだよーね! あ、の、体育館裏で「イヒヒヒヒ」って笑って藁人形にガンゴンガンゴン釘打ち付けてるような、そんなタイプ!!!

うっわ怖えー……!!

なんだか要注意人物っぽい……。関わらない方が身のためだ……。しかも牛乳ビンの底眼鏡未だ掛けてる人居たんだ。でも俺が小田さんを好きって、どこでそんな情報仕入れたんだろ……?

「あつれー!? えっのつもつとくーん!!」

「うおっ!」

後ろからクボが押してきた。朝から元気だなあ。

「今日は早起きだねえ! 朝練!」

「あ、そっか。部活この頃全然行っていないな」

「ダメじゃん」

「お前もだろ。奈美さんと帰るってだけでウハウハしてるくらいだし」

「お! 当たり! 榎本くん鋭いねー。さっすが俺の親友!」

いつからお前の親友になったんだ、俺は……。あ、そういえば小田さんはもう来てるかな……。

って言っても会うだけ自分を苦しめる気がするけど。

そう思いながらも3組を覗いてしまふ。3組もまだガランとしてたけど、1人居た。奈美さんだ。

「お、榎本くん。おはよう」

「おはよ」

「彩乃はまだ来てないよー」

「いや……別に小田さんは……」

「で。どうだったの、昨日は?」

3組の窓に腕置いて俺を見る奈美さんの顔は「好奇心」で満ち溢れてた。そんな目キラキラ輝かせて見られても……昨日は……。

「榎本くん? どうし……あ。彩乃ー。おはよー」

「おはよう、奈美」

俺は奈美さんの方を向いてるから、まだ分かってないみたいだ。嬉しいような悲しいような……。

「あれ？ 榎本くん。ここで会うつて珍しいねー。おはよう」

「あ、うん。おはよ……」

気付かれた。……まあ、ここに居る時点で仕方ないんだけど。

「じゃああたしは剛史のどこでも行こっかなー」

「え、あ？ ちょっと奈美さ……」

俺が止めるのも聞かず、奈美さんは長い髪をブランブランさせて5組に向かってった。3組の静かな教室。居るのは俺と小田さんだけになった。

昨日言えなかった言葉。まだ朝早いからチャイムは鳴らない。と言うことは邪魔する音楽は無い。他の生徒達が来る気配も無いし、まるで俺の告白の為に作った時間のように今しかない。だけど1つ足りない物がある………。

勇気だ………。

あ、でも……ちょっと『告れ君』が勝ち気味。なんか昨日2人から貰った勇気がムクムクわいてきたような……そんな気がする。今だ。今しかない！！

「聞いて欲しい事がある！」

俺は顔を上げて小田さんを見た。「何？」って顔をしてる。

言え！

言えよ俺！！

「俺は………」

「どうしたの？」

「俺は小田さんの事が……！！！」

最後まで言っちゃまえ、俺！！！！！！！！

## 第11話 おんなじ

———好きだ。

今度こそ言った……。

そしてその時の小田さんと言うと。

嬉しいような泣きそうのような、そんな顔をしてた。

俺はどうしたらいいのか分からなくなっつて、「……冗談だよ！！」と言っ教室に戻ってきてしまった。

小田さんを試したように思われたかもしれない。

最低、って罵られる結果が待ってるかも知れない。

あそこで俺が気の利いた事でも言っやれば……。

「本気だから」とか「本当に好きだから」とか言っやれば……。

あんな時、あんなタイミングで———

間違っても、口が裂けても、「冗談」なんて言葉を口にしちゃいけないかったんだ。

俺は今凄く後悔してる。

自分の気持ちを言ったはずなのに後悔してる。

どうしようもない……。

俺は今日、「冗談」と口にした時点でどうしようもなく自分を嫌いになった。

誰か……………このどうしようもないヘッポコ野郎を殴ってくれ。

ばこっ

つと音が響いた。

今は放課後。小田さんに告白したのは朝。

ずっとこのままの気持ちで1日過ごした。そして放課後にクボに言ったら……殴られた。

そう、さっきこの教室に響いた「ばこっ」って音を出して。

「何してんだお前は！」

「お……おとお前こそ何すんだ！！ 殴っ……なっ、なっ、なぐっ……！」

「告白後に冗談なんて言う奴があるかっ！」

それを言われたらおしまいだ。

反論出来ない。俺だって何してんのって思う事だし……。

「なあ！ 今からでも遅くないだろ！？ 言えよ、冗談なんかじゃないって！！」

「もう遅いよ……」

「なんでだよ！ 今日言ったばっかなんだろ！！？」

「けどもう遅いんだ」

「……嫌われるぞ、彩乃ちゃんに」

クボのそのひと言が——心の奥底にこびり付いて、俺の脳内に出現してコダマする。

嫌われる……。そうだよな。こんなヘナチヨコ野郎だもんな……。

「そんな想いだったのか？ 彩乃ちゃんに対する想いはそんなだったのか！？」

「……………違うけど……………もうどうしようもな……………」

「だったら言えよ!!」 どうしようもないなんてへコタレてる暇があつたら言えよ!!」

ああもうクボの言う通りだよ。へコタレてる暇があつたら言うべきなんだ。

「本当に好きならなあ! うざったいって思われるくらい好きだ好きだ言ってみろ!!」

「……………俺はクボじゃないんだ。お前みたいに意味もなく何度も好きなんて言えないんだよ」

「意味もなく……………? ふざけんなお前!!」 今言わないでいつ言うんだよ!!」

「……………」

「外!!」

クボはそう言って運動場側の窓を指差した。立ち上がって見ると、運動場を1人で歩いてる小田さんの姿。どことなく寂しそうな感じが漂ってる。

「行けよホラ!」

背中を押された。俺は迷いながらも運動場に出た。30m先には小田さんの姿……………。

早く……………早く言わないと今日が終わる。終わってしまう。

また俺は上履きで運動場を走る事になった。

「……………小田さん、待って!!」

そう叫ぶと振り向いた。だけど振り向いた途端、また前を向いて走り出してしまった。

「小田さん! ……待ってってば!!」 小田さんッ!!」

やっと追いついて腕を掴んだ。

「嘘なんだ!」

そう言うと、彼女は「……………え……………?」と返した。だから俺は続けた。歯がガチガチ音を立ててる事も、足がガクガク音を立ててる事も分かってた。だけど言わないと。

「嘘なんだ。……いや、好き……って事は本当なんだけど……でも嘘なんだ！ あ……冗談、って言うのは……嘘で……俺本当に小田さんが好……」

俺の顔が茹でタコ状態になったのを、彼女は見てしまっただろうか……。もし今日、雪が降るほど寒い日だったら、俺にから湯気が出てるのをきつと分かってしまうだろう。

そのくらい熱い。

「す……すすすす好好好好……」

「榎本く……」

「好きだっ……」

ああ。言ってしまった。だけど今度こそ「冗談」なんて言わない……！

「俺は小田さんが好きだ！ 本当に好きだ！！ 誰になんとかわれようと好きだ！！ 好きだって連発しても恥ずかしくない程好きだ……あ……？」

俺がそこまで言うのと、小田さんは泣きながら笑った。口に手を当てて笑ってる。その手の上を流れるほどの涙。俺、何か泣かせるような事言っちゃった……。

「そんな連発しなくても……」

小田さんはそう言った。少し恥ずかしそうに。やっと気付いて辺りを見ると、俺達は他の生徒達の注目の的だった。俺の顔はまた茹でタコ状態になってしまった。さっきよりも、もっともつと。

ドラマとかだとかいう時女の方から抱き付いてきたりする。だけど小田さんと俺はそんな事にならなかった。少し寂しいけど……、でもいいんだ。今からそんなじゃなくて、徐々に徐々に……。

——なんて言ってるけど、まだ小田さんの気持ちを聞いてないんだ、俺。それを聞くのは更に勇気が要るけど……でも……。

「お……小田さんは……どう……？」

どう？ って、何聞いてんだ俺！？ どう？ って聞かれたら困るに決まってるじゃない！！



だけでもう聞いちゃったものはしょうがない！ 返事を待とう！  
！　ここでもた何か言おうとすると俺の事だ。変な事言うに決まっ  
てる！　あ、だけど……。

「……正直な気持ち……言ってくれていいから……」

こう言っておかかないと小田さんが言えないかも知れないから……。  
「……同じ、だよ……？」

「へ？」

「榎本くんと……同じ。私も」

小田さんは笑った。あの時の……携帯の話をしたあの時のように。

それは直接では無いけれど、彼女の声は今にも消えそうなくらい  
小さな声だけど、俺にはちゃんと届いたよ………空気に溶けて消  
えてしまいうような声が。

俺の中では戦う者が違っていた。『嬉しい君』と『悲しい君』。  
勿論今は『嬉しい君』が圧勝！！　もう嬉しすぎてどうしようも  
ないくらい圧勝！！！！

俺と小田さんはニツコリ笑った。運動場のど真ん中で。

自分自身、よくこんな大胆な事が出来たなあと思う。全校生徒と  
言っても過言じゃないくらいの生徒達のまん前で、凄く凄く好きな  
小田さんに本日2度目の告白。

なんかもう、これだけで満足かもしれない………。

だってこれ以上の事望んだら逆に災いが降掛かりそうだよ――。

## 第12話 買い物の約束

それから俺と小田さんは付き合い始めた。特にどっちかから「付き合おう」って言ったわけでも無いんだけど……。

だけど付き合っても俺はまだ「小田さん」、小田さんもまだ「榎本くん」のまま。

まあいいんだけどね。小田さんが傍に居てくれるなら俺は満足！

……臭いセリフだ、我ながら……。

なんかこの頃臭いセリフが多くなってきたような……。

「榎本くん」

「ん？」

今俺は3組に来て小田さんと話してる。5組に来る時の奈美さんのように窓のレールの上に腕を乗せて。

教室内では「運動場の2人」って言われてるけど、気にしない気にしない！

小田さんも最初はちょっと戸惑ってたけど、今はもう慣れたみたいだ。普通に話してる。

「なんかね、今年の冬は寒いんだって」

「え？ あ……うん……？」

冬は……寒いよね、そりゃ。

……ああ、暖冬かそうじゃないか、って事かな？

「だから帽子を買いたい、毛糸の」

「ああ、いいじゃん」

「今日………一緒に行ってくれる……？」

「え、俺でいいの？」

俺あんまそう言うセンスないけど……。女の子の帽子とかなら奈美さんに行った方が……。

「榎本くんと一緒にいきたいから……」

「……………よっしゃ、分かった。一緒に行こっか」

「うん！」

毛糸の帽子か……。そういや俺って毛糸の帽子持ってなかったな。買おうかな。

あ、でも……。

「今日部活だ……。休みまくってたから……。そろそろ行かないとマズイかな……」

「何時頃終わるの？」

「多分……7時頃……」

「そっか……」

でも俺も小田さんと買い物とか行ってみたい！　なんか楽しそうじゃん！！

今週の日曜なら部活休みだし……。どうだろ。

「ね、じゃあ日曜に行こうよ」

「日曜日……」

俺がそう言うと、小田さんは「ちょっと待ってね」と言って自分の机に行き、横に掛けてあるカバンから手帳を取り出した。なんか子犬の手帳。薄いピンク色ので、小田さんらしい。

しばらく手帳と睨めっこした後、ニッコリ笑って戻ってきた。

「大丈夫だよ！」

凄く嬉しそうにそう言った。行動といい顔といい、なんだか全体的に犬っぽい……。

だけどゆんとは違う。雑種とは違って（世界の雑種さんゴメンナサイ）、もっとこう……。チワワって言うかダックスフンドって言うか……。いや、ヨークシャーテリアって言う犬かも知れない。

「じゃあ、日曜に」

「うん、日曜ね」

お互いに手を振って、小田さんは自分の席に、俺は自分の教室へと戻った。

この頃、俺は犬種図鑑を眺めるようになってきた。小田さんとの話がもっともっと弾むように。最近知ったのが、さっきの「ヨーク

シャーテリア」。犬好きさんにとっては初級中の初級かもしれないけど、俺にとっちゃ大発見だ！

呼ぶ時には「ヨーキー」と言うらしい。

俺は小田さんと出会ってからもっとも多くの犬の種類を知りたくなった。そしてなんと！ この間本屋で犬種図鑑を買ったんだ！！

値段が5600円と結構お高かったけど買ってしまった。

でもこれで小田さんとの会話が弾んで楽しくなるんなら安い方だ！いつも寝る前に必ず見てる。全部で308ページあるんだけど、今153ページに突入してる。そのページの犬種は……なんだったっけ……。

あ！ あれだ。「アラスカン・マラミュート」！ ……とかなんとか……。

ハスキーと見分けがつかないアレ。つく人はつくんだろうけど、俺はまだダメ。

どっち見ても「あ、ハスキー」で終わる。

その犬の説明とか載ってたけど、そこは忘れた。長すぎて覚えられない。あんなの覚えれてたらとくにテストで100点取ってるさ。

「さーて。部活行くかあ」

俺はガランとした教室に入って伸びをした。そしたらついであくびも出た。

(ヤバイ眠い……)

でも眠くてもそろそろ行かないと顧問のゲンコツ喰らうどころじゃなくなる。今の状態でさえもゲンコツ以上の物を喰らうと思うのに。バスケットボールをボンボンぶつけられるだろうなあ。なにせあの顧問鬼だから……。

もしかしたら頭をゴールに入れられるかも。……いやいや、さすがにそれは無いな。

無い無い。………無いよ。

……多分……。

行きたくないけど……まあ仕方ない。自分で入った部なんだから行かないと。

ロッカーから俺専用のボールを持って体育館に向かった。

俺の予想は途中まで当たってた。ゲンコツ喰らってボール20連発喰らってオマケにグラウンド10周までも喰らった。

そんな連続攻撃しなくても……。まあ試合が近いってのに練習に出なかった俺も俺だけ。いつもなら自分の否に対しても落ち込んでいるところだけど、今日は落ち込まない。

だって明後日の日曜には小田さんと出掛けるんだ。買い物するんだ。

それだけで俺の胸は躍った。気持ちついでに足も踊った。踊る足で走って飛び跳ねて、家に帰った。

小田さんも今こんな気持ちでいてくれるんだろうか。

明後日が楽しみだー、って喜んでいてくれるんだろうか。

あ、そういえば、明後日の前に明日は部活だ。くそー。土曜くらい休みくれたっていいのに。どうせ学校行っちゃって小田さんには会えないし。

でもブーたれたって結局、次の日の土曜日、俺は部活に行く為に学校へ向かった。

行く途中……偶然だ！ 奇跡だ！！ 幸運だ！！！！

小田さんに会った！

「……あ、榎本くん」

「小田さん。どうしたの？」

「ちょっと買い物頼まれちゃって」

いつものような優しい笑顔で、小田さんは食材リストを俺に見せた。

「榎本くんは部活？」

「うん。試合近いからね」

「頑張ってるね！　じゃあね！」

「じゃあ」

俺の横を通り過ぎようとした時、「あっ」と言っただけ俺を見た。

「……………あの……………明日……………覚え、てる？」

明日。明日は小田さんと買い物。ちゃんと覚えてるよ！

忘れるわけじゃないじゃないか。

「毛糸の帽子……………でしょ？」

「うんっ！」

小田さんは凄く凄く嬉しそうな顔で頷いた。そして今度こそスパーに向かった。

俺も部活へ。サボりまくりだからレギュラーに選ばれる事はないだろうけど、まあとにかく頑張ろう。

先輩にも「サボりさえしなければ選ばれてる」ってこの間言われたし！

サボらなきゃいいんだ、サボらなきゃ……………。

体育館に入ると、クボはもう来てた。1人でボール追っかけてる。

「クボー。おはよ」

「あ、榎本！　おはよ！」

「なに、準備運動？」

「ん……………うん。まあそんなトコ」

なんか久々にやる気湧いてきたかもしれない。

準備運動を済ますと、俺はクボのボールを奪い取った。

「対戦しようぜ、クボ！」

「対戦？」

「バスケの1対1バージョン」

「おう！　いいよ！！　じゃあ榎本そっちな」

俺は右側のゴール。ボールは俺持ちだ。少し有利かな……………。

よし。クボには負けたくないからな。

「おっけー？」

「おう」

そしてミニバスケットが始まった。ボールを持つてる俺はひたすらオフエンス。時にディフェンス。まあそれは当たり前だな。

つつか、クボ結構上手くなってる。入部当時は俺の方が大分上だったのに、今はボールすぐに取られそう。だけどまだ俺の方が上みたいだ。

少し手間取ったけど、腕を突き出して3Pシュート。ボールは、ゴールの上でグルングルン回ってからスポツって入った。

「あー！ くそっ！ まだ榎本のが上かあ……」

クボは体育館の床に寝転んで言った。なんか悔しそう。

久しぶりに楽しかった。部活になると顧問がうるさいんだよねあ。こーしろ、あーしろって……。

だから自由に出来て楽しかった。

その日、部活は夕方まで続いた。やっぱ試合近くなるとハードだ。まあ俺は試合に出るわけじゃないけど。

位置的には補欠の補欠って感じの所。……うーん。微妙……。

さて、そろそろ帰ろ。後ろにはクボ。

って事は………今日はコレ有り。

「じゃーな」

「おう。じゃあな」

校門での「じゃあな」。学校から出る時ならいつでも関係なく「じゃあな」。

俺が家に帰った時には、もう7時を回ってた。玄関のドアを開けたら母さんが出てきて、「あら晴樹、ジャージなの？」って言うてきた。

そっか。母さんは今日の朝出掛けてて、俺が部活に行ってたって事知らなかったんだ。

「あ。明日出掛けるから」

「あらそう。えーっと……誰だったかしら？ クポくん？」

「クボ？」

そう言うと、母さんは「ああそう、その子！」と手を叩いて言った。誰だよ、「クポくん」って……。

「クボがどうかした？」

「その子と出掛けるの？」

「あー……うん、まあ……」

ホントは違うけど、下手な事言うて根掘り葉掘り聞かれるから、まあそう言うことにしておこう。女の子と出掛けるなんて言ったらどうなるか分かったもんじゃない。

「まあー。また今度連れてらっしゃいよ」って言うてくるかもしれない。

母さんは話し始めると止まらないから、小田さんビビッて退いちゃうかも。

いくらなんでもそれは勘弁。

俺はテーブルに置いてあった唐揚げを1つ摘まむと2階の自分の部屋に入った。

カバンを床に放り投げて、ベッドに寝転ぶ。

——明日だ。小田さんはいつもどんな所買い物に行くんだろう。俺が居ても不自然じゃない所だといいいけど……。



### 第13話 俺の手と、彼女の手。

——しまった!!

考えてたらいつの間にか寝てたみたいだ!!!

今は……朝の9時10分!! 小田さんの約束の時間は9時半

!!!!

「ヤバイッ!!」

俺はベッドから飛び起きた。昨日、ジャージのまま寝転んでたらそのままだ。風呂にさえ入ってない!

女の子と会う時に風呂に入っていない、しかも部活終わった後そのまんまなんだから、さすがにそれはヤバイ! マズイ!!

すぐにジャージを脱ぎ捨てて風呂場に向かった。

朝のシャワーってのは寒い。夜入る時より寒く感じる。なんでだろう?

今まで暖かい布団の中に入ってたのが、急に身を包むものが無くなったから体の方も体温調節に困るのかな。

でも今はそんな事どうでもいいや。とにかく早く準備をしないと! 軽くシャワーを浴びて頭を洗って体を洗って、最後に流して終了。あ、服持ってきてなかった。昨日のうちに出しとけばよかったー

!!!!

腰にタオルを巻いて2階へ上がってった。案の定、姉貴には文句言われたけど。

せっかくの爽やかな朝だったのに弟の裸なんて見せられちゃあ、そりゃ文句たれるハズだわな。

でも今は姉貴の文句聞いている暇は無いんだ。スルーして、急いでタンスから服を取り出して着た。今日の服はこれだ!

紺色のジーパン、灰色のトレーナー、その上には黒色の皮ジャン。俺はこの組み合わせが結構気に入ってる。それから鏡で寝癖が無い

かチェック。うん、大丈夫だ。

階段を降りて、黒とオレンジが使ってある靴を履く。トントンと足を鳴らして、これで準備万端。

掛かった時間は15分。あとは財布持ってあの公園まで走るだけ。

「いつてきます!!!」

ドアをバンと閉めて俺は走った。

もう季節は冬。紅葉の見ごろも終わり、散ってきてる。道は落ち葉で埋め尽くされると言っても過言じゃないくらい。

近所のおじさんが竹箒で落ち葉をかき集めてる。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

走ってても挨拶は欠かさずに。まあおじさんの返してくれる声は最後まで聞き取れなかったけど。

でも言われた事は分かっているからノープロBLEM。

公園に行く道にはバス停がある。バスに乗って公園に行けるわけではないけど、時刻表の隣に小さな時計があるから、そこで時間を確認出来る。

今は9時28分。ここから公園までならあと2分くらいで着ける。よし、ギリギリ間に合う!!! 本当にギリギリだけど間に合う!!!

走って走って、着いた。公園内に入ると、まだ小田さんの姿は無かった。

「……良かった……まだ来てない」

ホッとしてベンチに座った時、向こうの方から……小田さんかな？ 薄いピンクのワンピースに薄茶色のブーツ。手には白い小さなカバンを持って歩いてくる。

淡い色が多いんだ、やっぱ。

まあ小田さんは濃い色って感じではないからね。

「あ、榎本くん！ ごめんね、お待たせ」

「いや。……行こっか」

「うん」

俺は小田さんと並んで歩いた。時々吹く風が小田さんの髪をなびかせる。

「どこに買いに行くの？」

「エチカ！」

あー。あそこね。

俺の住んでる町には、「エチカ」って言う少し大きめなショッピングセンターがある。

まあ田舎の「大きめ」なんて高が知れてるけど。

でもじゃあ、あそこ行くならバスじゃん。

俺達はバスに乗り込んだ。中は老人が2、3人乗ってるくらいで、若者は1人も居なかった。気楽って言えば気楽。

隣同士で座ると、なんか恋人同士って感じがして嬉しい。

小田さんは犬を見つけたたびに「あっ」って控えめな、それでいて嬉しそうな声を出す。

「なに？ 今の何犬？」

「多分コーギーだよ。ペンブローク」

「……………？」

分かんねえ……。犬種図鑑買った意味無いじゃん。

！ ……でもあの犬なら分かるかも……………！！

「あ、ボーダー…」

「ボーダーコリー！」

小田さんが言ってる間に言った！ あれ……………なんか……………ちょっとダメだったか……………？

……でも俺の心配とは裏腹に、小田さんは俺を振り向いて、「負けちゃった」と言ってニツコリ笑った。

だけど通ってく犬全部は分からない。6匹中、俺が言えたのは1匹、小田さんは5匹だった。やっぱまだまだ小田さんのがうわてだ。もっと勉強しないと。

犬種早押しクイズをやってるうちに、エチカに着いた。

町内で一番大きな建物だからバスは必ず止まる。先に乗った老人達もココが目当てらしくて、俺らと一緒に降りた。

バスの中は空っぽになってしまった。居るのは運転手だけ。

手動ドアを押し開けて中に入る。そこまで賑やかではなかった。帽子とか洋服があるのは2階。ちなみに、1階は食料品ばかり。ドアは手動のクセに中にはちゃっかりエスカレーターが設置されている。

まず最初に自動ドアにした方がいいと思うんだけど……まあいいや。階段なんかより全然楽なんだし。

エスカレーターで2階に上がると、まず正面に子供用の洋服コーナーがある。多分この中で一番広い。今の時期だと小さなトレーナーとかでっぺんにボンボンの付いた帽子とかが目に入る。

その隣にはレディース。黒いジーンパンとかトックリとか、ルームシューズとかがある。毛糸の靴下もあって、それも部屋の中用みたいだ。

そう言えば俺の家も寒いんだよね。毛糸の靴下、メンズコーナーに無いかなあ……。

男用の毛糸の靴下って見た事ない気がするんだけど……都会に行けばあったりするのかな？

「あ！ あった！ 帽子、帽子」

考えてたら小田さんが前を指差して言った。指の先には帽子がたくさんあった。グリグリ渦巻いてる帽子掛けに掛けられてる物とか、棚の中に入ってる物とか、とにかくたくさんある。

小田さんはその中の白い帽子を手にとると、鏡を見ながら被った。頭の部分にボンボン付き。

「へえー。色んな種類があるんだね」

「榎本くん、これ被ってみて！」

そう言うと、グレーの帽子を俺に見せた。やっぱりボンボン付き。被ってみると横で小田さんが「カッコイイ」って言うてくれた。

小声だったけど。

でもその瞬間、一気にこの帽子が気に入った。  
値札を見てみると——1500円。

「……帽子って……こんなにするもんなの……？」

「キャップなら安い物で800円とかあるけど、毛糸の帽子とかならそのくらいだよ」

「…へえ………」

高いよ！　高いよグレー帽子！！

俺今財布の中に2000円しか入ってないのに。

あと500円しか残らなくなるじゃん！　バスに乗って帰れるくらい金はあるけど……。昼ご飯代が無くなるし……。

「どうしたの？」

俺が財布と睨めっこしていると、小田さんが覗いてきた。

「あ、いや……。きよ、今日は……帽子はやめとこっかなあ……」

「お金？」

「いやいやいやいや！！　無いわけでは無いんだよ決して……」

だけど……。その……。バ、バイトでもっと稼いでから買おうかな  
と思っ……それで……」

なに焦ってんだ俺……。ホラ、小田さんに笑われたじゃないか。

でも確実にバカにした笑いじゃない。ニッコリ笑うと、俺の顔を見た。

「分かった。じゃあ今度また一緒に来よう？」

「あ………うん」

「私もその時まで買わない！」

「え、なんで？　小田さん買う為に来たんじゃない。買った方が……」

「いいの！　榎本さんと一緒に買うから……」

………。チクシヨウ。

可愛いぜチクシヨウ……！！

俺には勿体無いくらい可愛いぞ……！！

なんじゃこりやッ……！！！！

「……分かった。じゃあまた一緒に買おうね」

「うん！」

それまでに売れちゃいませんように。

そう祈って、俺と小田さんはエスカレーターで下に降りた。

下の階、1階には食料品などが売ってて、そこを抜けるとちよつとしたピクニックコートがある。マックとかスガキヤとかがあるんだ。でも今は昼の11時。まだ昼ご飯にするには早い……。

「昼ご飯、まだ早いよね？」

「そうだね。あんまりお腹空いてないし……」

「んー。だよなあ」

どうしようかな。時間潰そうにもなあ……。なんかいいトコ……。

あ！ あるじゃん！！ 犬好きな小田さんにはもってこいの場所！！！！

「ペットショップ行こうか！」

「ペットショップ……？ あったつけ？」

「ココじゃないけどあるよ。ちよつと歩くけど……」

「いいよ、行く！」

よっしゃー！！ リード出来てる？ 俺リード出来てる！？

小さくガッツポーズを決めて、俺と小田さんはエチカを出て右に曲がった。そこからは直線の道をひたすら歩くだけ。

そしたら右側に小さなペットショップがあるハズだ。

「榎本くん、犬何が好き？」

「え、俺は……」

あ……この会話、里砂ん時と同じだ……。俺は柴って答えて、アイツは……パピヨン。

あの蝶々みたいな耳——「バタフライ・イア」の。

「俺は……柴かな……」

「あー。日本人っぽいね」

「だって日本人じゃん。小田さんは……？」



顔覗きこんで「大丈夫？」って顔してる。

「ごめん、考え事してた。何？」

「もう行かないと混んじゃうかも」

小田さんは腕にしている薄ピンクの腕時計を見せた。昼の12時半。

そっか、昼ご飯！

「あ、そっかそっか。えっとじゃあ……行く？」

「うん」

子犬達にサヨナラして、俺達は来た道に戻った。でもわざわざエチカに入って昼ご飯、つてのも何だから近くのファミレスに入った。

席に座って、店員の持ってきたメニューを広げる。

『季節限定！ ドラコッコのクリーム煮！』

……何、ドラコッコって……。

まあ名称はともあれ、俺は「季節限定」と言う言葉に弱いみたいだ。それがある時は他のメニュー見ても「これ！」つてのが無いから。

「ね、ドラコッコってなんだろう？」

小田さんも同じの見てみたいだ。

「やー。俺も分かんないんだよねえ。ドラえもんとかワトリの合体物とか？」

俺がふざけてそう言うと、小田さんは笑った。だから俺も笑った。自分で言った事に笑うつてのも変だけど、でも笑った。

「じゃあ俺、このドラコッコ！」

季節限定メニューを指差して、俺は言った。そしたらまた小田さんが笑った。何故だか俺もまた笑えてきた。

俺達2人は「ドラコッコ」と言う単語にハマってしまったらしい。ドラコッコの「ド」が出ただけでも笑えてくる。

小田さんはホワイトクラムチャウダー、俺はドラコッコを頼んだ。俺、あんま気にしてなかったけど、女の子はカロリーつてのを気にするみたい。だって小田さん、最初「ハンバーグ」って言ったん



だけど、次の瞬間にはメニューを凝視して漫画だったら冷や汗掻きそうな顔してた。多分カロリーを見てギョツとしたんだと思う。

カロリーとか気にせず自分の食べたい物食べればいいのに……。

これが男と女の違いかなあ？ 女の子ってやたら体重とかカロリーとか気にするから。

俺達はそれぞれの昼ご飯を食べ終わって、外に出た。本来の目的は帽子を買うことなんだけど……それは今度になったし、っていうか元々帽子買うのに1日も使わないし……。

だけど後の事考えてなかったんだよね。どうしようかな……。

「あ、あのね？ これ……」

「ん？」

小田さんがカバンから取り出したのは……動物園のチケット？？  
「あの、この間、家族と従弟の子2人連れて行こうって事になったんだけど、急に行けなくなっちゃったの。従弟の子が……。それで2枚余ったから……」

動物園か。まあ小さい子は行きたがるからね、遊園地とか動物園とか……。

「あ、あ……で、でも嫌だったらもつと他の……」

「動物園、行こうか」

「……え？ いいの……？」

「ん？ 「いいの？」 って？ いいよ？ 行こうよ。最後に行ったのって……確か俺が幼稚園児の時かな？ 久しぶりだなあ！ 動物園とかっ！ 場所どこ？」

俺は小田さんにチケットと一緒にあったパンフレットをもらって、そこに書いてある地図を頼りに歩いてった。

30分くらい歩いたら着いた。道は簡単。

右に曲がってまっすぐ行って2番目の十字路を右に曲がって斜めの道に入って3つめの信号の横断歩道を左に渡ってずっとまっすぐ行って左に曲がってずっとまっすぐ行って橋を渡って横断歩

道を渡ってココ!

説明するのはちょっとばかり大変だけど……。

「はい」

チケットを2枚窓口に出した。

「あの、お客様?」

「え? はい?」

入ろうとした時窓口の人に止められた。窓口の人は止まった俺の前にチケットを出して、「これ……」って言った。

「……………」

チケットを見ると……。

「申し訳ありません。こちら期限が切れてるんですけれども……」

「えー!!!」

よく見てみた。今日は11月27日。このチケットが使える期限は11月25日。

「!!! ゴゴゴゴメン!!! 期限切れてる事気付かなかった!!!」

「えーっと……………」

「本当ごめんなさい!!!」

「いや、いいよ。いいんだけど……」

俺は窓口の上に書いてあるチケットの値段を見た。『大人500円』。

うん。大丈夫。これなら自腹で入れる。

「……じゃあ大人2枚ください」

「ごめんなさいね。えーと、1000円です」

何故か窓口の人も謝った。

まあ結局入れる額だからいいんだけど。

1000円出して、今度こそ中に入った。

「あ、あの……榎本くん、ゴメンね?」

「いやあ、全然いいよ。チケット自体高いわけでも無かったし」

「……あ、そっか、500円だったよね」

小田さんはカバンから財布を取り出した。あ、でも……なんかこ

う言うのって……。

「いいよ、500円くらい。俺の奢り！」

「え……でもダメだよ！ やっぱ……」

それでも500円取り出そうとする小田さんの手を、俺はいつの間にか握ってた。

だけど……握ったところで何言えばいいんだ??

えーっと……えー……えー……と………。

——あっ！ これだ!!!

「お、小田さん帽子今度まで我慢するでしょ？ そのお返しに」

「……お返しって……だけど帽子は私が買うわけで……500円……」

「いいんだって！ 俺がいいって言ったらいいんだよっ！ ホラ、行こ」

どうしたらいいか分からなくなったから、とにかく手を引っ張って進んでいった。

途中で小田さんは「ありがとう」と小声で言った。なんか俺、何をしてもらったでもないんだけど、何故かそれだけで凄く嬉しかった。

動物園の中にはキリンやら象やら猿やら……色んな動物が居た。子供の泣きじゃくる声とか遊ぶ声とか、動物の鳴き声とか、騒がしかった……。親の叱り声とかもあった。

最後に来たの、もうずっと前だから全然その時の事覚えてない。同じ動物園だったら薄っすらでも思い出せたかもしれないけど。

だけどいいや。過去も大切だけど、今は今！ だって俺等が居るのは「今」。

今、此処に居るんだから。

動物園内では、小田さん曰く、俺凄くはっちゃけてたらしい。動物に餌あげる時の顔が楽しそうだったって言ってた。

「あ、榎本くん、お土産買ってもいい？」

「うん、いいよ」

俺と小田さんは園内のショップに入った。中はビスケツトとかクツキーとか、動物の置き物とかあった。いかにも『動物園のお土産屋さん』って感じ。

小田さんは色んな物を見て周って、なんだか迷ってるみたいだった。

「あっ」

置き物に目をやって、声を上げた。どうしたんだろう？

「何？ どうしたの？」

「これ……………」

彼女が手に取って俺に見せた物、それは——虎の置物。目が丸くて黒くて、体が硬いんだけどツルツルしてないヤツ。なんだっけな、なんて言えбайいんだ？？

…………でも、なんかこの置物…………。

「奈美にいいかな、って…………」

「奈美さんに？」

「うん」

同じだ。なんか奈美さんに似てる気がする。この置物。

一見虎って聞いて怖そうなイメージだけど、本当に持っているのはこう言う優しい目…………。クボに向けるような…………。

「…………いいね」

「え？」

「ピッタリだよ、奈美さんに！」

「そう？」

「うん！ きつと喜ぶ」

俺がそう言うと、小田さんは安心した笑いを見せた。小田さんと奈美さんは本当に仲がいいんだ。…………俺もクボに何か買ってっやろうかな。

んーと、そうだなあ…………。アイツなら…………羊でいっか。

あ、でも、その人に合うイメージの動物の方がいいかなあ。さっ

きの虎みたいに。

クボに合うイメージの動物ってなんだ……？？ んー。いつも奈美さんに襲われてる（自業自得だけど）から、やっぱ草食動物だよなあ。そうなら羊じゃん！

よし、羊で決定。文句言ってきたら蹴飛ばしてやる。

それと家にクッキー1缶買っていこう。

それぞれの物を買って、ショップを出た。

「楽しかったねー」

「うん。ホント久しぶりだったからなあ……。なんか新鮮だったよね」

「ね！」

……あ、そうだ！！ 忘れてた！ ……って言うか今思い付いた！！！！

「ゴメン、ちょっと待ってて」

「え？」

「待っててね！」

小田さんを自販機の辺りに置いて、俺はショップに走って戻った。自動ドアをくぐって中に入る。俺が手に取ったのはキーホルダー。ぬいぐるみみたいなキーホルダー。

チェーンの下には犬のぬいぐるみが付いてて、バンダナを首に巻いている。その色は赤だけだった。最初は他のにしようか迷ったけど、丁度いい。これがいい！

それを2つ買って外に出た。自販機の方までまた走ると、小田さんは隣のベンチに座って待ってた。

「ゴメン……。じゃあ行こうか」

「何？ もういいの？ 大丈夫？？」

息を切らしてる俺の顔を、小田さんは覗きこんだ。頷いて下を向いてた顔を上げる。

「はい！」

ポケットにしまったキーホルダーを出した。だけど急に目の前

に出された物を、小田さんはキョトンと見つめるだけ。だから俺は彼女の手にそれに乗せた。

「え……………あの……………これ……………?」

「ゆんだよ」

「ええ?」

だってゆんみたいに顔黒いし、ゆんみたいに赤いの首に付けてるし、ゆんみたいに、カワイイし……………。

「え、これを……………買ってきてくれたの?」

「財布、出しちゃダメだよ?」

「……………でもこれ……………」

「だってホラ、初……………は、初、デート……………だし……………?」

まあ、記念ったってこのくらいだけど……………」

あ、ヤバイ。記念ってキザっぽかったかも……………。なんかしかも……………喋ってる間になんか……………顔赤くなってる気がする、俺。

「ありがとう……………」

「あ、いや……………うん」

今度は小声じゃなく、聞こえるように言ってくれた。小田さんの「ありがとう」には、彼女の感情が全て詰まってる気がする。感謝、感動、感激……………。

だからそんじょそこらの「とりあえず言っときゃいいや」の「ありがとう」とは違うんだ。

それだけで嬉しくなるんだ、彼女の「ありがとう」は。

ただそれだけだけど、たったの5文字だけど、そう言ってもらえるだけで嬉しくなる。彼女の為にやってよかったー! って心から思える。

「帰ろっか」

「うん」

俺と小田さんは、並んで動物園を出た。出た時、小田さんは俺の手を少し遠慮がちに握った。握ったと言うより、触れたって感じ。里砂のように大胆に腕にくっ付いてくることは無い。だけど、今

はそれでもいいと思う。

小田さんはこの遠慮がちのところも含めて「小田さん」。  
これでいいんだよ。

俺も小田さんの手を握り返した。なんか照れちゃって顔は見れないけど、今スッゴイ幸せだ、俺。

大丈夫だ。里砂の二の舞にはしない。

この手は放さないから。絶対死んでも放さないから。

小田さんは、絶対他の男なんかには渡さねえから……。

## 第14話 俺の自慢

「お前らいつまでそんな続けるんだよ」

月曜日。小田さんと出掛けた次の日だ。

放課後、クボが急にそう言ってきた。

いつの間にか、教室には俺ら2人だけしか居なかった。

「は？」

「いつまで「小田さん」と「榎本くん」なの？」

「……なんだよ、ダメなのかよ」

別にいいじゃん。俺らには俺らの呼び方があったって。

「普通さあ、付き合ったら名前で呼ぶっしょ」

「……名前じゃなくなっちゃっていいだろ」

「だって滅茶苦茶他人行儀……」

「うるせえな！ お前にとやかく言われなくなって自分で決めれるんだよっ！！」

あーあ。また怒鳴っちゃったじゃん。でも今回は100%、いや、1000%クボが悪いんだからいいんだ。仕方ない、仕方ない。

「なっ……なんだよう……。俺と奈美ちゃんみたいになりたいとか思わないのか？」

「なんで思わないといけないんだよ。あー、もうあげる気失せた」  
せっかく動物園で羊買ってやったのに。もうやらないもんね！

「え？ 何が??」

「じゃあな、クボ」

「校門まで行かないのか？」

「今日は1人で」

そう言ったら途端にクボの顔が不安そうになった。

「俺が変な事言ったからか……?」

そうだなあ。って言うか聞かなくても分かるだろ。

……んじゃちよっとイジワルしてやろう。



「うん」

笑顔でそう言った。自分的には笑ってると思う。

クボはいつも通り、「奈美ちゃああん」と3組に走ってった。けどなあ、クボ。多分もう奈美さん居ないよ？

さつき小田さんと運動場を歩いてるの見たんだ。もう帰ったんじゃないかな。

「榎本おおお！ 奈美ちゃんもう居ねえよおお」

ほら、ビンゴ。まあ仕方ない。これ以上やるとちよっと可哀相な気がするから校門まで行ってやろう。

「じゃーな」

「おう、じゃあな」

結局最後はいつも通りの場所で「じゃあな」。まあいつか。

あ。「あれ」あげないと。あげる気失せたって言っちゃったけど、やっぱりあげたくて買ったんだから……。

「クボー!!!」

逆方向に歩いてくクボに向かって叫んだ。振り向くクボに、俺は動物園のお土産、羊の置き物を投げた。

「……………!?!」

クボの奴、上手くキャッチしたなあ。

アイツはパスされるのはいいみたいだ。パスするのはダメだけど。こんな時、クボが球技系の部活に入ってて良かったって思う。

動物園の袋から羊を取り出すと、それを上げて振って、「なんだよこれー!?!」と叫んできた。

「なんだよこれ？」って……羊じゃん。そのままクボは帰り道の方を向きなおした。

ちよつとムカツとしたけど、またこっちを見て「さんきゅう」って言ってきたから、全部チャラにしてやる。

やっぱりお前には「羊」が似合ってるよ、クボ。

「じゃーなあ、クボ!」

「おう、じゃあな晴樹!」

今度こそ本当に別れて、しばらく歩いてから気付いた。

クボ、俺の事「晴樹」って呼んだ。

いつもは「榎本くん」とか「榎本」ばっかだったのに、さっきは「晴樹」って言った。

なんか……いいな。いつもと違う呼び方って……。

俺は家のドアを開けた。

「ただいま。……母さん」

俺も今回は少し変えてみよう。いつもは「母さん」と付けないところに付けてみよう。

「おかえり」

本人は気付いてないけど、俺自身はなんだか変わった気がする。ちよつとこっ恥ずかしい。

……だけど、ちよつとイイ感じ。たまにはいいじゃん。言う事変えてみるのも。

夜の11時、俺は風呂から出たところだ。

やっぱ風呂っていいなあー。ポカポカする。

「晴樹、アイス持ってきてよ」

「あ？」

「……「あ？」じゃなくて、アイス！」

どーしてこんな寒い季節にアイスなんて食べれるんだ？

姉貴の胃腸はどうなってるんだ??

「自分で取ってくりゃいいじゃんか」

「はあー? ……もー。使えねえなあー」

姉貴はそう言い捨てると、ドシドシと階段を降りてった。

………。いくら弟にでも言っている事と悪い事があると思うんだけど??

ゲームやってたのか、姉貴。……って、コレ、俺のドラクエじゃ

ん!!

ふざけんなよ、俺が一生懸命金貯めて買ったゲームだぞ!?

「おい姉貴っ!」

俺はアイス片手に戻ってきた姉貴を責めた。

どういう事が聞いたら、「アンタの物はあたしの物、あたしの物もあたしの物」って言うてきた。

よくまあそんなしゃあしゃあと……。

弟のゲーム勝手にプレイしておきながら……。

「姉貴! 姉でもしていい事と悪い事があるだろ!？」

「あー待って待って。次のセーブポイントまで……」

「いい加減にしろ! 切るからな!」

「あ、ちよつとコラ……」

俺はゲームの電源を切ってやった。セーブポイントまであと2、3歩ってトコで。姉貴は悔しがった。凄く悔しがった。レベルが上がったとこだったのにー、って。うんうん、その気持ち分かる分かる。

けどな姉貴、俺なんて昔、何も悪い事してないのに姉貴に勝手に電源切られた事あったんだよ。そうなれば今回の事は自業自得ってなれるからまだ合点がいくじゃないか。

理不尽な切られ方じゃないだろ??

「もー!ー!ー!ー! せっかくアイス持ってきてこれからってトコだったのにー!! 晴樹のバーカッ!!」

ドアをバンと閉めて、姉貴は出ていった。

「……………」

なんで俺が「バカ」呼ばわりされなきゃならないんだ?

まあいつか。ウチの姉貴は短気だからな。

「おう晴樹。……また真樹怒らせたのか?」

「姉貴が俺のゲーム勝手にやってたんだ」

「ほお」

姉貴に比べて、兄貴はいいヤツだ。変な怒り方しないし、俺をコ

キ使ったりもしないし。

兄貴はコタツの中に足を入れて、タバコを取り出した。

スパス吸ってる。

なんでタバコを吸うのか俺には全く理解できない。近くに居るだけでも煙いのに。

匂いだって嫌だ。臭い。あんなのが体内に入ってたって大丈夫なのか？

よく、タバコを吸うのはカッコイイって言ってるのを見るけど俺が思うに、カッコ良くもなんともない。肺が真っ黒になるみたいだし、第一タバコを買うだけの金が勿体無いと思う。

ストレス上の問題で吸わざるを得ないんだったら仕方ないと思うけど……。

姉貴は吸わないよなあ。

もう22歳なんだから吸ってもいい歳だ。まあ吸わないでいてくれた方が俺もいいけど。

タバコのせいで早死にされたりしたら堪らないし。

姉貴、タバコを吸わない代わりにゲームを勝手にやるんだよなあ……。

「あ、そうだ兄貴。兄貴からも言っというてよ、姉貴に。勝手に人のゲームやんなって」

「忘れなきゃ言っというてやるよ」

「俺から言っても効き目ないんだから……。じゃ、おやすみ」

「おう」

そして俺は自分の部屋に行って、ベッドに入った。けどなかなか眠れない。

放課後、クボに言われた事がまだ頭の中にあっただ。

『普通さあ、付き合ったら名前で呼ぶっしょ』

この言葉とクボの顔が頭の中でグルグル回ってる。

なんで普通は名前で呼ばないといけないんだ。どこにそんな決まりがある？

法律で決まってるのか？

『第528条 恋人同士は名前で呼び合わねばならない』

どこにそんなたわけた法律があるって言うんだ。

なんか思い出したら急に腹立ってきた。クボの奴……、羊なんてやるんじゃない！

——クボと奈美さんは名前で呼び合ってる。

2人の関係を羨ましいと感じないと言えば嘘になる。だけど……

俺は小田さんを「彩乃ちゃああん」って呼ぶつもりはないし、小田さんが俺を「ちよっと晴樹！」って呼ぶ事も想像できない。

第一キャラ違っちゃうし。

あれはあくまで「楠本奈美と大久保剛史の関係」であって、「恋人同士の関係」ってワケではない。

別に恋人同士ならあーしろこーしろって決まってるワケじゃないんだから、やっぱ自由でいいじゃん！ クボが変な事言うから頭こんがらがってくるんだよ。いいんだ、俺らは俺らの呼び方で。「小田さん」と「榎本くん」でいいんだよ。

自分に言い聞かせて、とにかく目を瞑った。

眠れない、とか言っときながらなんだけど、目を瞑って3分もしないうちに俺は寝れてしまった。

次の日、部活の朝練中に小田さんが体育館にやってきた。

部活が休憩に入ってやっと彼女の許に行けた。

「ごめんね、お待たせ」

「ううん。あのね、日曜日………暇？」

「あー……うん。大丈夫」

そう言うと、小田さんの顔がパアツと明るくなった。顔に出易い

んだなあ。

「じゃああの………一緒に………出掛けよ………？」

「うん。そうしょっか」

俺は小田さんに向かって微笑んだ。そしたら小田さんも満面の笑みを返してくれた。

ああー。ずっとこうしてたいんだけどなあ……。

「オラ榎本ー！ 始めるぞ、早く来い！！」

後ろから先輩の怒鳴り声。ああーもうるさいな、分かってるよ。「今行きます！ えっと、じゃあね」

軽く小田さんに手を振って、俺は体育館の中央まで走ってった。ゲーム中、小田さんはずっと見てた。

見られると緊張するな……。

「……榎本ボール！！」

「んえ？ ……ふごっ！！！！」

う………顔面直撃……。鼻痛い……。

俺、最ツツ高に、カッコ悪い……。

なんかもう小田さんの顔見れない。

「大丈夫か！？ ちゃんとボール見ろよ！ 練習の意味ないだろ！」

「すいません……」

「鼻なんともないか？」

「ちよっと痛いです……」

「ったく、しょーがねえなあ。一応保健室行ってこい」

部長に背中を押されて、俺は保健室に向かった。

……な……んか背後に違和感が……？

「なんでお前も来るんだ」

「なんでって、同じ部員だからさあ！」

クボ……コイツ俺の失敗を嘲笑う気だな。もういいよ。笑うなら笑え。

———でも、いつまで経っても笑う声は聞こえてこない。「クボ、笑うなら笑っていいぞ」

俺はそう言った。だけど返事は無い。

「クボ？」

振り返ると、クボの姿は無く、代わりに小田さんの姿があった。俺の顔は一気に真っ赤になった。

「クボくんなら「ヨロシク」って言って行っちゃったけど……………大丈夫？」

「う、うんっ！ 平気平気！ こんなヘーっちゃら！！」

とは言ったものの、鼻はまだ痛い。なんて言うか、鼻血の出る1分前みたいな痛さ。

だけどこんなトコで鼻血出たら大変だ。

とにかく小田さんだけにはそんな姿見られたくない。

クボとなら笑い話で済むけど、小田さんだけにはそんなみつともない姿見られたくないんだ。全校生徒の前で醜態曝すより恥ずかしいよ。

でも、なんか、ちょっとヤバそう。

……………こんな時、大分先のトイレに駆け込むのがいいか、いち早く保健室に入って先生だけに鼻血姿を見られた方がいいか、どっちだ！

結論。どっちも嫌だ！！

だけどどっちかをやらないと一番嫌なケースになる！

俺のとった行動とは……………

一寸（と思いたい）先のトイレへ！！！！

「あ、榎本くん！？」

小田さんの声が、まだ静かな廊下に響く。

ごめんよ、小田さん！ だけど俺は小田さんにだけは見られたくないんだっ！！

最初、急いで女子トイレに入ってしまった…………。

慌てて戻って男子トイレの鏡で顔を見た。…………良かった、まだ大

丈夫だ。

安心したせいか、鼻の奥の方がツーンと痛くなって———出た。  
「うおっ!!」

なんだっけ、こう言う時は上を向くんだっけ? 寝転ぶんだっけ???

あ、でも上を向くとダメって聞いた事があるぞ。だけど母さんは鼻血が出たら寝転ばされたって言ってた……。

一体どっちを信じればいいんだっ!?

ティッシュを持ってれば話は別だけど……。

———そうだ、トイレトペーパー!!

俺は必死に上を向いて個室に入り、トイレトペーパーをグルグル引き出して破いて、鼻に突っ込んだ。

危なかった……。もう少しでジャージに付くとこだった。

治まるまでココに居ようか……。だけど小田さんが置いてけぼりだ。

どうしよう。鼻血が出た事を素直に言って保健室に行こうか……。それとも、大声で小田さんに嘘を言おうか……。

やっぱり好きな人に嘘つてのは気が進まない。だけど……好きな人にこんな姿見せるのも気が進まない……。

くそー! どうしたらいいんだ!!

あ、でもそういえば、さっきから小田さん、声を掛けてこない。帰っちゃったのかな……?

だったら外に出ても大丈夫だ。そこから保健室まで走っていけば……。

俺はそう考えて、トイレからヒョッコリ顔を出した。右を見ても居ない。左を見ても………居た。

気を遣ってくれてるんだ。向こう側を向いてくれてる。

「榎本くん……? 大丈夫?」

向こう側を見ながら言った。小田さん……なんていい子なんだ! 「大丈夫……。ありがとう」



そう言ったら小田さんはこっちを向こうとしたから、慌てて止めた。

「まままま待って!! お、俺、今、ちょっと見られたくないって言うか……。しょ、詳細は言えないんだけど……。だから……。俺の顔見ないでね?」

一応鼻を手で隠して言った。そしたら小田さんは、コクンと頷いた。俺は右側を向いて、保健室へと向かった。後ろには小田さん。俺の顔は見ないでいてくれる、優しい彼女。

多分、小田さんじゃなかったら俺の顔見てケラケラ笑うだろう。

「なーに晴樹、鼻血ー?」と大声で言ってケラケラ笑うだろう。そして俺は注目の的になっ……。!!! 最悪だ!!!

だけど俺の彼女はそんな事をしないでいてくれる。

胸を張って「自慢の彼女だ!」と言える彼女。

やっと保健室の前まで来て、ドアをノックしてから開けた。

「あの……………」

「あら、鼻血?」

————— 今までの俺の計画は、この保健の先生によって見事に打ち碎かれた。

俺のすぐ後ろには小田さんが居るってのに。

この先生は生徒の隠し事を暴露出来るほど偉いのか?

「バスケットボールが当たったので」

なんか凄くムカついたから、わざと不機嫌そうに言ってやった。

だけど目の前の先生はなーんも気付いてないみたいだ。

くそお……………」

「鼻血出たのねー?」

先生は何かに書きながらそう言った。そうですよ、その通りですよ。

全くもってその通りですわ。だけど鼻血鼻血大きな声で言わないどいてもらえますか。

「まだ鼻は痛い?」

「はい、少し」

俺がそう言うと、先生は急に鼻を触ってきた。

「骨は大丈夫そうね。この辺りを押さえてしばらくジツとしておい  
て」

優しく触ったと思ったら、次は鼻の骨のトコを押して言ってきた。  
痛い痛い！ ボールより先生の手の方が痛い！！

言われた通り、骨の辺りを押さえて待った。しばらくしてから鼻  
センを抜くと、見事に止まった。良かった。

水でバシャバシャ顔を洗って、保健室を出た。

小田さんは壁にもたれて待っていてくれた。

「大丈夫？」

「うん。……………あのさ、さっきの…………」

「何も聞いてないよ」

小田さんは、いつもの優しい笑顔でそう言ってくれた。やっぱり  
優しい自慢の彼女！

「今から部活行くの？」

体育館に向かう廊下を歩きながら、小田さんは俺にそう聞いた。  
多分今から行ってもあと5、6分くらいしか出来ないだろうなあ。  
でも一応部長に一言言っとかないと…………。

「うん」

どうせ荷物を取りに行くんだし。まあ、シュート練習くらいは出  
来るだろ。

「そっか。じゃあ私は教室に…………」

「小田さん」

階段を上がろうとしてた小田さんを、俺は呼び止めた。「ん？」  
と言って振り向く。

「ありがとね」

俺は笑って手を振った。

小田さんも笑顔で頷くと、手を振った。

そして体育館に戻り、部長に「大丈夫でした」と言った。  
そこからシュート練習をして終わった。

さて、今から授業だー……………。

## 第15話 嘲笑うゆん

部活も終わり、授業も終わり、また部活も終わり、やっと帰れる。フツと横を見たらクボが奈美さんに怒られてた。また何かやらかしたんだな、クボの奴。

「榎本くん、帰ろ」

後ろから小田さんが声を掛けてきた。そう、今日俺は小田さんとあの公園まで一緒に帰るんだ！

「うん」

荷物を背負って下駄箱へ。

奈美さんはまだ怒ってる。クボはまだ謝ってる。

ま、喧嘩するほど仲が良いって事だな！

学校からあの公園までは5分くらいしかない。それでも俺は、小田さんと一緒に居られる事が何より嬉しかったんだ。

わざと歩調を緩めて歩いた。だってそうでもしないとすぐに着いてしまう。

「また今度……………」

歩いてると、小田さんが徐に口を開いた。

「出掛ける約束、したでしょ……………」

約束。……ああ、今日の部活の時のね。日曜の。

「したね」

「あれね、ゆんも……連れてっていい……………」

「え、なんで？」

なんでも、後から思い出したらいいんだけど、日曜日は家族で出掛ける予定だったらしい。

だけど嬉しい事に、小田さんは家族で出掛けるよりも俺と一緒に居たいと思ってくれたらしく、結局お母さんとお父さんと弟さんで行く事になったみたいだ。

そしてウツキウツキワクワク約束をしに来てくれて、OK。

でも授業中にゆんの事を思い出して、あーりやりやこりやりやつて事で今に至る。

「そっかぁ……そゆ事ね」

「だ、ダメだったらゆんに留守番ししてもらえばいい話なんだけど………」

「いいよ。ゆんも連れといでよ」

「ほんとっ!？」

「うん。ゆんと遊ぶの楽しいしさ」

「ありがとう!!」

と、言う事で、日曜日。俺と小田さんとゆんは、今山の中に居た。いつもより少し遠出。だけど冬に来るにはちと寒すぎた。

隣には綺麗な水が岩の間をチョロチョロ流れてて、上を見上げると緑のシート。その間から太陽の光が差し込んでる場所もある。

そして光を時々遮るのは、小さな鳥達。緑のシートの更に上から、鳥のさえずりが少し聞こえる。

そんな中を、ゆんは嬉しそうにドタドタ走り回ってる。

って言うっても遠くに行く心配は無い。小田さんが手に持ってるのは、伸びるリードだから。俺もそんなのがあるってついさっき知ったんだけど。今までゆんのリードは普通のだったし。

ゆんの、黒い薄っぺらい耳は相変わらずピロピロ揺れてて、クルンと巻かれた尻尾はアンテナみたいに左右に揺れてる。

うん、ゆんが喜んでくれて嬉しいよ、嬉しいんだけど………昼ご飯どーすんだよ、これ。

今何時だろう？

「ね、時間分かる？」

「あ、うん。腕時計……」

腕時計かー。あんまする気が起きないんだよなぁ……。付けるの面倒くさいし。

こんな時、携帯があったら便利なんだろうな、って思う。

「今は……10時半!」

「うわ……。早いね」

「出るのが早かったからね」

一体俺は何時に家を出たんだ。寝ぼけて出たのかもしれない。家からあの公園まで行って小田さんと一緒にこっちに歩いてきたんだから、それだけでも結構な時間を費やす。

それをやっても尚、10時半って事は、俺は家を最低でも9時には出たって訳だ。

休みの日にもそんな時間に起きるなんて……。俺って凄いかも。  
「ゆんっ!？」

小田さんの声が、静かな山に響く。ハッとして見るとゆんのリードが木に巻かれて、丁度首が締まってる。

真正面から見たとすると……。木を間に挟んで小田さんが右、ゆんが左。んでリードは木を一周しちゃってるから、ゆんの単純な頭では自分が一周して外そうなんて事は考えられないみたい。いくら小田さんが「こっちおいで」って言っても、ひたすら踏ん張るから更に首が締まる。ゆんにも一応オスとしてのプライドがあるみたいだ。でもさあ、なんか凄い顔になってくぞ……。おデコにシワが寄りっぱなしで。

俺は小田さんに、「小田さんが向こうに行くってのは出来ないの?」って聞いた。そしたら「私が負ける事になっちゃうから……」って言った。

小田さん曰く、オモチャで遊ぶのでも、人間から放すのはタブーらしい。

そうすると犬の方が「オレのが上だ!」っておバカな勘違いをするから、そこからドンドンやりたい放題犬に繋がってってしまうみたいだ。

だからこの場合も同じ。ゆんが自らこっちに来るか、強制的に来させない限りはこの図が延々と続く。どっちも負けようとしなから、まるで綱引き状態。

でもゆん、大分力があるみたいだ。なんかリードがプッチンって

切れないかハラハラドキドキする。

さすがにずっとこの図が続くのはゆんも可哀相なので、俺も呼ぶのを手伝った。

2人で犬の名前を連呼する。傍から見たら変な図なんだろうな……。

こんな時は山で良かったって思う。

しばらく呼び続けた。「ゆん!」とか「ゆんこっちおいで!」とか。

しかし一向に来ない。なんか自分で首締めてるって言っても過言じゃないのに、ゆんはさっきからゲホゲホ言ってる。

「もうこの場合しょうがないんじゃない……?」

「うん……」

そう言ったから、小田さんは自分からゆんの方に行く。……と思った。

思ってたんだけど、急にリードの紐自体を引っ掴んで引っ張り出した。

……そっち!? そっちですか!?! 強制的ですか!!?!?

「ゆん………おいでっ……!」

ぐいぐい引っ張っていると、じきにゆんの下にあった葉っぱがズリ移動し始めた。勿論ゆんも。

「お……もうすぐ! もうすぐ!!」

ゆんが命懸けの綱引きに挑戦してる横で、俺はゆんのケツを扇いだ。少しでも早く向こうに行けるように。そんな事したって意味無いのは分かってるけど。

そして数秒後、葉っぱが1枚、宙を舞った。ゆんの足も少し地面から離れた。やっと小田さんの方に行けて、ドラマとかで見る限りでは飛びつくのかなーと思いきや、何事も無かったかのように地面に鼻をくっ付け始めた。

「…………ゆん、なんともないの…………？」

「多分大丈夫……」

そう言う小田さんの手は真っ赤だった。まるで紅葉のような色の手を、俺はじっと見つめた。

俺に対しては優しい小田さんは、犬に対して厳しかった。

まあただ単に厳しいだけってワケじゃないんだけどね。愛のムチってヤツ？ 飴とムチってヤツ？？

俺がそんな事考えてるとも知らず、ゆんは相変わらず元気に走り回る。さっきまでの「ゲホゲホ」の声が嘘みたいだった。

頭上からは鳥のさえずりが聞こえて、時々優しく風が吹き、それに応えるように葉っぱ達も揺れてザワザワと音を出す。ああ、自然界っていいなあ…………。

もしもこの自然の中に俺達だけしか居ないのなら……………どれだけ幸せなんだろう。

他の誰かが俺達の空間を荒らす事も無く、邪魔する事も無く。

永遠に、この景色を見ていられる。

風に吹かれて宙を泳ぐ葉っぱを追いかけるゆん。

そんな無邪気なゆんを見つめる小田さん。

その後姿を見つめる——俺。

この関係を保ちたい。この関係を壊したくない。小田さんと、ずっと一緒に居たい…………。

そう思えば思うほど、里砂の二の舞にしないように、と急いでしまう。

他の男に取られないように、と焦ってしまう。

「あ、もみじ！」

ボーッとしていると、小田さんが声をあげた。彼女が手に取ったのは、小さい真っ赤な紅葉。小さいけれど、一生懸命真っ赤な色を保ってる健気な紅葉。

「……ホントだ。まだ残ってたんだね」

他の仲間達が枯れて土に還っていく中、この紅葉は小さいながら



もまだ此処に残っていた。まだこの場所に居た。たった1枚だけになっても。

やっぱ……自然って凄い。

「これ持って帰って飾っておこうかな」

「でも萎<sup>しお</sup>れない？」

「大丈夫！ ラミネーターを使うから」

「ラミネーター？ 何それ、ターミネーターの一種？」

俺がそう聞くと、小田さんは笑いながら「違うよお」と言っ  
て、説明してくれた。

なんか透明なファイルみたいなのに挟んでそのラミネーター  
ってのに差し込むんだ。上から差し下から出てくる。ちなみに独特  
の匂いがするらしい。

そうすると、手作り下敷きみたいなのに出来て、それなら萎  
れる心配も折れ曲がる心配もないらしい。

頭いいんだなあ、それ作った人。

ついでにお金持ちなんだなあ、小田さん家。

俺なんかラミネーターの「ラ」の字すら聞いたこと無い。勿論  
見た事も無い。

小田さんはこの紅葉を本の葉に使う予定みたいだ。

「それにしても綺麗な朱<sup>あか</sup>だね」

「ね！ 秋に山来なかった事に後悔しちゃうね」

「確かに……。こんな近くにあるのに毎年遠くから見ただけで  
終わってたからなあ」

そうだ。来年は小田さんと一緒に来よう。そして一緒に紅葉の  
下でお弁当を食べよう。ゆんも連れて。

きっと楽しいだろうな。

「じゃあ……。あの、来年……。一緒に、来よう？」

「え……。うん！！」

ビックリした。考えてた事分かったのかと思って。同じ事考  
えてたんだろうか。

なんだかちよつと………嬉しいじゃないか！

それから俺と小田さんは、リードを引っ張りまくるゆんを連れて山の中を散策して、昼ご飯を食べる為に町に戻った。

「犬も入れる飯屋ってこの辺あったっけ？」

「あんまり聞かないよね」

「まあいざとなったらコンビニかどっかで買って食べれば……」

「うん、そうだね！」

いくら町を歩いてても、犬OKの店なんて無かった。

いざとなったから俺らはコンビニで買って川原に行った。

ゆんには小さなバスケットを買った。

「ゆん、バスケットだよ」

「あ、すげー。はははっ！ 喜んでる」

「榎本くんあげてみる？」

「え、いいの？ よっしゃー」

俺は小田さんからバスケットを受け取り、ゆんにあげた。だけど犬にあげた事なんて無かったから、少しビクビクしながら。掌に生暖かい舌が当たってくすぐったい。

1個あげ終わると、ゆんは「もっと、もっと」とでも言うような顔で見てきた。

「もう無いぞ」

そう言ったけどゆんは納得しないみたいだ。手をひたすら舐めている。

「無いって！ くすぐったいよゆん！」

「手を広げると諦めるよ」

「手？」

「うん、こうやって」

小田さんは両手をパーにして広げた。なるほど。

俺も真似してやってみると、嘘みたいに簡単に諦めた。

「へえー!!! こんなんで諦めるんだ!? おもしれー!」

ホントに面白い……!!!

横では小田さんも笑ってる。なんて幸せな時間……。

——そんな中、俺は考えた。クボが言っていたように、名前で呼んだ方がいいんだろうか? 俺らは俺らの呼び方で、なんて言ったけど、恋人同士なら名前で呼び合った方がいいんだろうか……? 小田さんはどうなんだろう? ずっとこのまま「榎本くん」でいいのかな。

俺にも、名前で呼んでみたいって言う気持ちはある。だけど……。

俺ら、まだキスもしてないんだよ!!!

そんな段階から「彩乃」と「晴樹」なんて、なんか、なんだか、不自然じゃないか!?

なんかさ、無理して恋人恋人させてるぜ! みたいになったりしないか!?!?

「おお………おお小田さん!!!!」

ヤバイ! 口が震えた!!! 声が震えた!!! 言葉がドモった!!!!!!

「……? どうしたの……?」

「や……いや、あ、の……あっ………あははっ! あ、あのさ………」

うー。なかなか言葉が出てこない!! 小田さんは頭の上に「?」マークを並べて俺を見るばかり!! どうしたらいいんだ……誰か助けてくれ!!!

「あっ! ゆんー!!!」

………モジモジしてる間に小田さんはゆんに連れていかれた。くそっ! ゆんのが1枚うわてだったか!! 強引なヤツめ。

「……ん?」

さっきまで小田さんが居た所に、赤いボールが1個落ちてた。ゆんのかな？

「小田さん！」

立ち上がって大声で呼ぶと、小田さんは川原の川の近くで「なに？」「とちよつと控えめな、でもいつもよりは大きな声で返事をした。」

俺はその小田さんに見えるよう、赤いボールを頭の上で振って、「これゆんのー！？」と聞いた。まあ聞かなくても分かるけどさ。だってゆんのグッズは全て『赤』だから。

小田さんの返事を聞く前に、俺は1人と1匹の許へと走った。走ってくる俺を見て、ゆんは興奮したみたいだ。ピョンピョン飛び跳ねてる。

「これ、ゆんのだよね？」

「……あ、ホントだ！ うん！」

「投げていい？ ゆん取ってくる？」

「えへへ……。1回投げてみて？」

「……………」

小田さんの言葉と笑いの意味も分からぬまま、俺はボールを投げた。同時に小田さんも手に持ってたリードを放す。ゆんはそのままタッタカタッタカ走ってった。

「！ ちよつ……。ゆん！？ いいの？ 行っちゃうけど……………」

「いいの、いいの。帰ってくるから」

いいのか……。？ ゆん、ホントにちゃんと帰ってくるのか……。？

ゆんはだだっ広い川原を存分に駆け回り、赤いボールと戯れてる。向こうの方で部分的に白い尻尾がブルンブルン揺れてる。緑色の草の中に茶色と白の尻尾。今は尻尾しか見えない。それがまた可愛く思える。

しばらくするとヒュッと黒い顔が現れて、口に赤いボールを銜くわえてる。

その黒い顔との距離がドンドンドン縮まって………すぐそこまで来た。

「すげー！　ちゃんと来た！！　………あれ？」

んで目の前に来る、と思ったらその場所にボールを吐き捨てて、俺を素通りしてった。

「……………」

「これが無ければ凄いやね！」

小田さんが笑いながら言った。笑い事……なのかな……？　まあいつか。笑えるなら……………。

でもなんか今俺、人間の男としてのプライドをズタズタに引き裂かれた気分なんだけど………これは何故??

そして背後に居るゆんの、嘲笑う顔しか想像できないのは………何故??

## 第16話 逃げ！逃げろ！

今、俺達は帰り道だ。ゆんのリードは俺が持ってる。

川原では存分に遊んだ。こんなに疲れたのは久しぶりだ。

部活でもここまでは疲れないぞ。なのに目の前の黒い顔、ゆんはまだ力が有り余ってるみたいで、リードをグイグイ引っ張る。おかげで俺の肩は外れそうだ。

ゆんに引っ張られるがままに、俺達はすぐにあの公園に着いてしまった。

公園内の時計を見ると、今の時刻は夕方5時半。

ちなみに小田さん一家が帰ってくるのは8時頃だそう。

「小田さんは……今からどうするの？」

「えっと……榎本くんが良ければ……い、一緒に……居たいなあ……」

最後の方はもう蚊の飛ぶような声だったけど、分かった。

「おっけーおっけー！ 全然おっけー！」

だって俺ももっと一緒に居たいし！ だから小田さんの言葉は凄く嬉しい。

「んーと、じゃあどうしよっか。もう段々寒くなってきたよね」

だけどゆんを連れて入れる店とかも無いし……。

考えてたら、小田さんが口を開いた。

「あの……あのね？ う、ウチ……」

「……………ウチ？」

「ウチ、に……来れば暖かい……けど……」

……それはもしや、あれか？？

あの、「ウチに来て！」と言ってるのか……………？

ああ、うん。俺はいいよ、全然。でも親父さんとかが知ったりし

たら大変なのは小田さんでは……？

「どこの馬の骨かも分からん男を連れ込んでいいと言った覚えはない！！」とか怒鳴られたり……………」

はっ！　もしかしたら「もうその榎本とか言う奴と会う事も許さーん！！」とか言われたりするかも…………！　そうしたら俺と小田さんは会えなくなってしまう。こんな風に笑ってお出掛けなんて事も出来なくなってしまう！！！！

どうしよう…………。

「……………榎本くん？　…………あの、嫌ならいいよ、ホントに」

「え？　あ、ううん。嫌じゃないよ？　全然」

…………でもそうだ、今は小田さんの家族は出掛けてる。ならば別にビクビクする事は無いじゃないか！　何かするわけでも無いし！

……………や、違うよ？　何かってそんなやましい物じゃないよ？

全然！

「行くよ。小田さん家」

ああ…………言ってしまった…。そして行ってしまった…………。

今ココはその行ってしまった小田さん家。

外からは見た事あったけど、中は見た事無かった。ゆんのケージが置いてある玄関先は広い。しかもケージの色はピンク色。どうもゆんには男らしい色は合わないみたいだ。俺だってそう思う。

靴を脱いで上がると、右側にリビングへと繋がる木のドアがある。で、まあそこはスルーして真っ直ぐ見ると、階段……………螺旋階段だ。なんかカッコイイ。勿論2階に行ける。

階段の横を通って行くと、今度は左側に和室。来客用だそうだ。でもそれは小田さんの友達用じゃなくて、大人の話用。お父さんのお客さんとか、お母さんのお客さんの場合だけらしい。

そこもスルーして少し進むと、長い木の廊下。今俺が来た道とぶつかってて、Tの字って感じ。右を見るとキッチンへ繋がるドア、左を見ると2、3個部屋が見える。左の道に行って、まず右側の部屋。お風呂みたいだ。洗面台、洗濯機、その奥に風呂がある。

んでもうちよつと進むと次は左の部屋。そこは物置になつてゐたいだ。

そして通り過ぎて1番奥まで行くと、そこは仏間。仏壇が置いてある。

「へー……。広いんだね」

「そうかな。あ、座ってていいよ?」

俺はリビングに入つて、コタツの中に足を入れた。スイッチを入れて間も無いからまだ寒い。でも段々暖かい風が足に吹いてきた。

リビングの俺が座つてるところからはキッチンに居る小田さんが丁度見える。

「ココアとコーヒーってどっちが好き?」

「え? あ……えっと……コーヒー……かな?」

そう言えばココアって最近全然飲んでない。小さい頃——小学2年生くらいまでは飲んでたんだけどなあ……。

「はい!」

小田さんがコタツの上にコーヒーの入ったカップを乗せた。白い中に黒いコーヒー。湯気がモワモワたつてゐる。

「ありがとう」

飲んでみた。……熱い。でも美味しい。微糖だ。俺が1番好きな味。

コタツの角を挟んだ左隣には小田さんが居て、ココアを飲んでる。あー……。幸せ。

和むなあ、こういう空間。

もう1口飲もうとした時、外から声がしてきた。……まさか、ね。

「えっ? あれ? お父さんの声……!」

「……まっ、マジで!? だって帰ってくるの8時頃だ、って……時計を見ても、今はまだ6時過ぎだぞ!? なんでこんな早いんだよ! 予定時刻はちゃんと守ろうよ!!」

「榎本くん、こっち」

「あ、うん!」



小田さんに連れられてったのは、風呂場だった。なんで？　なんで風呂場？？　まさか鍵を掛けてチヨメチヨメなんて……。

あぁっ！！　なんて破廉恥な！！！！

「あれ！」

小田さんは何かを指差した。

アレ？　アレってなんだ！！　いや、まさか………風呂場にそんな物が置いてあるハズがない……！！　落ち着け、落ち着くんだ  
榎本晴樹ッ！

「は、早く、榎本くん！」

恐る恐る目を開けると、小田さんが差してたのは小さな窓だった。俺が窓と小田さんの顔を交互に見てると、「家の裏に出られるから」と言った。

俺は急いで風呂のフタに足を乗せて、窓の枠に手を乗せた。狭そうな窓は、見た目どおりホントに狭い……。期待を裏切らない窓だ。でも、なんとか肩が出た。

「彩乃はまだ帰ってないのかしら？」

リビングの方から声がする。ヤバイ！　心臓がバクバクだっ！！！！

「ん？　なんだ、このコップは」

しまった！　コーヒー！！　忘れてた！！　バツチリ証拠が残ってるじゃないか！！

もうこれは「見つけてください」って言ってるようなもんだ！！　ヤバイ！　本当にヤバイ！　早く出なきゃ……！！

リビングからの声が聞こえる、って事は……下手したらこっちらの声も聞こえるんだ！　絶対に声を出しちゃダメだ！

「彩乃ったら、誰かお友達を連れてきたのかしら？」

「彼氏とか言うんじゃないだろうな」

「いやだわお父さん。そんな怖い顔しちゃって。いいじゃないの、彼くらい」

「ダメだダメだ！　断じて許さん！！」

あうあうあう……。典型的な反対親父さんだぁあ！！

きっとバレたら「馬の骨骨骨ー！」って追いかけてくる！ そして八つ裂きにされてしまう！！ は、早く！ 早く出ろよ、俺の身体！！

……よし。やっと腹まで出た！ あともう少しだ！

「彩乃、居るのかー？」

………ん？ なんか……声が近くなったような……？

「彩乃ー！」

「お父さん、お友達を送りに行ってるかもしれないでしょう」

「男じゃないだろうな！」

「またそんな事を……」

ごめんなさい、お母様、お父様、俺は男です。

あろう事か男の俺はご両親の居らぬ間に女の子のお家に入ってしまいました。お許してください！ だから八つ裂きだけのご勘弁を……。

……よし、もう少し！ 足を出すだけだ！

「彩乃ッ！！」

こ………声が………近い！！ すぐそこだ！！！！

ヤバイヤバイヤバイ！！ 本気でヤバイ！！！！ マジでヤバイッッ！！！！

「おい母さん、これはなんだ！」

……ホッ……。声が遠くなった……かな？

「あら、男の人の靴ね？」

………！！！！ 靴！！！！ くつくつくつくつ！ 靴！！！！

！ なんてバカな奴なんだ、俺は！！？ 靴を忘れるなんて！！！！

「やっぱり男が居るのか！」

お、お父さんの声……怒ってる気がする……。

「コレ、秋也あきやのじゃないわよね？」

秋也……？ ああ、弟さんかな？

「違うよ、おれこんなの履かないし」

……こ、「こんなの」………まあいいけど……。

とにかく俺は出る事を考えないと……。

「やっぱり男じゃないか！ けしからん……！」

……よし！ 出た……！

「彩乃おっ……！」

……い、今……お父さんがお風呂のドアを開けたみたいだ……。小田さんが口パクで「早く！」って言ってる。そうだ、俺は早く逃げないと！

「なんだここに居たのか……。何してた？」

「あ、あのね……。お、おふ、お風呂の準備を……。って思って……」

……」

「風呂の準備？ もうしてあるだろう、母さん」

「ええ、出て行く前に準備していったわよ？」

「え？ あ、あああれー？ あ、あ、ほ、本当だあ！」

ごめん小田さん！ でも今俺が出てったら小田さんまで雷喰らうだろうから……。明日学校で……！

俺は靴下のまま走ってきてしまった。でもあそこで俺が出なかつ

たのは正解だと思う。靴下のまま、つてのはどうかと思うけど……。

あー。足冷たいし、足の裏真っ黒だし。

この最悪なシチュエーションで、俺は小田さんのお父さんに（一応）会った。

次の日、学校で小田さんと会った。

「ごめんね、昨日……。大丈夫だった……。……？」

「うん！　なんとか言い訳出来たから……」

ああ……。良かった……。小田さんが滅茶苦茶に叱られてたらどうしようかと思った……。

「あ、そうだ、これ……」

小田さんは自分の机に行ってカバンを開けると、何やら袋を持ってきた。

うわー、凄い。ちゃんと値段の付いてる袋っぽい。スーパーの袋なんかじゃない。

「榎本くんの靴……。昨日靴下のまま帰らせちゃって……。ごめんね？」

「……。……いいよ！　全然いいよ！！　ホラ、俺足って丈夫なんだ！　そ、そう言う問題じゃないかもしれないけど、でも全然大丈夫だったから！　小田さんが謝る事は無いし、しかもこんな高価な袋で……。俺なんかに勿体無いっ！！　お、俺の靴臭くなかった？　大丈夫？　大丈夫だった！？　ふ、袋は返すから……。あの……。……小田さん……。……？」

俺は随分とテンパってしまったみたいだ。だってでも口が勝手に動いちゃったんだもん。俺の目の前では小田さんが笑ってる。ひとしきり笑った後、小田さんは「はい」って言って高価な袋ごと俺の

靴を渡してくれた。

「あ、ああありがとう………は、はい、袋……」

「このまま家に持って帰ってもいいのに」

「いいよ、いいよ！　こんな高価そうな袋家に持って帰るわけには  
いかないよ！　第一家に持って帰ったら母さんが何言うか……」

「うん。……分かった」

……俺はもう笑うしかない。だから笑ったまま袋を小田さんに返した。

「ありがとね、わざわざ」

「ううん、全然！」

小田さんはニッコリ笑うと、袋をカバンの中に入れた。

もう昨日の事に懲りて一緒に出掛けない、とか言われなくて良かった……。

「……あの、さ、小田さん………」

「うん？」

「ま………また今度、さ」

「……？」

「い、いいい一緒に………ど……ど、どっか行こう！！」

ああもう！！　なんで俺ってこう男気が無いんだ！！　なんでこんなナヨッちいんだ！！

こんな時誘う技術の1つや2つ持ってたらもっともっとカッコ良く言えたのに！！

「今度一緒にどこか行かないかい？　ベイベー」とか「君の為にホテルの部屋を取っておいたのさ」とか、キザだとは思うけど、明らかに体狙いかとも思うけど、言えるもんなら言ってみたいよチクシヨウ！！！！

「うん！　行こう！」

……だけど小田さんはこんな俺でも好きになってくれたんだ。  
こんな俺でもいいのかなあ？　こんな俺とでも、楽しく居てくれるのかなあ？

「……どこ……行きたい……?」

って言っても歩きか自転車だから行けるとこなんて高が知れてるけどさ。あ、あと電車もあるか。電車があれば行ける所の幅は広がるなあ。電車でどこか行こうか……。

「どこでもいいよ。………今度こそ2人で……」

「……そうだね。今度こそゆん無しで!」

「うん!」

どこに行くか、なんてどうでもいいや。小田さんと居ればそれでいい。

小田さんと居れば……俺は幸せなんだ!

## 第17話 クボの浮気疑惑

日曜日。今日もまた、俺と小田さんは出掛けていた。勿論今度こそ2人で。

だけどコレと言って行く所も無いので、あの公園のブランコに座って世間話をしてる。

「そう言えばさ、最近奈美さんとクボってどうなの？」

「榎本くん知らない？」

「え……知らない、けど……」

「私も知らないの」

……謎のカップルってワケか。

『おばさんカップル』の後は『謎カップル』かよ。この頃クボ先に帰っちゃうし……。

「あ、そういえばこの間奈美怒ってたなあ」

「怒ってたって？」

「奈美の話によるとね、クボくんから一緒に帰ろうって言ってきたのに、先に帰っちゃったんだって」

おお。そりゃあ立派に最低だな。クボの奴……命知らずめ。奈美さん可哀相に……。だけど……。

「クボにしちゃ珍しいね、そんなの」

「でしょ？ 私も聞いた時変だなあって思ったんだけど……」

……まさかクボ！ 浮気かッ！！？

い、いや、ダメだ。疑うなんて！ 証拠も根拠も無いんだから。

……でも……。

「……あ、クボくん」

「え？」

ホントだ。クボだ。1人、なのかな……？

公園のベンチの後ろにある生垣の影に、クボの顔が少し見える。ちよっと近づいてみよう！

「あ、榎本く…」

「しーッ！ ……ホラ、来てみなよ」

俺は口到人差し指を当てながら手招きした。少し罪悪感があるけど、まあいいや。小田さんも不安そうな顔でゆっくり近づいてきた。「んー……よく見えないなあ……」

でも辛うじて声は聞こえる。

「じゃあ。気を付けろよ」

「うん。ありがとう！」

「……なんだよ？ 早く行けよ」

「あのね……また家行ってもイイ……？」

何ーっ！！？ 家！？ 家だど！？ しかもこの声は奈美さんでは無い！！

って事はやっぱ………ダメだクボ！ OKしちゃダメだ！

パツと切り捨てろ！

パツパツパツと……

「おう、いいよ。いつでも」

………パツパツパツと………パツパツパ………。

！！  
バカ野郎！ パツパツパどころか「いつでも」まで付けやがって

それ以降、話し声は聞こえなかった。

隣で小田さんも驚いてるみたいだ。ひたすら瞬きしてるだけ。ちよつと生垣の上に頭を出して見てみた。

………もうクボの姿は無い。

俺と小田さんは近くにあるベンチに座った。

「……クボ……浮気、なのかな……？」



「分からないけど……でもあの話だと……でも……」  
ああ……やっぱそりゃ混乱するよなあ。俺も混乱してるもん。  
クボの奴、何してんだよ……！！

次の日、俺はクボと目を合わせられなかった。でも小田さんはもつと奈美さんに目を合わせられないはず。だって小田さんは嘘付けれないから、誤魔化すの得意じゃないから。  
気遣うあまり、喋っちゃうだろうから……。

放課後、小田さんは口を一文字にして俺のトコにやって来た。  
窓に手を付くやいなや、肩で息をした。

「あ、お、小田さん。……どうしたの、大丈夫？」

「しゃ……喋っちゃうといけないと思って……」

「うん。でも……息まで止める必要は無いと思うよ？」

小田さんは荒く息をしながらコクコクと頷いた。

「ほーい榎本くん！」

俺の後ろからクボが急に声を掛けてきた。いつもなら全然ビックリしないのに、今日は何故か「うわああ！」と声をあげてしまった。  
「……な、なんだよ……彩乃ちゃんまで」

「え？」

窓を見ると、小田さんは教室の向かい側にある手洗い場まで後退っていた。

ああもう……このままじゃ小田さんの方がどうにかなっちゃうよ……。

「悪いクボ！ 今日別で帰る」

「え、なんでだよ」

「お前だって最近勝手に先帰ってんじゃないか」

そう言うときクボは納得したのか、カバンを持って教室を出ていっ

た。

「小田さん、一緒に帰ろ」

と言うことで、俺と小田さんは一緒に帰っていた。彼女を家まで送り届けて、俺も家に帰る。小田さんと帰る時はいつもそうだった。この時ばかりは小田さんもりラックス出来るようで、いつも通りだった。

「……小田さん」

「うん？」

「小田さんはもう気にする事無いから、クボの事は。だから自然に  
してていいよ」

「え……？ でも……」

「このままじゃ関係無い小田さんが1番どうにかなりそうじゃん。  
だからもう喋っちゃった場合は仕方ないし、それにギクシヤクして  
る方が逆に怪しまれちゃうし……」

俺がそこまで言うのと、小田さんは少し悲しそうな顔をして頷いた。  
「うん、あの……ごめんね……。邪魔、って言うか……足手まとい  
みたいになっちゃって……」

「え、違っ……！ あ、足手まといとかそう言うんじゃない……  
なんつったらしいのかな……でもとにかく足手まといだなんて  
全然全くこれっぽっちも思っ  
て無いから！」

「ううん、いいの。あ、今日ここまででいいよ？」

小田さんはそう言う  
と俺の返事を聞かないまま走って  
いってしまった。  
った。

「……俺、何かマズイ事言ったかな……？ 一応気を遣ったつもり  
だったんだけど……」

火曜日。小田さんの対応が変わったのは昨日の月曜だ。

今日、学校で俺と小田さんはあまり言葉を交わさなかった。

目が合っても「おはよう」って言うくらい。でもなんだか、それすらもぎこちない会話だった。

何がそんなに気に障ったのか分からない。昨日の会話で俺がミスしたとも思えない。だって俺なりに気を遣ったんだ。

「ねえ待って！」

だから俺は放課後、小田さんに聞いてみた。

3組に行って、帰ろうとする彼女を捕まえた。

「……何、怒ってんの……？」

「怒ってないよ」

「怒ってるじゃん。……少なくとも俺にはそう見える」

小田さんは下を向いたままだ。俺の事を見ようとしめない。いつもなら話す時これでもか、って程見てくるのに。

「……小田さん、昨日俺が小田さんを怒らせるような事言ったんならゴメン。だからさ、普通に……」

「いいってば！」

小田さんは俺の手を振り払うと自分の体の後ろに手を回した。

「お……怒ってなんかないから……なんにも……」

「……でも……絶対いつもと様子が違……」

「ゴメン、もう帰るね……」

また小田さんは走った。やっぱり何か怒ってるじゃん……。

だっていつもなら絶対………最後まで話聞いてくれるじゃんか……。

悔しさとか悲しさとか不可解とか、心の中で色んな感情が渦巻いてる。どうしたらいいか分からなくなって、俺は教室に戻った。

窓から顔を覗かせると足早に学校を去ってく小田さんが見える。

その足取りは、やっぱりいつもとは違った。ふとその横を見ると

……クボ？ 誰かと話してるみたいだ。

思わず窓を開けて耳を澄ました。だけど他の生徒達の話し声がうるさくてよく聞こえない。

俺は急いで荷物を持って教室を飛び出した。下駄箱で靴を履き替

えて外に出る。丁度話してる所は木の影になってたから、そこに隠れる。

この間もしておいて言うのもなんだけど、やっぱり盗み聞きするのは気が引けるなあ……。コレを言うにはもう遅いだろうけどさ。

相手は……女の人だ。よくは分からないけど、多分公園で聞いたあの声……。

「剛史、今日泊まってってもいい？」

「……なんでだよ？」

「彼氏と喧嘩しちゃって………」

フムフム。まあ有りがちな理由だな。こう言うのに限ってホントは喧嘩なんてしてないんだ。

……ん？ 彼氏？？ クボが彼氏じゃないのか？？ ってことは……二股！！？

二股女だ！ ダメだろクボ！！ そんな奴にまんまと……。

「まあ……どうしても、って言うなら」

え、マジ！？ だからダメだろクボ！！ お前この間からダメな事言っただけじゃねえか！

なんだよ、「どうしても」って！

っていうかなんで責めないんだよ！

……ちよっと待てよ？ でもなんで「彼氏」ってのをクボの前で言うんだ？？ まあいっか。

「ありがと！ じゃあ後でね」

「おう。じゃあ」

……奈美さんはどうする気だよコイツ。クボに誘われたから待ってたのに。

もしかして奈美さんが待ってる間中ずっとさっきの女の人と会ってたとかそう言うのか……！？ もしそうなら最低だ。奈美さんの気持ちを踏みにじるような事しやがって！

自分の知らないところで浮気された奴の気持ちが分かるか、クボめ！！

これは一言言ってやらないと!!

「……って……あれ？」

俺が立ち上がった時には、もうクボの姿はどこにも無かった。帰ったのかな……？

帰って家で女の人が来るのをニヤニヤ笑って待ってるのかも知れない。想像するだけではらわた煮えくり返りそうだ。

……だけど俺が怒ったところで何も変わりやしないよな。仕方ない。帰ろう。

俺は荷物を持つと、校門を出た。勿論クボとの「じゃあな」は無し……。

## 第18話 ワダカマリ

次の日の水曜日、奈美さんとクボの間にも嫌々な空気が漂い始めた。ちよつとばかり遅いような気もするけど、波風が立ってるのは事実みたいだ。

でも今は俺、人の心配してる場合じゃないんだよなあ……。小田さんとは今も一応挨拶するくらいで。だけど奈美さん達の方がもっとヤバそう。

挨拶すらしてないみたいだ。

廊下ですれ違ったってひたすら無視。

勿論小田さんと奈美さんが5組に来ることも無し。

「どーすりゃいいんだよおおお!!」

「何がだ？」

「うおっ!!?」

急に後ろから声を掛けてきたのは……。久しぶりの登場、杉浦だ。横には女子が居る。

「す、すす杉浦ああ……。ビックリした……」

「なんだよ、せっかく声掛けてやったのにその反応は」

まあそりゃ感謝しておくよ。忘れ去られてるわけじゃない証拠だもんな、うんうん。

それはそうと……。

「その……。そっちの……」

「ああ、へへへ! 俺の彼女」

彼女……。かのじょ……。? かのぢよ……。!!!?

杉浦に彼女!!!! あの野球一筋の杉浦に彼女!!!! しかも結

構カワイイ!

勿論さ、小田さんには……。その……。負ける、けどさ……。

とりあえず適当に挨拶を済ませて、その彼女さんは教室の外に出ていった。杉浦は俺の心配とかよりもただ単に彼女の存在を自慢し

たかっただけみたいで、俺に彼女との経緯を話し終わったらスタコラサッサと出ていってしまった。

なんだよチクショウ……。

「榎本」

ん？ あ、今度はクボだ……。う……。手が勝手に動いて殴りそう  
だ。

「……何？」

「あのさ、奈美からなんか聞いたりしてねえ？」

「……………何をだ？」

あー。きつと今俺顔引き攣ってる……。口角の上辺りに山折りの  
窪みが出来てる。「なんだその顔は」級に引き攣ってる。

「いや、奈美さ、この頃態度が素っ気無いつて言うか冷たいつて言  
うか……」

「そりゃそう……」

「え？」

しまった……！！ つい……。クボは俺が盗み聞きしてただなん  
て知ってるはず無いし。でも今暴露した所で奈美さんとクボの、ま  
してや俺と小田さんの関係が修復されるわけでも無い！ 逆に俺と  
クボの間に溝が出来てしまう！ いや、もう俺の中では一応溝は出  
来てるんだけど、更にその溝が深くなって下がマグマになるくらい  
地下に掘られてしまう！！

で、でもこのピンチをバラす以外にどう切り抜ければ……！！？

「いや……………そ、そりゃそう……と、そ、そりゃそうとさ、あの  
……お、れ……と……トイレ！ そう、トイレ行ってくんな！？

な？？ 今さ、スッゲエ我慢しててさ、殴……じゃなくてトイレを  
……！ だからさ、じゃあな……！！」

「そんなに我慢してたのか？ そりゃ悪かった。行ってきていーぞ」

「あははははサンキュー！ じゃな！」

ってワケで一応切り抜けられたわけだ。俺はひたすら走ってトイ  
レに向かった。だけどトイレなんてさっき行ったところだから用が

あるわけじゃない。

時間を潰したいわけだけど、でもそんなのわざわざこんな臭いところで……。

とりあえず俺はトイレのタイルの壁に背中を預けた。オレンジ色の床に腰を下ろして、深呼吸は出来そうにないからため息をついた。どうすればいいんだ、俺は。

クボから見たら俺は何も知らないただの俺。

だけど本当の俺はほとんど全て知ってる俺。

完全に食い違っちゃってるよこりゃ。しかも今の俺には他の人達を心配してる余裕は無いときた。本当にどうすりゃいいんだよ俺は！？

何も知らない絶好の相談相手の杉浦も彼女にメロメロ。メロンパンナちゃんのパンチを喰らったみたいにメロメロ。俺の周りに相談相手にふさわしい人は居ないのか！！？

チクショー！ 誰かに胸の内を伝えないと俺はどうにかなりそうだ！！

はっ。……1番平和そうな人物が居た。

いつもいつも分厚い本片手に誰とも話さないでひたすら本を読んでいる……中村一寿……。

俺がまだ小田さんに告白してない時に「僕の好きな子を取るな！」発言してきたアイツ。でもアイツと俺はライバルっつーかなんっつか……。

一応俺の方がリードしてるんだけど、中村一寿も小田さんの事を好きなんだよな。

今アイツにそれを言うなんて、小田さんを取ってくれて言うてるようなもんじゃないか。やっぱ無理だな、中村一寿に相談するのは。

「榎本晴樹じゃないか」



「!?!? うわーっ!?!? うっ……うわっ……!?!?」

な、なななな中村一寿!?!? なんでこのタイミングでココに来るんだっ!?!?

「何してるんだ、こんなところで」

「お、お前こそ……」

「僕はただ単にトイレに來ただけさ。ココに來たって事はする事は1つだろ」

……じゃあその『する事は1つ』の事をしてない俺ってどうなんだ? まあいいや。

早く出てってくれないかなあ……。っつかコイツ、トイレに來る時も本放さないのかよ。誰も取らないよ、そんな小難しい本。

「何か悩んでるみたいだね」

!?!? なんで分かるんだコイツ!? いや、カマかけてるだけかもしれない……。ココでボロを出しちゃダメだ。

「……そ、そっちは何か読んでるみたいだね」

「そんなボケかまさなくたっていいよ」

「う……………」

中村一寿……手強い……! だけどココで全てを曝け出すなんて……ダメダメ! 絶対にダメだ!?!? しかも相手は同じ人を好きなライバルなんだぞ! 時と場所と人を考えろ、俺!?!?

中村一寿はわざと俺の前を横切って、壁にくっ付いてる手洗い場に向かった。ジャージャーっていう音の中で中村一寿が何か言ってる。

「小田彩乃の事で悩み事かい?」

……呼び捨てにするなよ。しかもフルネームで……。まあ、ハズレってワケじゃ無いけど。って言うか殆ど当たりだけど。

「別に」

そうだ、いいぞ俺。ここで「そうだよ」なんて言っちゃった日にゃあ災難が降り掛かってくるぞ。まるで鮭フリカケみたいのパラパラとご飯の俺に降り掛かってくるんだ! 真っ白な純粋な清楚な白

米だったのに!!

「チャンスチャンス」

「え?」

「ああ、いや、何も。じゃあ」

……? 何言っただ? よく聞こえなかったぞ。

中村一寿はそのままトイレを出て行った。最後に「もう授業始まるけど」って言い残して。ヤバイヤバイ! 怒られるところだった……。

放課後、クボは奈美さんのクラス、3組に押し掛けてった。何故か俺も一緒に連れていかれた。

なんでも、

「だってさあ、1人じゃ怖いじゃんかよお! 奈美ちゃんが爆発したらどーすんだよお! 俺広島の原爆ドームみたいになっちまうよおお! なあ榎本お!」

だそうだ。言い訳は呆れるほどにドンドン出てくるんだから、クボの奴。

3組に行ってクボは窓に腕を乗つけて、いつもより大分控え目な声で「奈美ちゃん」って呼んだ。

奈美さんは一度こっちを向いたけど、すぐに元の方を向いてしまった。隣には小田さんが居る。少し緊張した。

だけどクボは凝りずに何度も呼んでる。しつこいのは良くないぞ、クボ。奈美さんもうるさく感じてきたのか、クボが20回くらい呼んだ時にズカズカ歩いてきた。

「く、クボ! どーすんだよ、原爆ドーム、シャレじゃ済まないぞ……!?!」

「え、ええ榎本くん助けてよ」

「なんで俺なん……」

「剛史！」

俺等がくっ付いてると、今度は奈美さんがクボの名前を呼んだ。  
迫力満点。

「……………はい……………」

クボは恐る恐る返事をする、服を捕まれて奈美さんに連れていかれた。

なんか獲物を仕留めたライオンみたいな迫力だ。ちなみにクボは……………シマウマ。

3組の人達も啞然とする中で、小田さんが俺にゆっくりと近づいてきた。

「……………榎本……………くん……………あの……………」

「……………ん？」

彼女は俺の袖の部分をシッカリ握り締めて、バツと顔を上げた。

「ご……………ごめん、ね……………」

……………えっと、これって、もしかして、あの……………この間の事を謝ってる、のかな……………？

「や……………」

なんか言葉出せよ俺！！ でないと……………小田さん心配そうな顔してんじゃねえか！！

「お、俺こそゴメン！！ 氣い遣ったつもりで居ただけだし、実際そうじゃなかったみたいでさ、それで……………なんかさ、なんか、小田さん傷付けちゃったみたいでさ、なんかなんか……………ホントにゴメン……………！！」

バツと顔を上げた小田さんの前で俺はバツと頭を下げた。みんなの注目の的だ、きっと。

だけでもうそんなのどうでもいいや。

注目の的になって笑われようが茶化されようが、小田さんと仲直りできない方がよっぽど嫌なんだ。よっぽど苦痛なんだ。

しばらくして、小田さんは掴んでた俺の袖を放して、そのまま床

に座り込んだ。

……なんか心<sup>こころ</sup>做しか震えてるような……。

「……………小田さん……………」

「良かった……………」

「……………良かった」？　って何が……………」

小田さんは俺の問いには答えなかった。答えられなかった。彼女は言葉の代わりに涙を出した。正直ビックリ。今来た人から見たら完全に『俺が泣かせちゃった図』じゃないか！？

だけどそんな心配よそに、小田さんは泣くばかり。泣きながらやつとこさ言葉を発した。

「……………私、ヒドイ事……………しちゃったから……………許してもらえなくて、仲直り出来なかったらどうしようとか……………考えてて……………」  
「……………そんなん……………あの……………あんなのさ、ヒドイうちに入んなって！」

「……………でも……………」

「俺こそさ、ホント……………変な心配させちゃったり傷付けちゃったり……………もうさ、なんつかホントにさあ！」

……………俺がそこまで言う和小田さんは涙のいっぱい溜まった目で俺を見た。ヤバイ、言葉が出てこない！！　なんだ？　何言おうとしたんだ、俺！？

「……………ゴメン！！　ホントにゴメンね！！」

謝ると小田さんは更に泣きだした。でもそれは不安からくる涙ではなくて、悲しさからくる涙でもなくて……………安心と、嬉しさからきた涙……………。

俺も安心した。

こうして俺と小田さんのわだかまりは消えた。今までずっと息を殺して静かに見てた外野達も、一気に騒ぎ出した。ヒューヒューうるさい。でも……………こんなのも悪くない。

あとはクボと奈美さんだけか……………。

俺と小田さんは我慢しきれず、奈美さんがクボを連れ去ってった方へと走っていった。

## 第19話 衝突。一方でレベルアップ！

走ってったはいいけど、どこに行っただのか全然分からない！

俺は犬じゃないから鼻で匂いを辿るなんて事出来ないし、ウサギじゃないから耳で足音を聞くんなんて事も出来ない。

くそ！ 奈美さん、クボ、どこ行っただ！？

とりあえず俺達は中庭に出てみた。まあ2月半ばにわざわざ中庭に出て話をする人達も居ないだろうけど……。

「あ！」

居ないんだろうけど、ひたすらそう信じてたんだけど、隣で小田さんが声をあげた。

指差した方には、「2月半ばにわざわざ中庭に出て話をする人達が居た。」

アンビリバボーなんて言ってる暇は無い。小田さんを連れて、俺は2人の近くにある大きな木の影に隠れた。

2人の話し声は結構聞こえる。

「なんか誤解してないか？ お前……」

「ちゃんとあたしはこの目で見たのよ！ アンタが他の女とラブラブいちゃついでるトコ！」

「俺は他の女といちゃついでないぞ！」

「じゃあ何よ！？ あたしの目は節穴ってワケ！？」

「誰もそんな事言っていないだろ！ 奈美の勘違いだろ、か・ん・ち・が・い！」

奈美さん、知ってたんだ……。

でもなんだか……ハードだな、こっちは。よくまあこんな寒い中葛藤を繰り広げられるなあ、あの2人。

……クボ、俺もちゃんと聞いちゃったんだ。クボが他の女の人を家に招き入れる会話を。しかも年上っぽかった。

クボの好みが変わったとかそう言うのかな？ だけどだったらち

やんと奈美さんに伝えるべきだ！ 男なら男らしく言えよクボ！

「あーっそう！ そうやって言い訳するんだ！？」

「だーかーら言い訳じゃねえって！ 誤解だ！ 勘違いだ！ 見間違いだ！！」

「そうやって必死になってるのを見ると弁解っぽくて更に怪しいのよねえ……」

……確かに。

奈美さんは腕組みしてクボを見た。クボの額に冷や汗が滲んできてるような気もしないでもない。

クボと女のひとの会話は恋人同士の会話っぽかった。「家行っていい？」とか……。それも付き合い始めてから大分経った恋人同士のような。

奈美さんとは間違っても思わないと思うけど、って言うか奈美さんの場合あんな『猫なで声』出さないと思うけど……クボの本命はどっちなんだ？

「こんな状態の時に言うとうそ臭いかもしれないけどさ、俺が好きなのは奈美だけだよ」

「……じゃあなんで他の女といちゃついたりすんのよ」

「お前が見たのは………っつーかさ、言っとくよ。ハッキリ言っとく！ アイツは……」

ああ！ クボ言っちゃうんだ！！ あっちが本命とか言っちゃうんだ！！ ダメだ、見てられない！！

「ゴメン小田さん、俺あっち行ってる」

「え？」

俺はすぐに立ち上がって走った。

校舎内に戻ってからもしばらく走った。やっと止まってふと後ろを見ると、小田さんも追い掛けてくれてた。

「あ、小田さん……。ゴメン」

「どうしたの……？」

小田さんはハーハー息を切らしながら俺を見た。

「なんかさ……見てられなくて……っつか本来俺が見てなくてもいい事なんだろうけど……」

俺がそう言うと、小田さんはニツコリ笑って「そうだね」って言った。

「奈美とクボくんの問題だもんね」

「ははっ！　なんか必死に探した俺等バカみたいだね」

俺のその言葉を合図にしたみたいに、俺達2人はゲラゲラ笑い出した。

ひとしきり笑った後、小田さんは笑い涙を拭いながら「一緒に帰ろ」って言うてくれた。俺も「うん」って言うて、2人で下駄箱まで歩いてった。

帰り道。

俺と小田さんは絶えず話しまくった。言葉が途切れて気まづくなる事なんて全く無くて、俺って小田さんがホントに好きなんだなあって実感した。

2人で居ると時間はあっという間に過ぎていく。いつもの公園で話して、気が付くともう時計の針は8時を差していて、冬の空はもう真っ暗だった。

暗い夜道を外灯が照らしてる。

「もうそろそろ帰らないとダメかなあ……」

「そっか。そうだよね。お母さんとか心配するよね」

俺は今、小田さんにあの事を言おうと決意した。頷いて手を振って、公園を出て行こうとする小田さんを、俺は引きとめた。

「ゴメン、あのさ、最後にさ………あの、まあ、頼み、って言うか……うんあの、そう言うのがあるんだけど……いいかな？」

「？　いいよ？」

さあ、深呼吸、深呼吸。まずは落ち着いてからだ。

深呼吸を済ませて、改めて小田さんを見た。



「ずっと言おうか迷ってたんだ。山ん時にも。……でもなかなかタ  
イミングが掴めなくてさ、だから……」

「うん」

「率直に、言うね？」

「いいよ」

ヤバイ。よし、もう一度深呼吸、深呼吸……。

寒さと緊張で口が震える。

「もう俺は……」「小田さん」を卒業したい……」

「……卒業？」

「だからさ、なんつーかさ、もう「小田さん」と「榎本くん」の呼  
び方を卒業したい、って言うか……」

「……卒業……」

「ダメ、かな……」

不安だ……。まだ嫌だ、って言われたらどうしよう……。

俺がオドオドしてる間に、小田さんは首を横に振っていた。それ  
でニッコリ笑うと俺を見た。

「榎本くんがいいなら……私もいいよ」

「………ホントっ!!?」

「うん!」

うそっ! ホント!? うそじゃないよな、ホントなんだよな!

? ホントにホントなんだよな!?

「じゃあ、なんて呼べばいいの?」

「え……えっとね……」

そうか。そこまで考えてなかった。だけどせっかく呼ぶなら俺だ  
けの呼び名がいい。

奈美さんには「彩乃」って呼ばれてて、クボには「彩乃ちゃん」  
って呼ばれてて、中村一寿には「小田彩乃」って呼ばれてて（小田  
さん本人は気付いてないみたいけど）、じゃあ俺は………。

考えろ、考えろ俺! なんて呼びたいんだ、俺は!?! 誰にも呼  
ばれてない小田さんの呼び方……なんだ? 何がある!?!

……………!! そうだ!!!

「あやっ!!」

咄嗟に出た名前はそれだった。なんか小田さんのイメージに合わない気もするけど、何を隠そう小田さんの名前は「彩乃」なんだ! だから「彩」って呼んだって変じゃないような……。でも小田さんが気に入らないとダメだよな。それに誰も呼んでない名前なんだからあんまり馴染めないって言うデメリットもあるかも知れない。そうになったら「小田さん」から卒業出来ないままじゃないか! 「小田」って呼ぶわけにもいかないし「彩乃」って呼ぶのも変な気がする。

そうなるをやっぱり「彩」が1番…

「あや……………」

俺が頭の中で色々な文字をグルグル回らせてると、小田さんが俺の言った名前を呟いた。

気に入らないかな……。まあ気に入らないなら気に入らないで別の名前を考えればいいだけなんだけどさ……。

「うん……………いいよ!」

「え……………おっけ?」

「うん!」

……………やった。

……………やったじゃん俺!!! やったよ! やったよ父ちゃん

!!!

「じゃあ、えっと……………小田さ……………彩は? 彩は俺の事なんて呼ぶ…

…?」

俺がそう言うと、彩はキョトンとした顔になった。

「え? 私も変えるの?」

「変えないの?」

「変えるの?」

「……………変え……………たくない?」

「いや、いやいやあの、いいんだけどね? いいよ、じゃあ変える

！ えっとねえ……」

小田さんはどんな呼び方をしてくれるんだろう……。ウキウキ。ワクワク。ドキドキ。（少しだけ）ビクビク。

「じゃあね、私も下の名前で……えっとね……」

なんだろう……。でもなんとなく彩には「くん」付けで呼んでもらいたい気もする。

「晴樹くんか晴くん。どっちがいい？」

おお！！ 望み通りの「くん」付けだ！！

「どっちでもいいよ。彩、の呼び易い方で……」

彩、って名前を心の中で思うならいいんだけど、いざ口に出そうと思うと急にこっ恥ずかしくなるのはなんでだろう……。？ いいや、じきに定着してくるだろ。

「じゃあ晴樹くん！」

「分かった！」

なんかちよっとレベルアップっぽいじゃないか！ いいじゃないいじゃん！

「これから晴樹くんって呼ぶね！」

「うん。俺もこれから彩って呼ぶ」

「うん！」

自然と口角が上に上がって……。口裂け男にでもなっちゃうんじゃないか、ってくらい上がってく。ポマードポマードポマードって言われたらおしまいの口裂け。

……まあそんなくだらない事考えてる暇があったらさっさと送ってけ、って思うから、そろそろ送らなきゃ。

明日から学校でも「彩」と「晴樹くん」なんだ……！

## 第20話 勘違いは災いのもと

「おはよう晴樹くん」

「あ、おはよう……彩」

俺と彩は2人でニッコリ笑った。まだこの呼び方には少し慣れない。でも大丈夫だ。絶対いつかは慣れる！！　って思いたい今日の頃。

彩と分かれて5組に入る。そしたらクボが近寄ってきた。

「おはよう晴樹くん。……………だなんてラブラブじゃないのよお宅」

……出たな、お婆さん。やっぱり手はカマキリで上下に激しくブランブラン揺られてる。

「いいだろ別に！」

「で？　何？　もうキスは済ましたのか？」

クボにそう言われて、俺は何故か椅子ごと後ろにドッカーンと倒れた。昨日から注目の的だ。

「やだなあ榎本くんってば。そんなに動揺する事無えじゃんよ。まさかもっと先までいっちゃったとかあ？」

やっと起き上がった俺は、またクボの言葉に素っ転んだ。みんな倒れる度にいちいち見なくていいから……。

なんでクボはそんな事しか考えられないかな……。奈美さんが危険だ。……奈美さん？

あ、そうだ、奈美さんとはどうなったんだろう？

「……………クボ、奈美さんとは……」

「ああー。なんか分かってくれなくてさあ、俺も一生懸命話したんだよ？　でもどうやっても言い訳がましくなっちゃってさー……」

……………あ、そうか。俺もクボと一緒に3組に行ったんだ。それでクボが奈美さんに連れられてくトコを見たから、何かあったんだって誰でも分かるはずだよな。だから俺がこの話持ち出しても何も

変じゃないってワケだ!?

なんだ、それならもう心臓バックバック言わせなくていいんだあ！  
良かったー！！

「奈美さんとは仲直り、するのか？ ……出来るのか？」

「分かんねえ。……だけどさ、やっぱ奈美に誤解させるような事してたのは俺だし」

クボ、こう言う事に関してはシッカリしてんだよなあ。いつもはホントにくだらない事で「榎本くーん」って言うてくるくせに。

「そう言えばさ、榎本も彩乃ちゃんとなんか喧嘩っぽい事してたじゃん？」

「ああ、うん。………って………なんで知ってんだよ………？」

「俺達喧嘩してます、って雰囲気出しまくってりゃ誰でも気付くって！」

え、出しまくってたのか、俺等。

「………で？」

俺がそう聞くと、クボは「は？」って顔でこっちを見た。

「あ？」「で？」って？」

「だから、俺達の喧嘩がどうかしたのか？」

「ああ、仲直りしたのか？」

「当たり前だろ。昨日バッチリ元に戻ったさ」

ホントは戻っただけじゃなくてレベルアップしたけど。

でもその事をクボに言うとしつこく聞いてきそうだから言わなかった。

「どうやって仲直りしたんだ!？」

「ええ？ どうやって、って………2人で謝り合いっことしただけ」

そうやって言うと、クボは「うーん」って悩み始めた。

しばらく頭をかかえたり叩いたりその場ででんぐり返したりして、気が済んだのかやっと頭を上げた。で、俺を見た。

「………なんだよ………？」

「俺は謝ってなかった！ 奈美に一度も謝ってなかった!! でも

謝ったら浮気したって認める事になっちゃうだろ!? あ、いや、ホントはしてないけどさ、ホントにホントはしてないだけけどさ、でも謝ったら「やっぱりね!」とか言われそうじゃなか!? うん、きつと言うんだよ、奈美の事だから!」

決め付けちゃってるよ、コイツ……。奈美さんだって(多分)鬼じゃないんだからそんな風に怒ったりはしないだろ。逆に謝らなかつたから怒ってるのかもしれないし……。

「でもな榎本!!」

「あ?」

クボは俺の肩を掴むと、ツバが飛んできそうなくらい一生懸命に話し始めた。って言うか怒鳴り始めた。

「やっぱり女に「浮気したのね!」って言われた時は男は素直に謝るべきだと思うんだ、俺は! この期に及んで言い訳するなんてそんな見苦しい物があるか!? いや、無い! 無いだろう! 女に疑い掛けられるような事したのは男なんだから! 分かったか、榎本!!」

「いや、俺じゃなくてお前……」

「だからな、喧嘩したらまずは謝る! これ鉄則!! それを守らないで逃げ回ってる男は最低中の最低だ! 男の風上にも置けない! 風下に置いたって気が済まないくらいだ!! いいか!? 100個言い訳並べるよりも1個の言葉で済ませた方がいいに決まってるんだ! どうだ、分かったか榎本!!」

「だから俺じゃなくてお前……」

クボは俺に言うだけ言うと言サッサと教室を出ていった。まったく勝手な奴。俺に怒鳴ったってどうにもならないだろ……。って言うかまるで俺が最低の男みたいじゃないか。

クラスメイトはまた俺を見てるし。

席に戻ろうとしたら、杉浦が近寄ってきた。

「大丈夫だ、榎本。今からでも遅くないからな。ちゃんとして謝れば分かってくれるさ」

「ちょっと待て、お前何か勘違いしてないか？」

「いや、隠す事は無い。喧嘩するほど仲が良いって言うだろ。大丈夫。不安なら俺も一緒についてってやろう」

「だからさ、俺じゃなくて……」

「俺と俺の彼女は今まで喧嘩した事無いんだ。喧嘩するほど仲が良いって言ってもやっぱ喧嘩しない事に越した事は無いだろう？ 俺達きつとこのままいけるんじゃないかねえかなあ。同棲までいっちまったりして……」

もういい。今のコイツには何言っても右耳から入って左耳から抜けてくだろう。

っつーか付き合い始めてまだ2日じゃねえか。それで喧嘩してたらそれはそれでちとキツイぞ。

杉浦は「うきゃきゃっ」って笑うと俺の事なんか放って自分の席に着いた。

とんだ勘違い&お惚気野郎だ。

そんなこんなで、とりあえず今日も終わった。

5組を出て3組に向かおうとした時、クボが奈美さんを引っ張ってくところが見えた。3組の窓から溢れだしそうになってる野次馬達がうるさい。そんな教室の中に、困り果てた表情の彩が居た。

「……………あ、晴樹くん」

「なに、どうしたの？」

「クボくんが急に3組に来てね、奈美を連れてっちゃったの。なんか凄い真剣な顔して……」

……謝るのかな、アイツ。どうしよう。見に行きたいけど……でもあれは2人の問題であって、俺等が行くことじゃないよな。

行きたいけどここは大人しく我慢しよう。

「2人の問題だもんな。……帰ろっか」

「でも……何か出来る事ないかなあ」

「俺等に出来る事は、2人に任せる事だけだよ」

下手にでしゃばると事がこじれて更に仲直りしにくくなっちゃうし。もう俺は覗き見なんかもしないし盗み聞きもしない！

「……そっか……。そうだよね。……うん、帰ろう」

「うん」

その日、俺と彩は手を繋いだ。お互いぎこちなくて、里砂とも何度か繋いだはずなのに何故か俺もぎこちなくて、すごい照れたけど繋いだ。

もう完璧に茹でタコ状態だったけど、でも幸せだった。今週はレベルアップの週なのかもしれない。クボと奈美さんもレベルアップするかなあ……。

次の日、クボと奈美さんは何も無かったかのように話してた。仲直りしたんだな、きっと。俺、公園でクボを見たって事言った方がいいかなあ。

そうだ、言おう。そして真実を知るんだ！

「……クボ」

「んえ？」

「ゴメン奈美さん、ちょっとクボ借りるね」

「うん、どーぞどーぞ好きなだけ」

「あつ奈美ちゃんヒドイッ！」

奈美さんに手を伸ばそうとするクボを連れて、俺は男子トイレに行った。

「なんだよ急に」

「……あの、さ。俺……お前の事……」

「ダメだよ男同士なんだから！！それに俺にはちゃんと奈美って言う彼女が！」

「……………ああ？ バカヤロー違いよ！！ 何勘違いしてんだお前！？」



ホントに何考えてんだ、コイツ……。

冗談とは分かってるけど気持ち悪い……！

「俺はな！ 公園で！ お前を！ 見たんだよっ！！」

あー。言ってしまった。パンチが来るかもしれないなあ。でも知らないと気が済まないって言うかモヤモヤしたままだし……。

「え、何、見てたのかあ。なんだよー」

「……………え？ 怒ら、ないのか？」

「なんで怒るんだ？」

「いや……怒らないならいい……。で、なあ、あの女は誰なんだ？ スゲーラブラブっぽい話してたけどさ、あの人が浮気相手か？」  
パンチが飛んできた。

見事右頬にビンゴだ。危ういところで、もう少しで奥歯が抜けそうだった。

「バカ者！ だから俺は浮気なんてしてねえつつってんだろ！！」  
クボはオレンジ色の床に倒れてる俺の上に馬乗りになって、俺の服を掴んだまま叫んだ。

けどどな、今はそんな事聞いてられるほど余裕ないんだよ……。脳味噌がグルグル回ったままだ。今自分がどんな状況にあるのかさえ分かんないや。

やっとこさ頭が回復してきた。だから口を開いた。1番疑問に思ってた事を口にした。

「じゃあ……………あれ誰だよ…………？」

「あのな、あれは浮気相手でも何でも無く、姉ちゃんだ！」

……………ああ……………なるほど……………姉ちゃん……………。

姉とならあの会話もあり……………え？ ありか？ だってあんな恋人みたいな会話……………。

「なんで姉貴とあんな会話すんだよ？」

「俺の姉ちゃんは東京に住んでんだよ。彼氏と。んでたまーに家に帰ってくんだけど、初めて家出た時に親父と喧嘩して、口利くのが

未だに嫌みたいで、だから俺を通して今日泊まっていいか、とか決めるんだ。だから奈美もお前も見事に勘違いしてたわけだ」

……なんだよ……そう言う事、かよ……。姉貴、ね……。ははっ……。

こりゃ一本取られたな……。あっはっはっは……。

「で、いい加減下りろ」

「ああ、悪い」

クボはスツと立ち上がると、「奈美ちゃん」って言って走っていった。

って事は俺が盗み聞きしたのがキツカケで彩との関係が危うくなり、俺が盗み聞きしたのがキツカケでクボを軽蔑するところだったんだ……。

もう盗み聞きなんてしない。

絶対しないからな!!!!!!

## 第21話 ワケ

そろそろ「彩」って呼び方にも慣れてきた。クボもいちいちオバサンにならなくなってきたし。

クボと奈美さんも仲直りして、なんか一皮剥けた感じ（クボだけ）。

そして今日は土曜日。珍しくバスケの練習が無い日！　って事は、彩と出掛けられる日！！

とゆーワケで、俺は今彩の事を待っている。でも行き先はまだ未定。

「晴樹くん」

行き先を考えると、いつの間にか目の前に彩が居た。

「え？　あっ！　お、おはははおはよう！！」

「おはよう。……どうしたの？　大丈夫？」

「ああ！　うん！　大丈夫大丈夫！　全っ然大丈夫！！」

ビビッた……。ホントにビビッた。ホントは全っ然大丈夫じゃない。心臓張り裂けるかと思った。って言うか止まるかと思った。

だって、もっと時間掛かるかと思ってたから。

「どこに行く？」

「……それなんだよー！！！！　全く決まってるんだよー！！！！」

———あ、そだ。

「そういえばさ、クボが言ってたんだけど、今日少年野球チームが草野球やってんだって。彩野球好き？」

「私はいあんまり分からないんだけど、お父さんがよく見てるよ」

「あ、そうなんだ？」

「うんでも……行こう！　私野球生で見た事無いんだあ！」

野球って言ってもジャイアンツとかドラゴンズとかタイガースとかそんな豪華な物じゃないんだけどね？　えっと、まあいっか。彩

も賛成してくれてる事だし。行っちゃえー!!

ってワケで、俺と彩は今草むらに座って草野球を見てる。

うーん。まだまだどこちなくてカワイイじゃないか。

打ってもホームランまでいかないところも初々しいじゃないか。

「彩? 大丈夫? つまなくない?」

「うーん、全然! みんなカワイイね!」

「そうだね!」

そうか。……へへっ。そっかそっか。彩も楽しんでくれてるんだ。良かった良かった。

「晴樹くん。私飲み物買ってくるけど何かいる?」

「あ、じゃあ俺も行くよ」

2人で近くの自動販売機へレッツゴー! コカコーラの自販機。

お? 誰か居る。あっちもカップルみたいだ。2人で……………  
……………見覚えあるぞ、あの2人。

「あつれー!?! 榎本くんじゃん!?!」

「クボ…………!! 奈美さんも! なんて居るんだ!?!」

「失礼だな。大体今日草野球やってるって教えてやったの俺じゃんよー」

あ、そっか。そういえばそうだった。しかしホントに仲直りしたんだな、この2人。

2人で草野球なんて見に来ちゃってー! あ、俺もか。

心の中で俺もオバサンになりかけてると、少し歓声が大きくなった気がした。どうしたんだろ。少年の1人が場外ホームランでも打ったかな…………?

「丁度いいじゃん! 一緒に見ようよ! ねえ剛史?」

考えてると、奈美さんが手を叩いた。そしてクボの方を見ると、なんて言っているのか分からないような顔してるクボが居た。

「え。うん…………いいけどさあ…………その…………まあ…………うん…………い、

いいけどさあー」

「何よ、ハッキリしなさいよ」

そうか。クボの奴、奈美さんと2人っきりのがいいのか。

「いいよ、俺等あつちで見るからさ。クボもそっちのがいいだろ？」

「なーに言ってるんだよ榎本！俺はべつに…」

「あ、じゃあ一緒に…」

「別々に見よう！な！？榎本もそっちのがいいだろ！？な！

？はい、サヨナラ」

クボは俺の背中を押して強制的に別々にさせた。まあお互い2人の方がいいだろうし。

でも奈美さんはジュース片手に「えー。なーんだ。つまんないのー」って言ってた。

「……つまんない……！！？」

あ、クボシヨック受けてる。あ、奈美さんなぐさめてる。

ふーん。なんだかんだ言ってるやっぱりいいコンビじゃん。

さて、俺達も飲み物買って戻る。早いところ続きを……………。

続きを……………見ようと思ったんだけど。

俺達がくっちゃべってる間に終わってしまったみたいです。

少年野球団の少年達が笑って帰っていきます。監督らしき人も満足そうな顔で少年達の肩を叩いています。1人の子は泣いています。1人の子はまだバット振り回しています。1人の子と1人の子はまだ足りねーぜって感じでキャッチボールしています。

俺はまだ見足りねーぜって感じでたたずんでいます。

「え、と、じゃあどうしよっか。……………帰ろっか……………」

「そう、だね……。ジュース……買ってる間に終わっちゃったんだね……」

あの歓声はこのせいだ。ホームランでもなんでも無くても、終わってたぜーって、決着ついたぜーって言う歓声だったのか。

あは。そうだったんだ。あはははははははははは。

「晴樹くん？ ……どうしたの？ 大丈夫？」

あははははははははは。じゃああの時振り返ったりしてれば最後くらいは見れたってワケか。あははははははははは。

「あの……晴樹くん？ ショ、ショック、だったの？」

「あははは……え？」

「……「あははは」？」

「あっ！ えっ？ あっ！ いやいやいやいや！！ えっとなんだっけ！ あ、そっか、帰るんだったね！！ えーーーーー」

「……と……」

ギクシャクしながら、俺は歩き出した。

「榎本くん？ あの、帰り道……あっち……」

俺は歩き出した。その方向と逆の道を、彩は指差した。

俺は戻り出した。その指差された道を、歩き出した。

だけどさ、なんか、なんつーかさ、草野球見ただけで、って言うか殆ど見ないまま、これってデートって言えるのかな……？

俺はこう……もっと……なんて言ったらいいのかな？ デートっぽいデートをしたいワケで、気が済んでないって言うかさ……。

「彩！」

どうも気が済まない俺は、後ろからトコトコついて来てた彩を振り返った。「はい？」って顔してこっちを見てる。

「あの、さ。もうちょっと……って言うか……なんつーか……その……も、もうちょっとさ、い、一緒に……居よ……？」

「え？ うん」

彩は、「今更何を？」ってな顔をした。

「あれ……？ 元々……もっと一緒に居る事になってた、とか……？  
なあんちゃっ……」

「え？ あれ？ そう、なんでしょ？ 私はそう思ってたんだけど。  
……一緒に居て……いいんだよね……？」

「勿論ッツ！！！！！！！！」

彩は俺の気迫にビビった。気を抜いたら後ろにスッテンコロリンと転びそうなくらい仰け反った。俺が彩を（もといおにぎり）追いかけるハメにならなくてよかった。

俺達はいつもの公園にやってきた。ブランコによいしょと腰を下ろす。彩も隣のブランコに座った。

2人してキーコキーコ漕いだ。

あ、そう言えば、気になってたんだ、俺。

「ねえ彩さ」

「うん？」

「俺がさ、ここでスケボー出来るとか言っちゃった時あったじゃん？」

「スケボー……ああ！！ うん！」

「あれさ……」

「出来るようになったの！？」

ほひ？

な、何を……勘違いしちゃったりしちゃってるんだろう？ この娘……。

俺は元々スケボー出来ないわけで、出来るなんて嘘付いたのはその場を持ち堪えるためであって、決してスケボーなんてそんなハイカラな事は出来ないわけで、例え後ろで『ハイカラさんが通る』が流れたって出来ないわけで……。

だけど彩はバッチリ確実に絶対に俺がスケボー出来るって勘違い

しちゃって、でもでも本当の俺は全く出来ないワケであって……。  
っちゅー事は、結論的に述べれば、

ヤバイ。

その彩の中で出来ちゃってるカッコイイ俺ってのをぶち壊さない  
といけない！ 俺はスケボーは愚か、一輪車にだって乗れないんだ。  
いや、スケボーは言うなれば四輪車だけど、でも多分車を運転す  
るよりうんと遥かに難しい！ 俺には出来っこない！！

「彩！！」

「え？」

「俺ね、俺さ、その、彩の頭の中で思い描いてるような男じゃない  
んだ！ ウッキウッキワックワックしちゃってるとこ申し訳無いん  
だけどさ、うん、あの、いや、勿論申し訳無いと思ってる！ 彩に  
そこまで期待させといてそんな事も出来ないなんて最低だと思う！  
！ だけど出来ない物は出来ないんだ！ ……いや、言い訳がまし  
いな……って言うか開き直って更に最低だよな。あの、とにかくさ、  
本当に……本つつつ当にゴメン！！」

俺は頭を下げた。ブランコの下にある砂にオデコがくっつくくら  
い下げた。幸い砂にはくっ付かなかったけど。



でもその直後、ブランコからずり落ちた。俺はオデコどころか全身砂にくっ付いた。

「え、何、言ってるの……？ あ、よく分からないんだけど……」  
「だからさ、スケボーだよ、スケボー！ 俺、ホントはそんなの全く出来やしないし、持ってすらいなんだ！」

「うん。いいよ？ 出来ないものは仕方ないもんね。でもスケボー出来なくなったら死ぬわけじゃないんだし……そんな必死に謝らなくても大丈夫だよ？」

ああ、彩！ 天使に見えるよ！！ あ、でも天使になったら天に昇っていかなくちゃいけないから、女神に見える！！

「ありがとう……！！！！ ……あ、えっとね、それで……本題なんだけどさ」

「はい！」

「彩は、どうしてあの時泣いてたの？」

「あ………。あれね」

彩はそう言いながら少し照れくさそうに笑った。それから改めて手を膝の上に置くと、その手を見ながら話し始めた。

「あれは、ね。晴樹くんなんだよ」

「俺？」

コクンって頷いた。俺何かしたっけ？ いや、何もしてないぞ。ただ地球の果てまで行ってやるって覚悟決めただけで……。

はっ！！ まさかその覚悟のせいで彩も地球の果てまで行こうと覚悟決めちゃって、でも行き方が分からないから泣き出したとか……！！？

ってアホか。そんな事あるわけないじゃないか。

俺がそんなアホな事考えてる間に、彩はまた口を開いた。

「あの日、女の子に告白……されたでしょ？」

……ああ、そう言えば。あのイケイケギャル。

「その子ね、私と同じクラスで……教室の中で、晴樹くんに告白したって話をしてて……」

「うん」

「それでね、晴樹くんが私を見つけてくれたでしょ？　ここの……ブランコに乗ってる所」

「うん、そうだね」

「嬉しかったの。……嬉しかったんだけどね、この人には、もう告白したって遅いのかなあって思ったら……」

ってえ事は？

彩も……その時から俺の事を好きで居てくれた、って事……！！？  
「うそおおっ！！！！？」

「えっ？　う、嘘じゃないよ？　あの、本当だよ」

すっげえ……なんかスッゴイ嬉しい。スンゴイスンゴイ嬉しい……！！！！

そうか。そうだったんだ。じゃあ俺があの時告白してても、今と同じようになってた、って事か……！！

なんだよー。惜しい事をした。あの時すぐにでも告白してれば良かったのかあ……！！

でも……じゃあ聞いて良かった。

「彩」

「うん？」

俺は息を吐き出して、また吸った。

「好きだよ」

「私も！」

彩がニッコリ笑った。俺はその優しい笑顔に凄く癒されてきた。何度も助けられてきた。

今日、俺と彩は、初めてキスをした――。

## 第22話 雪掻きじいさん

朝。俺は8時に目を覚ました。今日は日曜日だ。

ベッドから下りて、階段も降りた。テーブルの上には菓子パン1つ。俺の好きなダブルメロン。

でもなんでこんなに静かなんだ？

……あ、そうか。今日は姉貴も兄貴も母さんも父さんも居ないんだった。俺1人、か。まあみんなそれぞれ用事があるんだねえ。

確か姉貴は彼氏とデート、兄貴は彼女の家に泊まり、母さんはEXILEのコンサート、父さんは会社にレッツゴー。父さん1人可哀相だな。

でも兄貴、今日泊まりに行くなんて……。

カレンダーを見て思い出した。明日の月曜は祝日だった！！学

校休みだ！ 多分部活も休みだ！！ あー、やったー！！

ジャンプして喜んでたら、電話が鳴った。ちなみに家はフレッツ光に入ってる。ある日CMで長澤まさみが出てきて、父さんがテレビに齧り付いた。父さんは長澤まさみの大ファンだし。それでCMが終わったら急に、「フレッツ光に入るぞ！」って言い出した。

って、延々と解説してる場合じゃないな。電話が鳴ってるんだから出ないと。

「はい榎本です」

【あ、小田と言います。晴樹くんいらっしゃいますか？】  
「彩？」

【え？ あ！ え？ 晴樹くん？】  
ビックリしたー。彩から俺ん家に電話してくるなんて全然無かったから……。

俺が彩の家に電話する事も全く無いけど。

「珍しいね、どうしたの？」

【今、大丈夫？】

「うん。大丈夫だよ。家族全員出掛けててさ、丁度暇だったんだ」

【そうなんだー！ あ。あのね、今奈美とゆんと私であの公園に居るんだけど、あ、公衆電話から掛けててね？ えっと、それで、晴樹くん来れる？】

「行けるけど……なんで俺？」

【奈美が「この際榎本くん誘っちゃいなよー」って……】

「はははっ！ そっかそっか。うん分かった。じゃあ今から行くよ」

【うん。ごめんね】

「全然いいよ。じゃあ後でね」

がちちゃっと受話器を置いて、俺は2階に上がって準備を始めた。だって今はまだパジャマのままだったし、顔すら洗ってない。

急いで洗面台の前まで行って顔を洗った。水が凄く冷たい。でもそのおかげで、バッチリ目が覚めた。

自分の部屋に行ってタンスから服を引きずり出す。ジーパンとグレーのトレーナー。

よし、準備完了！ あ、一応財布も持ってこう。ポケットに財布を押し込んで、やっとこさ家を出た。うーん、今日もいい天気だ！ 彩とエチカに行った時葉っぱをかき集めてたおじさんは、今日は雪掻きしてた。季節の違いを感じるよ、ホントに。

「おはようございます」

「おはよう。寒いねえ」

「そうですねー。よく降りましたね」

「全く掃除が大変だよ。あ、そうだ晴樹くんも手伝ってくれないかい？」

………はい?? あ、え、うそ、や、これは予想外の展開だ………！！

早く行かないと彩と奈美さんを待たせてしまう！ だけど手伝ってって言うてる老人を置いていくのもなあ……。

仕方ない。ちゃちゃつと片付けて走っていきこ！

「分かりました！ それ貸してください！！」

「ああありがとう。頼むよ」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

！！！！！！！！」

俺は一心不乱に雪掻きした。おじいさんは感心してた。

5分後、おじいさんの家の前に溜まった雪が片付いた。疲れた

……。

でもやつと公園に行ける！ 早く公園へ……！ 公園！！

「あ、晴樹くん」

「なんですかつ！！！！？」

「よかったらお茶でも飲んでいかないかい？ お礼もしたいし……」

「あついえ！！ また今度ごちそうに……」

「まあそう言わずに。寒いだろうに、早く入りなさい」

「いやホントに……いやいやいやいや！ お、お気持ちだけ……」

榎本晴樹。一生の不覚。おじさんに敵わないなんて。

でも家に入れられちゃったら仕方ない。ちゃっちゃとお茶飲んで

走って行こ！

「いやー。今時晴樹くんのような好青年居ないだろうねえ」

「や、それほどでも……」

早く行かないと！ お茶一気飲み！！！！

……………。

「ぎやああああああああああ！！！！ あぢいいいいいい！！！！

！！！！」

「晴樹くん！ 何して……あ、水、水」

う…お…。どこに…こんな熱いお茶一気飲みするバカが居るって言うんだ…。きつと俺以外居ないぞ。

おじいさんは水を持ってきてくれた。そしたら奇跡的に喉の火傷は治った。

有りえないくらいの奇跡だ。このおじいさんどっかの魔法学校にでも通ってたんじゃないか？

「わしはね、魔法学校に通っていてね…」

「はい…うそお！！？」

「ハリー・ポッターと同期だったんだ」

「……………」

この後、どこで誰がどんな風に聞いたって「嘘だろ」って思う、おじいさんの輝かしい青春時代の話を聞かされた。

所要時間30分。もうダメだ。大遅刻だ。きつといくらの彩でも怒ってる。呆れて帰っちゃってるかもしれない。

それもこれも全て俺の不覚さから来た大失敗だ…。

「あの、ごちそうさまでした」

「え？ もう帰るのかい？」

「もう十分に聞かせていただきました…」

「そうか。気を付けてね」

はい。気を付けます。もう二度と雪掻きの手伝いしないように。もう二度と急いでる時にこういうおじいさんに近づかないように。

「くっそおおおおおお！！！！」

俺は走った。ひたすら走った。今の状態で持久走大会に出れば優勝ってくらいに走った。

いつもは走ったとしても5分の道のりを、走って2分で着いた。とりあえずベンチに座る。

「彩は居ない…か…。そりゃそうだな。こんなに遅刻したんだし…」

「遅かったね。どうしたの？」

「うん。おじいさんの雪掻き手伝って…」

……え？」

横に彩が居た。奈美さんもゆんも居た。奇跡だ。

「あっ……あああああ彩!!!! 奈美さんも!!! ゆんも!」

「あや? え、なに? 榎本くん彩乃の事「彩」って呼んでるの?」

「あ、いや、まあ……」

改めてそう聞かれると照れる。でも呼んでるのは事実なんだし。

奈美さんもクボみたいにおちよくってくるのかなあと思いきや、

「知らない間に進展してるー!」って喜んでんのか悔しがってるのか、よく分かんない事を空に叫んだ。

「彩遅れてゴメン!!! 奈美さんも……」

彩は、笑顔で許してくれた。奈美さんはと言うと………まだ空を見てた。

良かったー。もう別れる、なんて言われたらどうしようかと思っ

た。

「あ、そう言えば今日クボは?」

「あー剛史ね。もうダメよあいつ」

「え?」

また喧嘩でもしたんだろーか? それともまたクボが浮気したんだろーか?

でもそんな深刻そうじゃないぞ??

「ホラ、昨日草野球のところで会ったでしょ?」

「うん。会ったね」

「野球見ててさ、急に「俺って野球が似合ってるんじゃないかな!」とか変な事言い出したのよ。もう付き合ってるらないわ」

クボ……。すぐ影響されんだから……。まあクボなら言い兼ねないな。

そして奈美さんの話はまだ続いた。

野球が似合ってるとか頓珍漢な事言い出したクボを置いて、奈美さんは先に帰っちゃったみたいだ。だけどその日の夜奈美さん宅に電話があったらしい。相手はクボ。

てつきり「なんで置いてっちゃうんだよ」とか言ってくるのか  
と思いきや、「奈美ちゃん、俺がプロ野球選手になっても選手のサ  
インねだっちゃダメだよ」と、またまた頓珍漢な事抜かしらしい。  
勿論奈美さんは即受話器を置いた。以上、奈美さんの記憶劇場だ。  
「また凄い事言い出したんだね、クボの奴」

「でしょ!？　そうでしょ!？　もう呆れたわよ」

奈美さんは腰に手を当てて頬を膨らませた。俺は何も悪い事なん  
てしてないんだけど、まるで俺が怒られてるみたいだ。

「ゆんちゃん。もう剛史なんて無視だね、無視!」

でもついさっきまでタコチューになってたと思いきや、奈美さん  
はゆんを撫で始めた。

その奈美さんと、幸せそうなゆんを見て彩は笑ってた。そしたら  
今度は俺を見た。

「あのね?」

急に口を開いた。

「ん?」

「私……………」

「なに。どうしたの?」

「私ね、やっぱり晴樹くんの事お父さんに言った方がいいんじゃない  
かと思って……」

な……………なんだって?

「え??」

「だからね、お父さんに晴樹くんの事を言った方がいいと思うの」  
そこから俺が何も言わなかったもんだから、公園内に重苦しい空  
気が漂った。

ひたすら沈黙だった。

俺の中以外は。

俺の中では、言葉がグルグル回ってた。めまぐるしく動いてた。  
そして、1つの言葉が俺の口から飛び出した。

「なんですとおおおおお!!!?!?」



## 第23話 小田家へレッツゴー!

ある日彩は俺に言った。

「お父さんに晴樹くんの事を言った方がいいと思うの」と。

俺はビックリして叫んだ。

「なんですとおおおおお!!!?」  
と。

だってそりゃビックリだ。急に「お父さんに言った方がいい」宣言されちゃあ男は驚くだろ。しかも一度最悪のシチュエーションで会ってる。会ってるとは言い難いけど、でも声を聞いた。

『カミナリ親父』そのものだった。きっと野球ボールで窓を割ったら「けしからん!」って怒るんだろう。怖いなあ。だけど彩としてはお父さんに嘘を付き続けたく無いって気持ちがあるんだと思う。だったら俺はそれを尊重したい。

彩の気分がスッキリしないまま一緒に居るのも嫌だし、バレてから改めて挨拶に行くってのも嫌だ。彼女の事だからきっと悩んで悩んで悩みまくって決めた事なんだと思う。軽々しく決めた事じゃ無いんだ。

だから、いくら「なんですとおおおおお!!!?」って思っても、俺は彩の出した答えに付いていく。どんだけ怒鳴られても「馬の骨骨骨」って言われても、彩の費やした時間を無駄にしたくは無い。

大丈夫だ。怒鳴られただけで別れるほど軽い恋じゃないんだ。

大丈夫———。

今日は祝日。月曜日。

いつもの祝日なら家でゴロゴロしてる。だけど今日は違う。家でゴロゴロしてる暇があったら鏡に向かって髪を梳かす。ゴロゴロしてる暇があったらスーツを探し出して即着替える。

そんな慌しい祝日だ。

何故って、今日は彩のご両親にご対面しなくちゃならないからだ。俺の心臓は脈打ちすぎてどうにかなりそうだった。ああ、緊張でトイレに行きたくなってきた。

「晴樹ー？ 朝から騒々しいわね……。どうしたの？」

「なんでもないよ！ 母さんちよつとそこ通して！」

「あ、はいはい」

母さんは昨日の夜遅くに帰ってきた。家に入ってからでもEXILE熱が冷めないようで、1人ベッドの上に寝転んで「へーい」とか「ひょーい」とか変な事を叫んでいた。相当楽しかったんだろう。姉貴も昨日の夜に帰ってきて、彼氏と2人で写ったプリクラを見て喜んでいた。それで「今度こそ逃がさないわよぉ」って意気込んだ。父さんは今日の夜帰ってくるそうで、兄貴も今日帰ってくる。そして俺は今日彩の家に行く。

まだ母さんには言っていない。帰ってきてから言おうと思ってる。だって行く前に言ってみたりでもしたら、「あらやだ、母さんもご挨拶したいわぁ」って言うに決まってるんだ。俺だって分かっているが言うほどバカじゃない。

母さんにはとりあえず、遊びに行ってくる、とだけ言っている。そんな簡単なものじゃないんだけどね、ホントは。彩の家に行って遊んでくるだけならどれだけ楽か……。

「じゃあ行ってきます」

「行つてらっしゃい。気を付けてね」

「分かつてる」

俺はそう言つて、家を出た。

今日に限つて空が暗いような……。気のせいかな……？

彩とあの公園で待ち合わせて、そこから2人で彩の家に行く。そこまでだけでも凄い緊張するのに……。

あーヤバイ！ もう1回トイレに行つとけばよかった。だけど今日は絶対に遅刻できない。こんな日に遅刻でもしてみろ。『馬の骨骨骨アッパー！！』』とか言つて空にピューンと飛ばされちまう。月面目指してぶっ飛んだロケットより早く宇宙に放り出されちまう。

そうなたらきつと、絶対、確実に、日本には帰れない。いや、地球にすら帰れないかも知れない！

ダメだダメだ！ 絶つっつ対に遅刻しないように……。

「あ、晴樹くん！」

考えてたら、前から彩の声が聞こえた。こっちを見て手を振つてる。

俺も軽く手を振り返した。

「遅刻、してないよね！？」

「うん！ 大丈夫だよ。行こう？」

「はいっ！！」

「そんなに緊張しないでいいよ。そこまで恐い人じゃない……………」  
と思うから」

思うから、って何！ 余計恐い……！！

でもまあ彼女も彼女なりに気を遣つてくれるんだから、ありがたく受け取っておこう。

そうだな。会つてもいないうちから勝手な推測で恐がっちゃ失礼だもんな。

大丈夫。大丈夫……。

「きみが彩乃の……」

「は、はははは初めまして！ 榎本晴樹と言います！！」

そして今俺が直面しているのは、どうみたって大丈夫そうに見えない彩のお父さん。

俺を見て怒ってるような悲しんでるような、そんな顔をしてる。どう喋ったって声が裏返っちゃう、恐ろしいオーラをかもしれ出しちゃってる人。

「あらあらまあまあ。まあまあとにかく上がってください」  
リビングから出てきてスリッパを用意してくれたのは彩のお母さん。

以前、俺が訪ねた時に「お茶でも……」と家の中に入れてくれようとした人。案の定遠慮しといたけど。

「あ、あ、す、すすすみません！ ありがとうございます！！」

「そうだな。とにかく上がってもらおうか。母さん、お茶を淹れてくれ」

「分かってますよ」

お父さんとお母さんはリビングに消えた。緊張がとけた。

「晴樹くん？ ……大丈夫？？」

「ただただ大丈夫……うんうん大丈夫……」

こうなったら自己暗示で乗り切るしか無い。

俺は心の中でお経のように「大丈夫」と唱えてスリッパを履いた。  
「お邪魔しますっ！」

リビングの中の、キッチンの方からお母さんの「どろぞろ」と言う声が聞こえてきた。

俺は一度この家に入った事がある。このリビングに置いてあるコタツの中に足を突っ込んで、彩の淹れてくれたコーヒーを飲んで……

…。

そしてその後、悪夢が……！

「きみは……」

「はい！！」

「彩乃と同じクラスなのか？」

「いっいえ！！？ 同じじゃないです！！ 出来れば同じが良かったかな、な～んて思ってしまったりもするんですが、でも同じじゃないんです！！」

「そうか」

う……。なんだ、この重苦しい空気は……。

「はい、どうぞどうぞ。榎本さんレモンティーは好き？」

「あ、はい！ 大好きです！！ ありがとうございます！！ いた、いただきます！！」

「あら～良かったわあ。どうぞ飲んでくださいね。あ、お砂糖、もし要るのならコレだから、ご自由にね」

「ああありがとうございます！！」

俺はレモンティーを飲んだ。……おいしい……。

外の寒さとお父さんで冷え切った体を温めてくれる。

このまま時間が過ぎてってくれればいいんだけどなあ……。

「榎本くん」

「はいっ！！！！」

まあそうもいかないよなあ。女の子のお父さんだもんなあ……。

「彩乃の、どこを気に入ったんだ？」

「はい？」

「この子は無口だし引っ込み思案だし、男の子とロクに喋った事が無いんだよ。勿論小さい頃はあったんだがね？」

「お父さん！！」

彩が声を出した。

だけとお父さんはそのまま喋る。

「彩乃に彼が出来るなんて思ってもいなかったんだ。……榎本くん、

彩乃のどこを好きになってくれたんだ？」

「ど、どこをって……」

本人の前だしなあ。……で、でも、ここでそんな事言って「そんなモンだったのか！」って怒鳴られても嫌だし。

「彩は……彩乃さんは……他の女子とはなんか違って……みんな、今の高校生って簡単に「死ね」とか「ウザイ」とか「キモイ」とか言うじゃないですか。いや、一部の高校生はどうか知らないんですが……。なんか、でも、彩乃さんは「キモイ」だなんて全く言わないし、ましてや「死ね」なんて事も絶対には言わないし、俺……ぼ、僕は、彩乃さんのそう言うところが好きです。そんな人を傷付けるような事を平気で言える人の傍になんて居たくないって思うし、いや、なんか話がズレてってる気がするんですけど……。……でも、彩乃さんは、人を傷付ける事を言いません。絶対に言いません。そう言うのって、やっぱり大事だと思うし、そこが好きです……。……」

……。……しまった！！！！ 何言ってるんだ俺は！！ 彩もお父さんも口ポカーンと開けて見てる！！ 唯一お母さんだけニコニコニコニコして俺を見てる！！！！

「……いやあ凄い！！」

お父さんは、急に拍手を始めた。

な、何ぞや……？

「私もきみと同じ考え方なんだよ！ 今の若い奴等はそう言う……。……なんて言うんだ？ その「死ね」とかを言い過ぎるだろう？ でもね、安心したよ。彩乃の彼がそんな奴じゃなくて」

安心……。……って事は？

俺は「馬の骨骨骨……！！」って言われない、って事か？

「きみになら安心して彩乃を任せられるよ。……。榎本くん。これからも、彩乃をよろしく頼むよ」

お父さんはコタツに額が付くくらい頭を下げた。

こりゃビックリ。あらビックリ。

「頭上げてください」って言おうと思ったら、お父さんは急に頭を上げて俺を見た。そして満足そうに頷いた。

## 第24話 小学5年生

その後、レモンティーを全部飲んでから彩の家を出た。

俺達は今、あの公園に居る。

「どうだった……？」

「うん。いいご両親だね！ 彩を大切にしてるんだなあって分かるよ」

「そうかな……」

彩はそう言って、照れたように頭を掻いた。

でもその動きはすぐに止まった。さっきまでの笑顔はどこかに行つて、真剣な顔になる。

「晴樹くん」

「ん？」

「私ね、その……男の子と、あんまり喋らない、でしょ……？」

「んー。まあ、そうなのかな」

「……私ね、いじめられてたの」

彩の唐突な告白に、思わず俺は聞き返した。

「いじめ……？」

彩は無言で頷く。今まで親にしか話して無かった事だけど、俺には知っておいてほしい、との事だ。

だから俺は静かに聞く事にした。

「いじめが始まったのは小学5年生くらいの時で……私、その時好きな子が居たの。クラスに。女子の間で絶えず噂になってる人気者で。それでね、ある日、頑張つてその子に告白、したの。手紙を書いて、下駄箱に入れて……」

彩はそこで一度息を吸うと、また話を続けた。

「その日の夜凄くドキドキして眠れないくらいだった。それで朝学校に行つて、そうしたら、手紙をあげた子と仲が良かった3人組に呼ばれたの。階段の横の少しスペースの空いてる所に。なんだろう



って思ってたなら、その中の1人がポケットから手紙を出して大声で読み始めたの。勿論通ってく子達はみんな笑うし、凄く悔しくて恥ずかしくて……。やめてって叫んだら、急に上から水を掛けられたの。「お前みたいなネクラ好きになるわけねえだろ」って言って、その子達はそのまま教室に帰ってっちゃったんだけど……結局ね、その手紙は、本人に読んでもらえないままだったの。仲が良かった子達が勝手に読んで勝手に判断して……」

彩にそんな事があったなんて知らなかったから、俺はただただ驚くだけだった。

驚いた顔の俺を見て、彩はなんだか悲しそうに笑った。

「私ね、この性格直したいって思ったの。そうすれば好きになってもらえるって思って……。周りのクラスメイトの子達の真似をしてみたりもしたの。だけど小学生も「キモイ」とか言ってて、でも私はどうしても言えなくて、やっぱりこの性格のまま高校生まで来ちゃったの。こんな暗い子好きになってくれる人なんて居ないだろうなあって思ってた。それで……。晴樹くんが私の好きなお父さんの前で堂々と言ってくれて、凄く嬉しかった」

彩の話はそこで終わらしく、フウと息を吐くと俺を見た。

「彩、俺……」

「ありがとう、晴樹くん」

彩は笑った。ニッコリと、いつものように優しく笑った。

でも俺は、その笑顔を見て、何故か悲しくなった。泣きたいのは彩の方なはずなのに、俺も泣きたくなった。人の話を聞いてこんなに悲しくなったのは初めてだった。

そこに俺が居たら助けてやれたのに、って、どうしようもない事に悔やんだ。

どうにも出来ない事なのに。もう過去の話なのに。

俺が今何か思ったところで、何も出来ないのに――。

「誰になんと言われようと、彩はそのままでもいいから。そのままの

彩が、俺は大好きだから」

小さな肩を引き寄せて、彩を抱き締めた。力一杯抱き締めた。耳元ですすり泣く声が聞こえる。俺は右横にある頭を撫でた。髪からいい香りがする。

「彩」

「……………はい……………」

震えた声で返事をした。いつもより小さな声だった。

「好きになってくれて、ありがとう」

そう言うのと、彩は少し首を横に振った。

「好きじゃないの？」

また横に振った。沢山振りたくった。

「晴樹くんもだよ……………」

「何が？」

「好きになってくれて……………ありがとう、って……………私も晴樹くんに言いたい言葉……………」

「へへっ。そっか！」

じゃあおあいこだ。いや、おあいこって言い方は変だけど……………  
…まあ、いつか。

それからしばらくの間、その公園に居た。

今は夕方、6時。

「私、晴樹くんのお父さんとお母さんにも会ってみたいなあ」

「ええっ!？」

「え? 何？」

「俺ん家なんか何も面白くないし何も無いたただの家だし、なんの変哲も無いたただのオジサンとオバサンが居るだけで…」

「お母さん、どんな人？」

俺の言葉を遮って、彩は聞いてきた。

仕方ないから答える。

「賑やかないよ。テンションが上がってくると声の音量も上がるし……あ、昨日なんてEXILEのコンサート行ってきたんだよ！でさ、帰ってきたら凄いテンション高くなってるんだ。俺の部屋がこうあって、その隣に母さんの部屋があってさ、もう「へーい」とか「ひょーい」とかうるっさいんだよ！ 同じ部屋じゃなくてまだ良かった」

話し終わると、彩はニコニコ笑って俺を見た。

「晴樹くんは……お母さんが大好きなんだね」  
爆弾投下。

俺が母さんを好き！？ バカ言っちゃいけないよ！ 母さんなんて好きなわけ……。

「それにEXILEのコンサートなんて楽しそうじゃん。あの、あれでしょ？ 2人組の……あの、犬の写真のCDを出した……」

それはもしかや……。

「ケミストリーだね、それは……」

「えっ……え？ ケ、ケミ??」

「えーと、うん、まあそれならそれでいいんだけど……」

俺は心の中で自分に突っ込んだ。「良くねえよっ！」って。

でもさ、ケミストリーとEXILEの違いを説明するのはちと難しいって言うか、正直言っちゃえば面倒臭いって言うか……。

「楽しそうなお母さんだね！」

彩はニコニコニコニコしながら言った。楽しそう……うん、まあ、教育オバサンじゃないだけいいけどさ。でも兄貴に会ったらどう思っかなあ。ボケボケだから、いくら彩でも痺れを切らして怒っちゃうかもしれない。

いや。まだ彩が来るって決まったわけじゃないからな、うんうん。

「また今度、行かせてね」

決まっちゃったな、うんうん……。

女の子っていいなあ。母親と上手く打ち解けられそうで。俺とお

父さんが楽しくどんちゃんどんちゃんやってるトコなんて想像出来ないし。俺はお父さんにお酌するので精一杯だし。

まあ、彩が来たいって言うんならいいんだけど、さ。うん、いいよ。

もうこうなりやヤケクソさ。

俺と彩は8時頃、公園を出た。

いつものように彩を家まで送り届けて、俺も帰る。  
帰って母さんに言った。

「今日彩の家行ってきた」

「あら？ 彩ってだあれ？」

……………この間話しただろ。なんでこうすぐに忘れるんだ、この人は。

「俺の彼女だって言ったじゃん！」

「……あ、あーあーあー！ 分かったわあ」

絶対分かってないな。調子合わせとけばいいって思ってるんだろ。まあしつこく聞かれるよりはいいか。

「彩がまた今度家に来るかもしれないから」

「あらー。それじゃあこの家大掃除しなくちゃねえ」

「いいよ！ そんな事しなくて!!」

「ダメよー。せっかく来てくださるんだもの。こんな家じゃあ…」

「この間掃除したばかりかだろ!!?」

もー。やっぱ話すんじゃないかった……!

「来ても変な事言うなよ!？」

「分かってるわよ、もう。……反抗期かしらね」

反抗期はとづくに過ぎてるんじゃないか？

って言うか反抗する理由が自分にあるって気付かないかね……。

俺は2階に上がって、自分の部屋に入った。なんか俺の母さんと

彩のお母さんって、似てる気がする。

「はぁ……」

大きなため息ひとつ。

母さん、変な事言わなきゃいいけど。

## 第25話 泣いてしまった日。

俺が彩の家に行ってから2週間が経った。

そして今日は彩が家に来る日。俺は公園に入って、彩が来るのを待った。

5分後に、彩は来た。

「おはよ」

「おはよう！ ……今日の服、変じゃないよね……？」

「大丈夫。変じゃないよ」

「お母さん、こう言う服嫌いじゃないよね？」

「大丈夫、大丈夫。服で好きか嫌いか決める人じゃないからさ」

彩がちよつと不安そうに頷いた。

2人で歩いて俺の家まで行った。

ドアを開ける。母さんがスリッパ用意して待ってた。

「母さん、この人が小田彩…」

「いらっしやうい。晴樹の母です。いつもお世話になっております」

俺の言葉を遮って、母さんは深々と頭を下げた。何も入ってすぐに下げなくても……。それに俺の紹介遮らなくても……。

そしたら彩も頭を下げてた。俺ビックリした。

「こ、こちらこそ、晴樹くんにはお世話になってます」

とりあえず俺も頭下げといた。

なんで自分の親に頭下げないといけないんだろう？ って思った

けど、とりあえず下げた。

「まあまあどうぞ上がってください」

「はい。……お邪魔します」

母さんはスリッパを1つしか用意していなかった。きっと彩の事でいっぱいいっぱい、俺の分は忘れてたんだ。酷いなあ……。

「ごめんね、変な母親で」

コッソリ言った。でも彩は首を振って、

「ううん、変じゃないよ全然」  
って言ってくれた。

そう言えば、彩は俺の家に入るのは初めてだったっけ。なんかこっちまで緊張してくるなあ。

彩をリビングまで案内して、四角いテーブルに隣同士で座った。そこに母さんがお茶を持ってくる。

「はい、どうぞ」

「あ、はい！ い、いただきます」  
でも女の子でもやっぱ緊張するんだなあ。

彩の家に行った時の俺もこう言う感じだったのかな。

「小田さん、って呼んでもいいかしら」  
母さんが急に彩に訊ねた。

俺にはその理由が分かった。母さんは『小田和正』も好きだからだ。

「あ、はい」

「ありがとう。私、小田和正さん好きなのよー」  
うん、やっぱり！

「家の母も好きですよ、小田和正さん！」  
へー。そうなんだ。彩のお母さんと俺の母さん、気が合いそうだな。

「あらそうなの？ あ、私ね、言葉にできないが1番好きなのよー」  
「家の母はさよならが好きみたいです」

あーらら。思いつきり気が合っちゃってるよ……。  
まあ彩が楽しそうだからいいけど。

「小田さんは……いつも何をしているの？」  
「たまにお菓子を作ったりしてます」

「あら凄いわねえ。何を作るの？」

「ケーキとかクッキーとか……あ、最近はマフィンを作りました」  
「私もよく作るのよー、ケーキ」

「そうなんですか！？」 あ、じゃあまた色々教えてもらってもいい

ですか？」

「いいわよー。何でも教えてあげる！　またいらっしゃい」

と、この後も2時間くらいは2人だけで盛り上がっちゃってた。

俺の入る隙、無し！！

「楽しかったー！」

俺と彩は家を出た。彩は大喜びで、また家に来るらしい。お菓子の作り方を教わりに。

そして今は昼ご飯がまだだから、2人で食べに行く途中。彩が美味しそうなパン屋を発見したらしいから、そこへ行行って買って、川原かどっかに行って食べるんだ。

「晴樹くんのお母さん、いい人だね！」

「そう、かな。ただのうるさい人だけど」

「自分のお母さんだからじゃない？」

「んー……そうかもね！」

パン屋に着いた。中に入ると、美味しそうな匂いが漂ってきた。作ってるところがガラス張りになってるから様子が見える。それを見て楽しんだ。

それから、パンを見て回って、結局同じサンドイッチを買って店を出た。出たら川原にレッツゴー。

「ここでゆんと遊んだね」

「うん。あのボール投げたら凄い勢いで追っかけてったやつね」

思い出話で笑った。

話と言うより、ゆんの顔を思い出すだけで顔が綻ほころんだ。

思い出話。

俺と里砂の事も、もう思い出なんだ。

「彩、俺さ」

彩はサンドイッチを口の中でモグモグしながら俺を見た。



「俺、さ。彩と付き合う前、1人の女と付き合ってたんだ。4つ年上だったんだけど」

少し戸惑いながらも、彩は頷いた。

これを彩に話した方がいいのかどうかは分からない。

だけど、何故か話さずにはいられなかった。

「結構付き合ってた。俺が高1の時に始めたバイトの先輩で、里砂って言うんだ。あ、もうそのバイトはやめたんだけど……俺はさ、ホントにその人の事が好きだった。同棲してて、俺にはこの人以外居ないんだって思ったくらいだった。でも、ある日、その人は浮気した。俺が学校行ってる間に他の男と会ってたんだ。昔付き合ってた男らしい。その男と……寝てさ。それでも平気な顔で俺と一緒に過ごしてた。だから、それを知った時マジで怒れた。男も里砂も許せないと思った。俺は男の居場所を聞いて、殴り込みに行ったんだ」

彩は心底驚いた顔をした。俺が人を殴るなんて思ってたなかったんだろう。俺だってそんな事になるとは思ってなかった。

ずっと里砂と幸せに過ごせると思ってた。

「そこにさ、里砂が来て……なんて言ったと思う？」

「……………」

「やめて、って。死んじゃうからやめて、って……彼氏の俺より元彼のアイツを取ったんだ。ハンカチで丁寧に拭いてさ……。勿論俺、里砂と住んでたトコ出てったよ……。だけど俺が飛び出しても、アイツは追ってこなかったんだ。結局、俺とはただのお遊びで、本命は元彼だったんだ。俺なんてただの暇つぶしの相手だったんだよ……」

これを彩に話してどうなるか、なんて分からない。彩が嫌な思いしてしまうかも知れない。

でも、彼女には俺の事知っておいてほしかった。この昔話は愚痴でもなんでも無く、れっきとした俺の「過去」なんだ。

「……………そう、なんだ……」

彩は今も尚驚いてるようだった。

そんな彩の手を、俺は上から自分の手で覆いかぶせるようにして握った。

「でもさ、こんな言い方なんだけど、里砂がソイツと一緒にになってくれたから、俺は彩と付き合う事が出来たんだよね……。や、別れるなら別れるで、もっとマトモな別れ方したかったけど……」

「うん」

彩は頷いた。かぶさってる俺の手を握って、コクンと頷いた。

「ごめん。……こんな話したって楽しくもなんとも無いってのは分かってる。でも……でも俺……でも俺……」

「うん、分かってるよ」

俺の言葉を遮って、彩は言った。大きな目を少し潤ませながら、俺を見ていた。

それを見て、また泣きそうになった。この間から涙腺緩みまくりだ、チクシヨウ！

「大丈夫だよ。私、なんでも聞くから。私には聞く事しか出来ないけど、でもそれでも、少しでも役に立てるんなら、話してくれて……いいよ？」

「彩……」

ごめん、彩。俺は話しながら凄く切なくなってたんだ。何だかんだ言って、やっぱり俺はまだ里砂の影を追ってるのかも知れない。自分から離れていったアイツを——まだ好きなのかも知れない。嫌いになったはずなのに。憎んだはずなのに。

今俺が付き合ってるのは里砂じゃなく、彩なのに。彩だけ想ってればいいのに。

浮気された奴を想い出すなんて……。

なんでも聞く、と言ってくれた彩の優しさと、嬉しさと、切なさ、悲しさと申し訳なさが……色んな感情が絡み合ってる。

苦しい。

目の前で涙を堪えてる彩を見るのが苦しい。里砂を想い出せてしまうのも苦しい。

その潤んだ目をしてる彩がぼやけたから、俺はとっさに横を向いた。全てがぼやけて見える。

歯を食い縛った。更にぼやけた。

鼻の骨の辺りがツーンとした。涙を見られないように、俺は川原の坂を走って下りた。彩の声を背中で聞きながら、俺は思い切り走った。

死にそうなくらいに胸が苦しかった。

川の前まで来て、座り込んだ。草に頭を付けた。草も土も、俺の嗚咽を吸い込んでくれる。

彩も走ってきてた事に気付いたけど、もう止められなかった。

止めようとすればするほど声は漏れる。涙は溢れる。

情けないとか恥ずかしいとか、そんな感情はもうどうでもよくなつて、俺はずっと、顔を伏せながら川のせせらぎを聞いてた。

## 第26話 ダンシング葉っぱ

今日は学校だ。

でも問題がある。

彩にどーゆー顔で会えばいいんだああ！！！！

普通に挨拶出来れば苦労しないさ！ 出来ればいいさ！ 出来ればね！！

だけど俺の場合、絶対ドモツちゃうんだよ！ ああああ彩、おはよよーとかさ！

だって、泣いてるところを見られたんだ。彼女に！ 常に強くありたかったのに、でも泣いてるところを見られちゃったんだ！ どうすりゃいいんだよ俺！

――って考えてる間に着いてしまった。

俺は学校に着いてしまった。

休みたい気持ちでいっぱいだったけど、でも来てしまった。

こうなったら顔を合わさずに今日を終わらせるしか無い！ まず

最初の関門、下駄箱。

サツと靴脱いでスツと入れて、ヒョイツと上履き取ってスツと履いた。

よし、大丈夫。見られてない。このまま教室に入っちゃえばこっちのモンだ！！

「おはよう、晴樹くん」

「ああ、おは……………」

俺は止まった。

そして走った。

全速力だった。

教室に逃げ込んだ。そしたらクボが寄ってきた。

「おっはよー榎本くん！……どうしたんだよ、朝から息荒くして」「いや……………何も……。ただちよつと鬼ごっこを……」

「榎本。お前そんなに幼稚だったか？」

「違う！！子供がやるような鬼ごっこじゃない！！！！俺の生命を掛けた鬼ごっこだったんだ！」

「おー、なんだ？通り魔にでも追われたか？」

そこへ杉浦も乱入。まあそういう事にしておこう。

「うん、まあ、な」

「えースゲエ！！立派な武勇伝じゃねえか」

武勇伝、って言うのか？

それは俺にオリエンタルラジオの真似をしろって言ってんのか？

「あれ？彩乃ちゃんじゃん」

「え！？」

しまった。とっさに隠れてしまった。でも彩には見つかってないみたいだ。

男2人には見つかったちゃったけど……。

「榎本。通り魔、ってのは彩乃ちゃんの事か？」

「榎本。どう言う事だ？こんな面白い事……大事な事を俺達に言わないなんて」

杉浦。俺とお前はいつからそんな親友みたいになってたんだ？

つつーか言えるか、そんな事！

「な、何もねえよ！ただちよつとビックリしてさ……その……反射的になって言うか……なんて言うか……」

「お前嘘下手」

す、杉浦に言われると何故かムカつく。それはクボも同じだけど。「言え。俺とお前は友達じゃないか。俺はなんでも聞いてやる！」

杉浦は、俺の肩を掴んで言った。

じきに「さあ、走れメロス」とか言いそうだ。

「杉浦……」

「なんだ？」

「お前、彼女どうした？」

俺がそう言うと、杉浦は俺に頭突きしてきた。

頭を抱えてうずくまってる俺を置いて、杉浦は「別れたんだチクシヨオオオオ！」って叫んで走ってった。

人に頭突き喰らわせという……。

そして、今度はクボが来た。

「榎本。何があった？」

「だから何もねえよ」

「何も無い、って顔してないぞ」

「……………」

気が付くと、俺はクボに何もかも話してた。

クボはうんうんって頷いて、全部話し終わるまで静かに聞いてくれた。

彩に里砂の事を話したのも、なんでも聞くって言ってくれた事も、俺が泣いちゃった事も、全て話した。

「……なるほどな」

「どう思う……？　って言うか、俺どうしたらいいんだ？」

「知らん」

「ヒデエよ！　俺ちゃんと話したじゃねーか！！　お前もちゃんと考えてアドバイスよこせよチクシヨー！！！！」

「普通にしとくのが1番なんじゃないか？　変に逃げようとしたりするとな事がこじれるぞ」

まあ。そうだけどさ。

それは分かってるけど、でも、彩と目を合わせられないんだ。

今になってようやく、情けないとか恥ずかしいとかの感情が溢れだしてきたんだ。

「よし。榎本、少し待ってろ」

「あ？」

「待ってろ。絶対ココに居ろよ！？ いいな！！？」

何しようとしてんだろ、クボの奴。

言われた通り、俺はココでずっと待ってた。10分くらい後、やっとクボが戻ってきた。

「クボ、何してたんだよ。遅いぞ」

「ホレ！」

クボの後ろからは、彩が出てきた。

「！！！！！！ あ、あ、ああああ彩っ！！！！？」

「お、おはよう。晴樹くん」

「おおおおおは……お……—？」

彩の後ろでクボが手を振ってた。それで振り終わると、校舎内に戻っていった。

「く、クボが……強引に……とか？」

「う、うん。その、急に」

「くっそー。あの野郎……」

「あ、いいの！ 丁度、私も晴樹くんと話したかったから……」

「……………そか……………」

「うん……」

俺と彩の間を、まだ少し冷たい風が通っていった。寒い……。

地面に落ちてる葉っぱもカサカサと音を立てる。それが丁度BG Mのようになってた。

「あのね」

彩が口を開いた。

「……あのね、私……な、何かしちゃった、かなあ……？」

「え？」

「だって……晴樹くん、さっきから私の目見ようとしないうし、下駄箱で「おはよう」って言った時も走っていつちゃったし……」

「あ、いや、あれは……」

「私、自分では何もしてないつもりだったんだけど、無意識のうち

に晴樹くん傷付けるような事しちゃったのかなあ？　って考えてたの。でも何も思いつかなくて、それで…」

「違う！！　彩が悪いんじゃないかって……って言うか俺が全て悪いんだ。なんて言ったらいいのか……分かんないんだけど………」と、とにかく、ごめん！！」

俺は頭を下げた。

やっとまた、葉っぱのBGMが聴こえてきた。時間が凄いいゅっくりに感じられた。

俺が頭を上げるまでの時間が、たったの10秒ほどなのが10分くらいに感じられた。

「ただ俺が彩に顔合わせにくかったただけなんだ」

「……どうして……？」

「………だって……その……な、泣いてるとこ見られたし……」

「全然気にしてないよ？　それにそんな事言ったら私だって晴樹くんに見られてるよ」

「女が泣くのはいいんだ。だけど男が泣くのとて、なんかさ……」

「同じ人間なのに？」

彩はそう言って「えへへへ」って笑った。

それでその後、「変なの！」と付け足した。そうしたら何故か俺も笑えてきた。

外は寒いはずなのに、俺の中はこれまでに無いくらい暖かくなった。さっきまでの不安な気持ちや恥ずかしい気持ちが嘘みたいだった。

ただ吹かれてただけの葉っぱが、踊ってるように思えた。

そうか、男だって泣いてもいいんだ。

彩はその事だからかったり、おちよくったり、突き放したりしないでいてくれるんだから。

「ありがとう、彩」

「ううん。私だって晴樹くんにはお世話になってるもの」

「そうかな」



「そうだよ」

「……そっか！」

嬉しすぎて、また泣きそうだった。ふざけんなよ俺の涙腺！！  
でも今回はなんとか戻す事が出来た。

ふう、と息を吐き出すと、急に彩が抱き付いてきた。

「……あ、あああ彩……？」

「あのね晴樹くん」

「……ん？」

彩も照れてるようで、決して顔を見せずに言った。

「私、晴樹くんが大好きだよ」

「……………俺だって……」

俺だって彩の事が好きだ。

大好きって言うだけなのに照れたりするとか、凄い優しいと  
ことか、人を傷付けないとかことか。

ただ、俺も照れちゃって口に出来ないだけけど、さ。

彩は顔を上げた。その頬はほんのりピンクに染まって見えた。

なんかその姿が可愛すぎて、愛しくて、俺は彩にキスをした。そ  
の後ろでクボと奈美さんが見てる事にも気付かず、2回もキスをし  
た。

2人が見てる事に気付いたのは、クボが壁に立て掛けてあつた箒ほうき  
を倒したからだった。

「あっ」

クボの声がした。

「あ！ コラバカ何してん……」

奈美さんの声がした。ついでにゴンッと頭を殴られる音も聞こえ  
た。

壁に隠れて、2人がわざとらしく笑ってた。

「あ、あ、あ、あっれー！ 偶然だねえ榎本お！！」

「あつらホント！ 彩も居るじゃない！ 何してるの？ 2人とも  
こんな所で……」

俺等は顔が真っ赤になって、それに答えるどころじゃなかった。  
葉っぱは地面に寂しく落ちた。風は4人の間を寂しく通った。  
もう葉っぱは踊ってなかった。

チクシヨウ……。

今度はクボと奈美さんがラブラブしてるところを盗み見してやるっ

!!!!

「榎本……？ どーし……」

「クボのバツカヤロオオオオオオオオオオオオオオツ！！！！！」

俺は叫んだ。

思いつきり叫んで、声は校舎内にまで響いた。教室で騒いでた野次馬共が出てきて、中庭に居る俺達を上から覗き込んできた。

だけど今の俺は人目なんて気にしてられなかった。脱兎のごとく逃げ出したクボを追って、運動場まで出た。また上履きが黒くなっちゃった。

野次馬共は「レースだレースだ」って喜んでた。クボが豪快にコケたところを狙ってジャンプした。でもクボは素早く起きて、俺が伸び掛かってくる前に退いた。

俺は見事運動場の砂に向かって飛び込み、スライディングした。

「ダメだな榎本っ！ 素早さは俺の方が上なんだーい！」

クボが息を切らしながら言った。素直にムカついた。

だからまた走った。

授業が始まってでも走る事を止めなかった俺達は、放課後、先生の  
カミナリを喰らった。

## 第27話 バイト

「疲れた……」

「凄い走ってたもんね!」

「クボが逃げ回るからさあ……」

今は帰り道。走ったのは朝だけど、その疲れが未だ足に残ってる。1番ムカツと来たのは、クボだけケロッと元気になってた事。

俺はこんなに疲れきってるのに、諸悪の根元がすぐに元気になっちゃって。

まあいつか。家に帰ったらシップ貼らないと。

「あ、そうだ晴樹くん」

「ん?」

「帽子、買いに行くって言ってたじゃない?」

「……………あ!! そうだった!! 買いに行っていないね!!」

「うん、だから、日曜、行かない?」

「オツケーオツケー! 全然オツケー!」

よっしゃあ! じゃあシップ貼って臭いの撒き散らしてる場合じゃない! 日曜よ、早く来い!

日曜は思ってたより早く来た。

今日は日曜。あの日曜。

前に帽子買いに出掛けた時は、まだ「小田さん」と「榎本くん」って呼び合ってたんだっけ……。懐かしいな。

俺は準備をして、公園に向かった。もう待ち合わせと言えばこの公園になってる。

今日は彩が先に来てた。

「おはよ」

「あ、おはよう」

「早いね」

「なんか早く起きちゃったから……」

話しながらバス停に向かった。バスはもうすぐ来る。帽子、すっかり忘れてたなあ。ちゃんと彩が俺に似合うやつ探してくれたんだよな。

千……千いくらだったっけ？

せんはっぴゃく……？ だったっけか？

まあいいや。行けば分かるさ。

行った。

無くなった。

帽子は春物になっていた。

彩の帽子も、買えないまま終わってしまった。

「ゴメンっ！！！」

俺は平謝り。彩はボーゼン。

「ほんっつとにゴメン！！！！」

また平謝り。彩はボーゼン。

「俺のせいです！ 本当にゴメン！！」

ただ平謝り。彩はボーゼン。

目の前には春物の服達。

やっとこさ凍ってた彩の口が開いた。

「うん……あの……ま、また、来年……さ、買いにこれば……  
……………」

風が吹いた。ピュっつと音を立てて、吹いてった。

その風に乗って彩の涙が飛んでいきそうだった。振り子みたいに左右にブランブラン揺れて、口を開けば「きくちゃん！」と言いつつうだった。

俺はせめてもの償いとして、昼ご飯をおごる事にした。それからまた新しい欲しい帽子が出たら、買ってあげる事にした。

彩は「いいよ、そんなの」って遠慮してたけど、俺の男としてのプライドが許さない！

でも……昼ご飯おごっただけで財布の中はスツカラカン。

バイトしなくちゃなあ……。

「晴樹くん」

「ん？」

「もうすぐ春休みじゃない？」

「あ、そうだね」

って言ってもあと何週間後だ？

「春休みになったら、バイト、しない？」

「おー。バイトね！俺もしたいなあって思ってたんだ」

「そうなの！？じゃあ、同じとこでやったりとか……………」

「全然いいよ！楽しそうじゃん」

「ほんと？」

「ほんと！」

彩もバイトしようと考えてたんだな。

あ、でも部活の関係でバイト出来る日が限られてきちゃうな。

……いいや！もうこれを期に帰宅部に変更だ！！

じゃあ帰ったら早速退部届を書かないと！なんで俺こんなワクワクしちやってんだろ？

あ、きつとあれだな。多分、バスケットより彩の方が好きだからだ！

「18からは出来る幅広がるけどさ、それまではコンビニか飲食店か……その辺だね」

「晴樹くん詳しいの？」

「姉貴が死に物狂いでバイトしてた時期があつてさ。今の俺等くらの時」

「そっかあ。晴樹くん、お姉さんとお兄さんが居たんだよね。いいなあ」

あ、そうか。彩は1人っ子だもんね。

でも兄弟が居るってのも結構大変だよ。特に下は。

姉貴が怖いし、ムカツクとすぐに頭グリグリ攻撃してくるし。兄貴がボケボケなのが唯一の救いだな……。

「どこが働きやすいのかな」

「んー。コンビニは時給安いくせにキツイって言ってた。やるなら飲食店の方がいいってさ。確かにコンビニって時給750円とかだもんね」

「凄い！ バイト博士みたい！」

「えー。そこまでは言ってないよ」

なんか喜ばいいのか悲しめばいいのか……。

コンビニは夏のがキツイって言ってたな。冷房ガンガン効いてて、おまけにずっと半袖だから鳥肌が立つとか、レジ打ちは立ちっぱなしだから足が棒になるとか、お客さんが来ない時に嫌いな人と一緒になったら地獄だとか。その他モロモロ。

大変そうだなあ。

「ねえねえ、マクドナルドとかでも出来るのかなあ？」

「あーマックねえ。出来るんじゃない？ また今度行ってみようか」  
「うん！」

つつうわけで、月曜日の学校帰り、俺と彩とでマックに押し掛ける事にした。

そしてその月曜日。

授業が終わり、俺と彩はいつも通り一緒に帰る。

ここ最近やってなかったクボとの「じゃあな」も、今日は久々にやった。

「さて、じゃあ行こうか」

「うん！」

俺と彩はマックへ向かう。さすがファーストフード。店に近づくほどいい匂いが漂ってくる。思わずヨダレをすすりたくなってきちゃう程いい匂いだ。

モスとかケンタッキーとかでも、マックでも、やっぱ店の外からでもいい匂いはするんだなあ。

「いらっしやいませー」

店に入ると、愛想のいい笑顔のお姉さんがそう言った。

あー。店内は更にいい匂いがしてる。

「あの、すみません」

「はい？」

ちょっとドキドキしたけど、俺はそのお姉さんに話し掛けた。

「ここって、高校生でもバイト出来ますか？」

「あ、ちょっと待ってくださいね」

奥に行く時も笑顔。

俺、ああいう人好きだなあ。あ、いやいや。恋愛対象とかでは無くて、ね。

しばらく待っていると、『店長』と書かれたネームプレートを付けてる中年の男の人とさっきのお姉さんが来た。

「バイトですね？」

「はい！」

「大丈夫です。高校生も出来ますよ」

「そうですか！　ありがとうございます。……あの、ちなみにバイトの内容とかって……？」

俺がそう聞くと、店長さんは奥を指差した。

「厨房とか、他はレジ打ちとか」

「分かりました。ありがとうございます」

高校生も大丈夫なんだ。よかった。

俺は彩と話し合って、ここでバイトする事にした。履歴書を書けばいいらしい。

じゃあ早速家に帰って書かないと。

……あれ？　そう言えば、家に履歴書ってあったっけか？

「無いわよそんな物」

家に帰って聞いてみた。即答だった。

だから俺は買いに行った。家のすぐ近くにある、俺が小さい頃からお世話になってる馴染みの文房具屋さん。

『文房具屋』って言っても、色んな物が置いてある。バスに長時間揺られないと店の無いこの辺りは、この文房具屋が頼りだ。

だから片隅に冷蔵庫が置いてあったり、ちよつとした本も置いてあったり。

あ、冷蔵庫ってのは売り物じゃなくて、冷蔵しておかないといけない食品の為の冷蔵庫。俺達客は、その冷蔵庫から欲しい物を勝手に取ってってレジに行けばいいってワケ。

なんか店屋に来てるのに、家に居る感覚を覚える、変わった店だ。店主も変わった人。

名字は普通に『鈴木さん』なんだけど、いつも竹刀持っていて、服装は何故かズーッとジャージ。店に居る時も外に居る時も。さすがに外に竹刀は持っていないみたいだけど、初めて見た人はきくと驚く。顔もゴツイからね。

「鈴木さん、履歴書ってある？」

俺はもうお馴染みの客、言わば常連さんだから普通に話せる。俺が話し掛けると、ブスツとした顔の鈴木さんは顔をクシャクシャにしてニッコリ笑う。

「よお晴ちゃん。……履歴書か。何に使うんだ？ アイドルの学校にでも行こうってか？」

「違うよ。バイトすんの。マックで」

「マック………。ああ、あの最初の帽子のどこか」

鈴木さんは「ファーストフード」の事を「最初の帽子」と言う。合ってるのか間違ってるのか……。

いくら教え直しても、次会う時は必ず「最初の帽子」に戻ってる。だから俺はもう何も言わない事にしてる。ノーコメントってやつだ。

「あったあった。あったぞ晴ちゃん」



「お、ありがとう！ ……ねえ鈴木さん、履歴書の書き方って分かる？」

「書き方あ？ そんならお前、自分の姉貴に聞きゃいいだろう」

「姉貴は怖いんだよ。ね、お願い！ またガムたくさん買いにくるからさあ」

「……………まあ……………しょうがねえなあ！！ ホラ来い」

「へへっ！ ありがとう！」

鈴木さんは奥に上がってった。

店の奥は鈴木さん家になって、店と家の間に廊下がある。そこから両方繋がってるんだ。俺も小さい頃はよく遊びに来てカキ氷とかアイス棒とか貰ったりしたなあ。

「あらー晴ちゃん！ 久しぶりじゃないの。やだわあ大きくなっちゃって！」

「おー、ブンさん！ こんにちは！」

鈴木さんの奥さん。通称ブンさん。名前が文子だから、「文」を取って「ブン」。

最初は本人も「ハエみたい」って嫌がってたけど、呼び続けるうちに満更じゃなくなってきたみたいだ。

今ではもう「ブンさん」と呼ばないと変な気さえするくらい。

アイスとかはいつも、ブンさんから貰ってた。勝手にズカズカ座敷に上がり込んでアイス貰って。今考えると凄い事してたんだなあ、俺。

だけど勝手に上がってたって嫌な顔なんて絶対しない。2人には子供が居ない。だから孫も居ない。俺の母さん曰く、俺の事を孫同然に扱ってくれてるらしい。

それがスッゴイ嬉しくて毎日通ってたんだよなあ、ココ。最近は全く来てなかった。

「ホラ、いいか。まずここに名前だ。それから住所、電話番号、まあ書いてある事に従ってきゃあいい」  
「うん」

それから色々教えてもらって、なんとか書き終えた。

「終わった終わった！ 鈴木さんありがと！！」

「ま、俺に出来る事つつたらこのくらいだからな。またガム買いに来いよ？」

「分かってるよ！ じゃあね！！ ブンさんもさよなら」

俺が手を振るとブンさんも手を振ってくれた。

「いつでもおいでね。アイス用意して待ってるから」

ブンさんの言葉に、俺も鈴木さんも笑った。

履歴書を書き終えて、あとは送るだけ。バイトして金が入ったらまず何しよう？

いや、「何」じゃない。まず最初は彩に帽子を買う。それだけで余ったら………旅行とか行ってみたいな。よし。頑張ってバイトするぞ！！！！

## 第28話 退部届

「面接!？」

俺は姉貴にバイトの事を聞いてみた。面倒くさそうだったけど、教えてくれた。

その中に「面接」と言う単語があって、正直驚いた。バイトするにも面接なんて必要だとは思ってなかったし。

だって履歴書に写真貼ったし、それに……。

「何、あんた面接知らなかったの? ……………もー。話になんない」  
プンスカ怒りながらも、姉貴は説明してくれた。

「あんた高校入る時も面接ってやったでしょ？」

「うん、やった」

「まあそんな感じでやつときゃいいのよ。向こうから勝手に質問してくるから、それに答える。ただそれだけ。あ、でもね、何故ココを選びましたか、とか聞かれるからさ、そうになったらそのいいトコばっか挙げときゃいいの。分かった？」

「はい! 分かりました!!」

「で、面接はいつ？」

「いや、まだ履歴書送ってないんだ」

頭グリグリ攻撃がきた。

脳味噌がえぐられる痛さだ。

「いででででっ!!!」

「履歴書送らないうちから何言ってるの!! 少しは頭働かせなさい! すぐ送ってくる! ホラ早く!!!!」

「はいっ!!」

俺はまた頭グリグリ攻撃が来ないうちに部屋を出た。

……あれ? でも……。

「姉貴、履歴書ってどうやって送んの？」

消しゴムが飛んできた。俺のデコに当たって廊下に転がる。

「いってえ!!！」

「よく見なさいよ! 封筒入ってるでしょ!!?」

それから何度か姉貴に怒られながらも、なんとか投函出来た。そう言えば、今考えればパソコンで書き方とか投函の仕方とか調べれば良かったなあ。

まあ、過ぎちゃったんだからしょうがない。次からは自力で調べる事を心掛けると言う事で。

履歴書を投函したのが夜で、そこから風呂に入ったりなんやかんややってたら、寝たのが1時になってしまった。

その日、夢の中でも姉貴に100回は怒られた。

夢を見るのが怖くなって夜中の2時には目が覚めた。

「おはよう!」

「お、あ、うん……おはよう……」

「……凄い限くまだね」

「まあ、ね。………ははっ……」

朝、彩は俺の顔見て驚いた。そりゃそうだ。

夜中1時に寝て、夢でうなされて、夜中2時に目が覚めて、そこから寝転がる事も許されなかったんだ。夢の続きを見ちゃいそうで怖くてさ。

だから目はショボショボ。隈は黒々。頬はコケコケ。

教室に入ると、クボも驚いた。

「榎本! スゲェ限だぞお前!」

「うるせえな、分かってるよ……」

「おーい榎本!」

朝から疲れきって、今すぐにでも机に顔くっ付けて寝たい俺の後ろから、命知らずが声を掛けてきた。

命知らず。それは杉浦と言う名前の、この間彼女と別れた男だ。

でも隣には女。

「ん？　なんだその顔？　隈は凄いし目は俺の彼女に向いちゃってるし」

「……………別れたんじゃないかったのか」

「俺なら新しい彼女作るのに1日も掛からないんだよ」

自信満々だった。

実際1週間は経ってたけど、一応杉浦のプライドの為に口にはしなかった。

「で、その隈はなんだ？　そんな事してると女の子が寄ってこないぞ？」

「大丈夫だ。俺はお前みたいな女ったらしじゃないから」

そう言って席に着くと、杉浦の叫び声と女の怒り声が聞こえてきた。今の俺になら丁度いい、子守唄に聞こえてきちゃうような絶妙なコラボだった。

「眠いなあ……………」

俺は欠伸あくび混じりに言った。そしたらクボが寄ってきて、「お前今日強いな」って言った。

何がどう強いのかよく分かんないけど、とりあえず「さんきゅー」って言っというた。

眠い眠い俺に追い討ちを掛けるように、2時限目は体育だった。

もうこれは俺への拷問としか思えない。

でもなんとか眠気を追っ払った。

「バイト!？」

今は女子がバレーボールをやってる。今日は雨だから体育館。

その間、何もしないでただ座ってるだけじゃあ眠くて眠くて寝ちゃいそうだったから、クボにバイトの話をした。

「うん、バイト」

「いーなー！　俺も奈美ちゃんとバイトでラブラブしたいー！」

「すりゃいいじゃんかよ」

「あの奈美がしてくれると思うか？」  
思わない。

早押しクイズ世界大会優勝者に勝てるくらいの早さで答えられる。  
絶対に思えない。

俺は素直に首を横に振った。そしたらクボにチョップされた。

「なんだよ！ 何すんだよ！！」

「そう思っても俺の前で言うな！！」

先に言ったのは自分のくせに。

クボはこう言う所が子供っぽい、って言うか……。でもそれだけ  
奈美さんの事が好きで、大事にしたいと思ってるのかな。

「おい男子！ お前らこっちでバスケだ！」

体育館の端の方で山本が呼んでる。山本は体育の教師で、スパル  
タ。しかもスパルタなのは男子にだけ。女子には優しく優しく接す  
る。

そこがまたムカツクし、どうも「先生」って思えないから生徒の  
間では呼び捨て。

あ、そう言えば退部届出さないと。

体育が終わって着替えた俺は、すぐに職員室に向かった。

バスケ部の顧問に退部届を提出する。顧問は俺の顔をチラチラ見  
ながら「惜しいなあ」って言った。

「惜しい？」

「ああ。お前バスケ上手いな、多分来年3年が卒業したら部長は  
お前になると思うぞ？」

「いや別に部長になりたいとかそう言うんじゃないし……」

「なあ榎本、もうちょっとだけ続けてみないか？」

「すいません。俺バイトしたいんで」

顧問はすぐに折れた。寂しそうに「そうか」って言って、退部届をジャージのポケットに入れた。

職員室を出ると、クボが居た。

「あれ？ クボ」

「おう」

「……なあ、俺さ、バスケ部やめるから」

クボにそう言うのと、驚いた顔になった。

「なんで!？」

「少しでも多くの時間をバイトに費やしたいから」

クボも顧問と同じように、寂しそうな顔をした。でも顧問と違ってたのは、俺を殴った事。勿論本気ではないだろうけど、それなりに痛い。

「バカヤロー！ 入部当時約束したくせにっ!!」

「は？ 約束？」

「2人で頑張ろうなって言ったじゃねえか！ 榎本ブーめ!!」

言うだけ言って、クボは1人で走っていった。

よく分からんぞ。つかなんの青春ドラマだこれは？ 俺は高木

ブーの榎本バージョンか？

第一……俺はクボと約束なんざしてないんだけど。しかも俺等が知り合ったのって今年なんだけど。入部したの去年なんだけど。何勘違いしちゃってるんだ？

それにその勘違いに乗って何罪の無い人間を殴っちゃってるんだ？

そもそもアイツは職員室に何しに来ちゃったんだ?? 今、俺の

頭の中にはこんな構図が出来ていた。

彩↓彼女、俺↓俺、奈美さん↓友達、クボ↓意味不明。

まだ少し痛む頬を押さえながら教室に戻ると、クボがばつの悪そうな顔をしていた。

俺がクボを見ると、アイツは顔をピュッと逸らす。だから俺も無

視する。

俺が席に座ると、クボはこっちを見てくる。だから俺も見ろ。だけれどまた顔を逸らす。

教室で俺とクボはそんな事を繰り返してた。授業中もクボは俺をチラチラ見てくる。

放課後、クボが俺に近づいてきた。

「ごめん！」

カチコチになったクボは、ぎこちなく言った。

「ごめん榎本！」

「……一体誰と勘違いしてたんだ？」

「あ、あゆかわ鮎川……」

鮎川。1年の時、クボが仲良かったって言う友達。俺はその人の事詳しくは知らないし親しくも無いけど、クボからある程度は聞いている。

2年になって、もう全然話してないらしい。その人の友達から聞くに、俺とクボが親しくしてるから少し嫉妬してるみたいだ。

別に嫉妬なんてしなくても話し掛けてこればいいのに。

そしてその「鮎川サン」は、今バスケ部の副部長。でも人を差別するから、バスケ部の部員達からはあまり好かれてない。多分、だから顧問は来年は俺が部長、って言ったんだと思う。だけど、もしそうになったら嫉妬してる上に憎まれそうだから、やっぱり俺は退部してよかったんじゃないかな。

「ご、ごめんな、榎本……」

必死に謝ってきたから仲直りして、帰りの「じゃあな」もやった。今日は彩、大事な用があるから先に帰るらしい。大事な用ってなんだろう？

考えながら帰ると、姉貴がドシドシやってきた。

「晴樹、電話あったわよ」

「は？ どこから？」



「マックから」

「え！ マジ！！？ なんだって！？」

「知らないわよ。電話番号メモったから自分で電話しな」

姉貴に言われて、俺は荷物も下ろさないまま電話へGO！

電話してみると、面接に来てくださいとの事だった。やった。日

にちは金曜。今日が火曜だから……あと3日しかない。

大変だ大変だ！ 緊張してきちゃったぞ！！

電話を切って、俺は飛び跳ねた。でも「うるさい！」って姉貴に殴られた。

## 第29話 現れた『アイツ』

面接に行ってきた。

それから2週間くらい後、『採用』と書かれた紙が送られてきた。丁度春休みに入った次の日だった。マツクの店長は学生の予定を見計らってんだらうか??

とにかく今、俺達はマツクでバイトしてる。思ってたより大変……。『バイト』ってのを甘く見過ぎてた。彩も同意見らしい。ふざけ半分で「スマイル下さい！」って言うてくる子供にはニッコリーとスマイル送らないといけないし、ポテト熱いし、ハンバーガーとかも熱いし、いい匂いだから食べたくなるけどその衝動を抑えなくちゃいけないし。

でも、一緒に働く人達との会話は本当に楽しい。バイトが終わってから時々おごってもらっちゃったりする。

最初は大変だ、とか、頑張れよ、とかって励ましてくれる24歳の男の先輩。富士野<sup>ふじの</sup>さん。通称「フジさん」。

最初に聞いた時、「富士山」と勘違いしてちょびつと怒られた。

「富士山」とは呼ばれたくないらしい。だからカタカナにしてるんだってさ。口にしちゃえばどっちも同じだと思っけど……。

「どーだ晴！ 慣れてきたか？」

「まあ一応……」

フジさんは俺の事を「晴」と呼ぶ。彩の事は「彩ちゃん」。

晴、って呼ばれるとアイツの事を思い出してしまっから嫌だったんだけどなあ……。

「いらっしやいませー」

あ、お客さんだ。カップルかな？ 背の高い男と、女は――。

「チーズバーガーセット2つくださあい」

――里砂……。

「……？　ちよつと頼んでるん……」

目が合った。紛れもなく、里砂だった。  
向こうも気が付いたみたいだった。

って事は、あの男は犬塚？

「……………晴……………」

「おい晴どうした」

後ろからフジさんが声を掛けてくるけど、体が動かない。

「…………お前向こう行ってる！」

フジさんに押し退けられて、俺は厨房の床に尻もちをついた。  
里砂も相当驚いてる様子だ。フジさんが代わってくれてなかったら、俺どうなってたんだろ。また犬塚に掴み掛かったのかな……。

とりあえず2人が席に向かって、フジさんは冷や汗を拭った。

「お前何やってんだ！　バイトでも就いたからにはちゃんとやれ……！」

「……………すいません……………あの……」

立とうとしても、足がすくんで震えて、立てなかった。

「……………もういい。お前少し頭冷やしてろ」

フジさんはいつも温厚だった。ちよつと冗談言ったり、ちよつとからかったりしても笑って許してくれる。

でも、今日、初めて怒られた。足の震えは里砂からのじゃなくて、フジさんの怒りからだったのかも知れない。

俺は更衣室に入って中の椅子に座った。狭くて暗い更衣室は寒さをいっそう引き立てる。

じきに体全体が震えてきた。

里砂も俺がここでバイトしてるなんて知らない様子だった。犬塚は俺に気付いてなかったみたいだけど、里砂が話してるかも……。

もう別れたんだから気にする事ないのに。

——でも、なんか嫌だ。俺に嫌な思わせといて、自分は犬塚と幸せそうに……。

30分くらい経った。

更衣室のドアが開いて、油の匂いと香ばしい匂いが混ざって入ってくる。彩かな、と思ったら、フジさんだった。

「……晴」

「……………フジさん、すいませんでした」

「知り合いみたいだな」

「へ？」

フジさんはゆっくりドアを閉めて更衣室の電気を付けた。

真ん中にしかない蛍光灯はピカピカ点滅し始めてて、付けても付けないとも同じような感じだった。逆に付けた方がうざったい。

「そろそろ替えないとな」

蛍光灯を見て、フジさんは眉をしかめる。睨み合いの結果、スイッチを切って、俺の隣に座った。

「あの客。知り合いっぽかったじゃねえか」

「……………元カノなんです」

俺はフジさんに里砂の事を話した。同棲してた事、アイツが浮気した事、その他もろもろ。

フジさんは俺が話す間相槌うつだけで、静かに聞いてくれた。

「浮気、ねえ……」

やっとフジさんが声を出す。まるでトンネルの中に居るみたいに響いた。

「でもそれは女が悪いんだからお前がビクビクする必要は無いんじゃないのか？」

「それは分かってるんですけど……」

「どうしても顔合わせると思い出しちゃって……………んー。怖い、って感情なのかな」

「……そう。嫌じゃなくて怖いんです」

「なるほどな。……俺も分かるぞ、それは」

フジさんも浮気された経験があるらしい。それから2年くらいは告白されても付き合う事を拒否してたみたいだ。今も彼女は無し。でもそっちの方が気楽なんだとさ。

外も中もこんなにカッコイイフジさんに彼女が居ない、ってのは不思議に思ってたんだ。なんだ、これで合点がいった。

「だけどさ、里砂って人もここにお前が居るって知ったらもう来ないんじゃないかなあ？」

と、フジさんは言った。

でも翌日、里砂は来た。

また犬塚が一緒だった。

「どおも」

「……いらっしやいませ」

もう今日は怯えたりしないぞ。

俺は無愛想に挨拶をした。里砂はまたチーズバーガーセット2つ。俺には「2つ」ってのがラブラブさを見せ付けてるようにしか思えなかった。

「ねえ晴、あたしね、今彼と…」

「次のお客様どうぞ」

何が「彼」だ。こうなったら完全無視でいつてやる。

里砂はブスッと膨れて、犬塚と席に座った。

全く、アイツは何しに来たんだ？

「晴樹くん」

休憩時間になって、彩が俺を呼んだ。

「ん？」

「さっきの人って……………」

「ああ。……あれが里砂だよ」

「……あの人がそうなんだ……」

俺は席を見た。里砂と犬塚はまだ居る。食べ終わってから、くっちゃべってばっか。

アイツのああ言う行動が嫌だ。浮気されてから、嫌なところしか目に付かない。前はいいとこばっかだったのに。

時計の針が3と12から3と3になっても、2人は帰らなかった。

「晴、彩ちゃん。休憩時間終わりだぞ」

不意にフジさんが俺と彩の肩を叩いた。

「あ、はい」

なんだか今日は混み混みな気がする。あ、土曜だからか。

注文。レジ打ち。手渡し。あー忙しい。猫の手も借りたいってこんな時の事を言うんだろうか。

……里砂、また明日も来るのかな……。なんか、もう嫌だなあ……。

### 第30話 クラス分け

次の日、予想通り来た。金大丈夫なのかよ、って思うけど、それでも里砂は来た。

今日もまた犬塚と。いつもと違ったのは、今日は持ち帰りって事。その日俺は厨房で、レジはフジさん。それから彩もレジ。里砂は彩をキッと睨んだ気がした。

「フジさん」

「あ？」

「俺渡してきます」

「……あ、これ？ 大丈夫か？」

「はい」

袋に入ったチーズバーガーセットを持って、俺は里砂と犬塚に近づいた。

犬塚はもう気付いてたみたいで、俺を見ても無表情だった。あのマンションで見た時の顔と同じ、無愛想な顔。

「お待たせしました」

「どーも」

里砂は、俺の手から奪い取るようにして袋を受け取った。里砂が逃げるようにして出る。犬塚も戸惑いながらも後をついて行こうとしてた。でもそれより先に、俺が里砂を追い掛けてた。

俺は店を出て里砂の肩を掴んだ。

「……ちよっと……何？」

はたと気が付いた。「来るな」って言ったって里砂は客だ。客に向かって「来るな」なんて言う店員がどこに居るんだ？

「……毎日毎日……何しに来てんだ……」

考えた末、そう言った。でも里砂は「はあ？」って顔をするだけ。「何って……ハンバーガー買いに」

そりゃそうだ。愚問だった。ここはファーストフード店だ。ハン

バーガー買いに来るのは何も変な話じゃない。

「でも……それが本当の目的じゃないだろ。俺には犬塚との仲を見せ付けてるようにしか思えない」

「ええ？ どうして？ あ、もしかして晴ったら焼きもちい？」

「ふざけんな。そう言う人からかうような言い方やめろ。それから……彩睨むのもやめろ。何も関係ないだろ」

「彩？ ああー。彩って言うんだ？ へえー。……ねえ、もう彼女とは寝た？」

「ふざけんなっつってんだろ！」

俺の声は結構遠くまで響いた。でもこんなド田舎だから、通行人は居ない。野良猫がビクリするくらいだった。

野良猫には悪い事してしまった。寿命が縮まってなけりゃいいけど。

でも里砂も相当驚いてた。俺が里砂に対してこんな大音量で物言うなんて無かったから。

「……頼むからもう来ないでくれ」

「……………晴のバカ」

——はい？

何故、俺がバカ呼ばわり？ さてはコイツ、「里砂」じゃなくて姉貴2号」だな？

「晴のバァーカッ！ 何度だって来てやるからねっ！」

里砂はベーツと舌を出した。

なんなんだよ全く。俺は呆れながら店内に戻る。

彩が犬塚に捕まってた。

「ちょっ……何してん……」

「お、やっと戻ってきたじゃん。じゃあね」

「おい犬塚っ！！」

「晴樹くん……！」

彩があった事を話した。犬塚とはちょっとした事しか喋ってなくて、勿論何もされてない。でもあの犬塚だぞ。信じられない。



もしかしたらそうやって言えって言われてるのかも……。

「大丈夫だよ晴樹くん。あの……ごめんね？」

「……なんで彩が謝んの」

「……疑われちゃうような事、しちゃって……でもホントに何も無かったから……」

「彩お願いだ。犬塚にはもう二度と近づかないでくれ」

俺がそう言うと、彩はゆっくり、深く頷いた。

バイトが終わって帰り道、俺の頭の中では里砂のあの言葉がグルグル回ってた。

『もう彼女とは寝たの？』

寝てねえよ。悪いかよ。………第一俺は体目当てじゃないぞチクショウ！！俺は犬塚とは違うんだっ！！

「春休みももうあと5日しかないね」

彩が隣で手帳を見ながら言った。そうかぁ。あと5日かぁ。早いもんだねえ。

5日経ったらマックにバイトに行く事もなくなる。フジさんに会うこともなくなる。

里砂に会うことも、なくなる。今まで通り彩と平和にやっていく。

そう思っていた、日曜の夜――。

そして春休みが終わった。  
マックでのバイトも終わった。

お給料もらって、少しは財布が膨らんだかなあ、と思う……。実際そんなに変わってないけど。

でもお給料の他に、フジさんから「餞別だ」ってもらった。フジさん……家の姉貴や兄貴より全然いい人！！

俺もあんな24歳になりたいな。

願えば叶う！ 24歳になるまで願い続けよう。

でも俺は家に帰ってから、願う暇なく——寝た。

さて。今日から新学年。3年生になった。3年になった日の朝、学校に行ったら急に彩が駆け寄ってきた。

それで俺の目の前まで来て「晴樹くんっ！！！」と凄い顔で叫んだ。

「……どした……？」

「あのね、あの……クラス！！」

「うん。新しいクラスだよね」

「それがね！ 同じなの！！！」

『同じ』。その言葉からは6パターン想像できる。

パターン1。奈美さんとクボが同じクラス。

パターン2。奈美さんと彩が同じクラス。

パターン3。彩とクボが同じクラス。

パターン4。奈美さんと俺が同じクラス。

パターン5。俺とクボが同じクラス。

パターン6。俺と彩が同じクラス。

でもパターン1の場合俺に言ってくるかなあ？ こんなに焦って。パターン2の場合彩は嬉しいかも知れない。その嬉しさを俺に知ってほしくて……いや、だったら奈美さんと一緒に来るはず。

パターン3の場合はクボに言っても不思議じゃないだろ？ 俺に

言う事ないじゃん。

パターン4の場合、彩じゃなくて奈美さんが来ないとおかしい。でないと彩は奈美さんのパシリに使われてるだけってなっちゃうじゃないか！

パターン5の場合は、クボが来るだろうな。「榎本くん！ 運命だね！」とかバカな事叫んで。

っつーことは……？？

「晴樹くんと私が同じクラスになったの……！」

俺の心の声を読み取ったのかと思うくらい丁度いいタイミングで、彩はまた叫んだ。

「……………まじ？」

「まじ……！」

「まじで……！」

「うん、まじで……！」

2人でニッコ……と笑った。登校してくる他の生徒達が引くくらい笑った。声を出さずに顔だけで笑ってんだから引かれるのも分かる。

その後2人で走ってクラス分けの紙を見にいった。いや、走ったって言うより、踊ったって感じ。

紙の前に行くと、奈美さんとクボが他の生徒達に紛れて居た。奈美さんの隣でクボは膝を落としてる。相当落ち込んでるみたいだ。

「奈美さん、クボ、おはよ」

「あ、おはよう。彩乃から聞いた？」

「うん。聞いた！ ……で、コイツどーしたの？」

俺がクボを指差すと、奈美さんはヘラツと笑った。

「1人違うクラスになったから落ち込んでんのよ」

確かにクボは3組、俺と彩は2組。あ、奈美さんも2組だ。

って事は3人だけ同じクラスってわけ。ああー、そりゃちと悲しいな。

「あ、でもさクボ。お前杉浦と同じクラスじゃん」



### 第31話 浮気

今日は久々に学校が楽しかった。担任の声は右耳から入って左耳から抜けていく。

何故なら俺の全神経はある人に向けられまくってるからだ。ある人、ってのは言わなくても分かんと思うけどさ。

「彩、帰ろ」

「うん」

2人仲良く下駄箱へGO！そして校門へGO！！

でも校門を出た時、楽しさは一気に吹き飛んだ。

アイツが居たからだ。

「あ、晴うー」

思いつきり猫なで声で「待ってました」と言わんばかりにイソイソ近づいてくるのは、里砂だった。

校門前で待ち伏せとはまたセコイ事を……。

「もう。マックやめたんだね。居ないからビックリしちゃったあ」

「しっこ過ぎ」

「あ、今日はね、康ちゃん居ないの。晴とゆっくり話したいなあと思ってる」

「里砂」

「ん？」

「性懲りも無く……また浮気？」

そう言うと、里砂は押し黙った。下を向いて口尖らせて。

付き合った当初はこんな奴だとは思わなかった。きっとまた犬塚が出掛けてる間に俺んトコ来たんだ……。

有り得ねえなマジで。こんな最低女と付き合ってたなんて……。

「行こ」

俺は彩を連れて横を通り過ぎた。

「晴待って!!」

でも里砂が呼び止めた。それでも歩こうとすると、後ろから走ってきて俺の袖を掴んだ。

「放せよ！」

「お願い！！ もう一度だけチャンスをください！！」

里砂は顔を伏せた。通り過ぎてく生徒達がジロジロ見てくる。

元々チャンスなんて与えようとしてなかったし、これ以上一緒に話しても何もいい事ないだろうから、俺は里砂の手を振り解いて歩き出した。

そこからはもう追ってくることは無かった。

ただひたすら歩く。

しばらく歩いたところで、隣に彩が居ない事に気が付いた。

そしたら後ろに一生懸命付いてくる彩が居た。

「あ、ゴメン」

知らない間に早歩きになっちゃってたんだ……。

「ううん。でも……もうちょっとスピード落としてくれると……」

「うん。ゴメン」

もう空はオレンジに染まっていた。1羽のカラスがクワーツと鳴く。夕日が眩しくてつい目を細めた。

「……ゴメン」

「うん。もういいよ？」

「ホントにゴメン。……嫌だった、だろ？」

「何が？」

「里砂の事……」

彩はフツと笑った。

「大丈夫だよ。晴樹くんが……里砂さんの方に行ったりしちゃった嫌だけど……」

つまりそれは……浮気してないから平気、って事か。

当たり前だよ。俺は浮気なんて絶っつ対にしないぞ。

——と誓った次の日、アイツはまた来た。

3年になって彩は選挙管理委員に選ばれてしまった。うちのクラスは立候補者が居ないとくじ引きで決めると言うアバウトなクラスだった。

遅くなるから先に帰ってていいよ、との事だった。いいのかなあ  
と思いながらも校門を出てしまった俺。

出た先に居てしまった里砂。

「やっほ」

里砂は軽く手を挙げた。

無視して歩こうとしたけど——腕を掴まれた。

「いつの間にかこんなにしっかりしちゃって」

「うるっせえな、放せよ！」

昨日みたいに振り解こうとしたけど、そんな俺の行動に里砂も免疫になったみたいだ。

是が非でも放そうとしない。

でも女だから蹴り倒すわけにもいかない。どうしよう……。

道行く生徒達はやっぱり昨日みたく遠慮無く見てくる。

「いい加減にしろよ」

「だって晴が付き合うって言ってくれないもん」

「一度浮気した女と誰が付き合うか」

「あの子がそんなに大事？」

平然とそんな事を聞いてくる里砂に、急に物凄い怒りを覚えた。

「当たり前だろっ！！！」

ああもう……。俺怒鳴る事が多くなってる気がする。里砂が現れてから確実に。

その声に、更に多くの生徒達が振り向いた。

もー！　なんで赤の他人共にこんな醜態さぶ曝さなきゃなんないんだよ！

注目の的になるのを耐えかねて、俺は里砂を連れて木の影に隠れた。

「俺は里砂とヨリ戻すつもりは無い。分かったらさっさと帰ってくれ」

「やだ」

「いいから帰れよ!! 犬塚とラブラブしときゃいいだろ!」

「だから康ちゃんの本命じゃないの。あたしの本命は、晴なの」

じゃあなんで犬塚と浮気したんだ。本命なら俺とずっと一緒に居れば良かっただろ。離れるような事したの自分じゃんか。

その調子で犬塚とも浮気したのか……? それが決めゼリフか……?

「ふざけん…」

突然、里砂は横をチラリと見た。なんだろうと思って見ようとしたら、急に里砂の手が首に回ってきた。グイッと引っ張られて——最悪の事態だ。

口さんと口さんがこっつんこ♪なんて歌ってる場合じゃない。でもホントにご対面してしまった。

「……なに、すんだよ!!!!」

慌てて引き剥がしたけどもう事後。大変だ……!

「あたしの中ではあ、キスしたら浮気!」

「……は……?」

「あら? やあっだ見られちゃったあ!??」

横を向いて言った。見ると、彩が立っていた。

さっき里砂を連れてこっちに來た時は一生懸命で気が付かなかったけど、無意識のうちにいつも帰る道——彩の家への帰り道に連れてきてしまったみたいだ……。

「……………彩……………」

「あの……予定より早く終わって……………」

彼女の声はいつも以上に弱々しくて……足も少し震えてる。

俺の前に居る里砂が笑ったように見えた。

さっき横をチラリと見たのは、彩を見たんだ。彩が居るって事知ってて里砂は……。



「里砂！」

怒りを込めて怒鳴った。でも里砂は怯む様子もなく、俺を見てニツコリ笑った。

「晴も浮気しちゃったね」

「お前何言ってるん…」

里砂は自分の体を俺に押し付けてきた。後ろが壁になってるから逃げられない。

それでも手でガードを作ってそれ以上の接近を拒む。

俺は手に力を入れて付き放した。でも何を言ったらいいかわからない。彩に見られたショックと里砂とキスしてしまったショックで頭の中が真っ白だった。

何も言えないままで居ると、前を彩が走って通ってった。

「彩……!？」

ヤバイ。追い掛けないと。

だけど追い掛けようとすると思砂が腕を掴んでくる。

「ねえ、今更無駄じゃない？」

「ふざけんな！ ……放せよッ!!!!」

思い切り力を込めて振り払った。女の里砂の力では男の俺に敵うはずもなく、抵抗出来ないまま、手は腕から剥がれた。

ドサツと音がしたけど、里砂の方を振り向こうとは思わなかった。俺が見なくちゃいけないのは後ろの里砂では無くて、前を走る小さな背中だったから。

「彩！ 彩待って！」

しばらく走ってから腕を捕まえた。走っているところを捕まえたから、彩は前のめりになって倒れてしまった。腕を掴んでた俺も一緒に倒れる。

「ごめ……あの……彩、ゴメン！」

すぐに立ち上がって頭を下げた。

彩の白い膝が見える。そこから少し血が滲み出た。

「彩、血…」

手を伸ばすと、彩は俺の手を払った。

向こうも反射的に払ってしまったみたいで、驚いた顔をしてた。でも驚きの顔は一気に泣きじゃくる顔になって、雨が降りそうな暗い静かな空に泣き声は響いた。

「ゴメン……」

『雨が降りそうな』では無くて『雨が降ってきた空』になった。ポツポツと音がして、黒いコンクリートがもっと黒く染まってく。また何を言ったらいいのか分からなくなった。俺は里砂に浮気されてムカついてたのに、彩から見たら俺は里砂と同じ事をしてしまってるんだ。

彩の泣き声は雨の音に掻き消されていった。

### 第32話 俺&奈美さん

学校へ行っても彩は目を合わせてくれない。

当たり前だ。あんな事してしまっただから。諸悪の根元はそりや里砂だ。だけど言い訳がましく言いたくもないし。

って言うかあの時に里砂がどうのこうのって言う時点でもう言い訳だ。

昨日は教室があんなに楽しかったのに、今日は入りたくもない……。教室の中では彩と奈美さんが何やら話してる。

きつと俺の事をバカだアホだって罵ってんだろう。最低男だ、って……。

そうだよ。俺は最低だ。里砂にムカつける立場じゃないんだ。いいよ、もつと罵ってくれ。それで被害者面出来るんだったらもつともつと罵ってくれ。

地獄の底まで突き落とす勢いで罵声を浴びせてくれ。

教室は全然楽しくない。相談出来る相手も居ないし、第一に彩が気になってしょうがない。俺が黒板を見てる時に彩は俺の事を睨んでるんじゃないか、って……。

「こら榎本！」

バシッと音がして頭に衝撃がきた。しばらくグラグラした。

顔を上げたら、目の前に担任が立ってる。くそー、ファイルで叩いてきたんだな。しかも凄いプリント挟まってんじゃない。こりや痛いに決まってるや。

「お前さっきからどこ見てるんだ」

「……あっち……」

適当に指差したら担任は呆れてため息をついた。

教室中がドツと笑いに包まれたけど、彩は1人暗い顔で、笑ったりなんてしてなかった。

彩を気にしてるうちに、1日はあっという間に終わった。

放課後、しばらく教室から外を見てた。

やっとカバンを持って教室を出ようとした時、奈美さんがパタパタ走ってきた。

「あれ？」

「ん？」

「まだ居たんだ」

「うん」

「……どーしたのよその顔。凄い暗いけど」

「いや……」

奈美さんは微妙に首を傾げてから縛ってた髪を解いて、教室に入  
った。

「……………彩から聞いたんだろ？」

いそいそと帰る準備をする背中に向かって、言葉を投げた。

その背中には訝しげな顔に変わった。

「聞いた？ 何を？」

「え？」

「え？」「え？」じゃなくて……何を？」

「聞いて、てないんだ？」

「うん、何も。今日だっていつも通り話してたし。って言うか「晴  
樹くん」の「は」すら出てこなかったわよ？」

奈美さんは肩をすくめて見せた。

「あー……なんだ……。じゃあいいや。うん。あの、バイバイ」

余計な事を言ってしまった！

しまったぞ！ てっきり彩は奈美さんに話したんだと思ってた！  
急いで靴に履き替えた時、外が土砂降りな事に気が付いた。あく  
までマイペースにカバンを持ってきた奈美さんも驚いた顔をした。

「……榎本くん」

「はい」

「今日の天気予報……見た？」

「うん、見た」

「なんて言ってた？」

「……………1日中……快晴……」

そこからは沈黙だらけだった。雨の音が余計にうるさい。

こんな土砂降りの中、お互い学校から家が近いわけでもなく、傘を持ってるわけでもなく……。どうしたらいいのかと途方に暮れた。結局学校に残って雨が止むのを待つことにした。

教室に入って、俺は自分の席に、奈美さんはその前の席に足を組んで座った。

「奈美さん、彩は？」

「何言ってるのよ。先帰っちゃったの知らなかったの？」

「え。全然知らなかった」

「ま、日頃から晴樹くん晴樹くん言うからね。禁止ワードにでもしてやろうかと思うくらいよ。それが今日出てこなかったのは変だなとは思ってたけど……」

「そっか……」

「2人が一緒に帰らないのが決定的だったわね」

うーん。確かに。最近は別々に帰ることなんて無かったからなあ。

あ、この間は違うか。まああの時は彩にも理由があって別々だったわけだしな。

「で？ 何があったの？」

奈美さんはニッコニッコ笑って聞いてきた。

いや、笑う話題じゃないと思うのですが……。どうなんでしょう？？

どうしよっかなあ。奈美さんに話しても大丈夫なのか大丈夫じゃないのか……。もしかして奈美さんからクボに伝わってクボから校内中に回覧板のように回り回ってグルングルンと噂になって新学期早々ありやこりやと……。うー！

そうなってからでは遅い！！ どうしよー！！！！

って悩んだあげく……俺は奈美さんに全てを話してしまった！  
誰かに聞いてもらわないとどうにかなりそうだったんだ。

話し終わった後、奈美さんはジッとしたまま動かなかった。急に立ち上がって怒鳴ってきたらどうしよう。

「最低じゃない！」とか「榎本くんバカよ!!」とか言われたら……もうホントに立ち直れないぞ。自分で分かってる事だからこそ余計に立ち直れないぞ。

だけど俺の心配は心配いらなかった。奈美さんは立ち上がりも怒鳴りもしなかった。

「それ全部彩乃に言ったらいいじゃない」

それだけだった。ケロッとした口調で言い放った。

「……………え？」

「って言うかそれって浮気って言うのかしら。榎本くんの話聞く限りでは相手の女が一方通行してるだけに思えるけど？」

「でもやっぱ……キスしちゃったしさ……」

「だーかーら、そこまでの過程を彩乃は見えてないんでしょ？」

……確かにそうだった。彩が見てたのは多分、キスする寸前。それを見ちゃった後では全てが全て浮気らしい行為にしか見えっこない。

里砂が体押し付けてきたりしたのに対して抵抗したって、それはもう彼女に見つかってしまったから、と言う見苦しい抵抗であって……。

全てを話せば彩は許してくれるんだろうか？

「雨、止んできたみたいよ」

奈美さんは窓をガラリと開けて手を伸ばした。

そう言えば、さっきまでの激しい音はいつの間にか無くなった。小雨が地面を叩く音が聞こえるだけ。

風に髪をなびかせながら、奈美さんは俺を見て小悪魔みたいに笑った。

その笑顔が何を表してるのか、なんとなく分かった。俺も同じ考えだった。せっかく雨も止んできてくれたんだ。早いところ彩に会って全てを話そう。そして素直に謝ろう。

今までみたいに彩が晴樹くん晴樹くん言ってくれるような関係を取り戻すんだ。

……またまた奈美さんに感謝だな。

### 第33話 待ちぼうけ

榎本晴樹、17歳、ただいま小田彩乃の家のまん前に来ております。

隊長、指示を出してください。

……って言って指示出してくれる人が居たらどんなに楽か……。こればかりは自分の手でなんとかするしかない。

大丈夫だ。頑張るんだ俺！

ピンポンと音がしてから数秒後、ドアが開いた。出てきたのは、お母さんでもお父さんでも無く、彩自身だった。

なんて事だ！ オーマイガッ！

そして向こうもオーマイガッ！ って顔をしてる。ああでもとにかく何か言わないと。とにかく何か話さないと……。

「話聞いてくれないか!？」

一生懸命言葉を探して、やっと出せたのがその言葉だった。

彩はうつむいて、唇を噛んだ。

「ちよっと……あの……ゆんのご飯、あげなくちゃ……」

そう言ってドアを閉めた。

俺の心の中に1つの言葉がこだましてた。「がちょーん」。

どん底に突き落とされた。マグマの中にドボンした感じだ。ターミネーターの気持ちが分かったかもしれない。お労しやシュワちゃん……。

俺は拒絶されたんだな。そりゃ無理もないかな。でも……彩にこんな風にされるなんて思ってた。甘く考えてたんだ。いつものように笑って許してくれるかな、ってさ。

女心はそんなに簡単じゃなかった。いや、浮気された側の気持ちには、そんなに簡単なものじゃなかった。一度されてるのにその気持ち



ちが分からなかったなんてさ、俺ってバカだなあ。

そしてここでスゴスゴ帰ろうとしちゃってる俺ってのも、バカだなあ。だけどずっとココに居たって彩は迷惑するだろうし。

……いや、でも待ってるのがいんじゃないか！？ うん、そうだ。待ってた方がいい！ ココで帰っちゃったらそんなもんなのかって思われちゃうじゃないか。よし。俺は待つぞ。

で、あれから2時間経った。でも彩は出てこない。大丈夫さ。このくらいは予想してたから。

……あれ？ 雨だ。またかあ。俺も懲りないな。来る前に傘持ってたくりゃよかった。

まあ小雨で済むだろ。さっきあんだだけ降ったんだから。あの天気予報士にチャンスをやろう。

そこから1時間経った。「1日快晴です。ウフツ」なーんて言いやがったあの天気予報士を、俺は恨むしかなかった。快晴どころか今日で2回も雨が降ってるじゃないか。もう予報士やめた方がいいんじゃないか？

学校で土砂降り。そして大雨。台風か今日は。

俺はずぶ濡れ。うう、寒い。体の芯から冷えるってこの事か。だけど俺は待つぞ。

それからまた2時間経った。やばい。ホントに寒い。俺ってバカ

の中の大バカだ。夜風に吹かれて更に寒い。

なんか頭がガンガンしてきた気がする……。

「へえっくし!!!」

うおーい。我ながらデカイくしゃみ。

もう帰った方がいいのかなあ。彩が出てくる気配は無いし。

帰ろうと思って立ったら、足がグラグラしてすぐ倒れた。

ヤバイ。これは風邪か？ ヤバイぞ。まあそりゃ雨ん中ずっと座  
つてりゃ風邪ひかないほうがおかしいよな。

えーっと、どうしよう。でもどうしようだったって家に帰らないと  
ゆっくり休めないし、帰る他無いよな。よし、がんばろう。

頭痛や吐き気と戦いながらも、なんとか家に着けた。家に帰った  
ら母さんが出てきた。

「晴樹っ！ どうしたのその格好！」

頼むから大声出さないでくれ。頭痛いんだから。

それでも大騒ぎする母さんの横を通して、俺は自分の部屋に入っ  
た。すぐにベッドにゴロン。

頭がガンガンする。ああーきつと明日は学校休んじやうだろうな。  
一応熱を測っておこう。

体温計を脇に突っ込んでから1分後、電子音と一緒に取り出され  
た体温計には38.0なんて数字が。

やっぱ風邪だ。でも風邪って事で安心しちゃってる俺ってなんな  
んだろう。

——ああ、きつとあれだな。今日彩に拒絶されちゃったから学校  
で顔合わせるのが嫌なんだな。心ではそんなんじゃダメだって思っ  
てんのに体がどうしても嫌がっちゃってるんだな。

いいや。たまには休ませないとな、俺の体も。

熱は、次の日の朝には39度まで上がってしまった。

これは行くなつて事か。きっと学校では俺にとって嫌な事が起こってるんだろう。だから行かない方がいいって事なんだろう。

母さんに学校に電話してもらって、今日はゆっくり休もう。彩には明日会えばいい。

あー眠い眠い。

で、2度寝する俺。夢の中にまで出てきた彩、そして里砂。

夢の中でくらい解放してくれよ。特に里砂。

夢の中で、俺は彩に全てを打ち明けてた。なんで俺は夢だところも饒舌じょうぜつなのかねえ。現実では羨ましいくらいだ。

話し終わったみたいで、俺はフウと一息ついた。彩はニツコリ笑って、「話してくれてありがとう」と言った。

いやいや。現実はこうも上手くはいかないさ。夢はいい事尽くしだからなあ。

――でもすぐに場面が変わった。今度は里砂の前に居た。相変わらず校門で待ち伏せ。俺は彩と歩いて、里砂に怒鳴ってた。

それでも里砂は諦めない様子。いい加減にしてくれよ。っと思ってたたら、夢の中の俺は急に里砂のすぐ後ろにある木を殴りつけた。思い切り殴ったみたいで、木には大きな穴が開いてる。だけど俺は痛そうな顔してない。スゲーー！ 夢の中の俺って強えー！

「晴樹」

彩が俺を呼び捨てにした。なんで？ いつの間に呼び捨てに？

しかも今この場面でそんな落ち着き払った態度で。へえー、夢の中の彩ってこんなに肝が座ってるっちゅーか躊躇無しっちゅーか。

「晴樹！」

うんうん分かってるって。何？

「晴樹ったら！」

だから聞こえてるって！ 早く言えよ！

「晴樹ッ！」

あーもううるさいなあっ!!

……目が覚めた。

覚めたところには眉間にしわを寄せる姉貴。

「もー。呼ばれたらすぐ起きなさいよ。友達来てくれてるわよ」

姉貴も無茶を言う。病人にすぐ起きろなんて無茶苦茶だ。まったく強引だなあ。

起き上がって上着を羽織った。階段を降りて玄関の前へ。

「ああ晴樹。小田さんが来てくれてるわよ」

小田さん……彩？ お見舞い？ マジで？ やった！

俺は嬉しさを全面に出さないように一生懸命注意して、ドアを開けた。

「やっほー!!」

——奈美さんとクボの顔があった。彩はその後ろに居る。きっと母さん、彩の名前しか分からなかったから「小田さん」だけにしたんだな。

なんだ。ウキウキしてた俺バカみたいじゃん。

「榎本大丈夫かよ？」

「あ、ほらほら。メロン！」

この2人はホントに騒がし……じゃなくて、元気がいいな。

「あー……ありがとう」

「じゃあねえ」

「え？ 帰んの？」

「そ。宿題やらないと。ほら剛史、帰るわよ」

奈美さんはクボの服を掴んでスタコラサッサと帰っていった。玄関には啞然とした彩と俺だけが残された。

「えっと……その、とりあえず、上がる……？」

「え、う、ううん。悪化させちゃうと悪いから……帰るね」

「でも…」

「じゃあね」

彩は逃げるようにして俺の家から出ていった。やっぱり怒ってるんだ。そうだな、いつもの彩なら俺が「上がりなよ」って言うところ「うん」とか言って上がるもんな。

だけど…俺、どうしたらいいのかわかんないよ。

どうしたら彩に許してもらえるのか、分かんないよ——。

### 第34話 嘘な噂が好きな奴

2日後、風邪は治った。あの日以来彩は来ない。まあ当然っちゃあ当然だろう。ただ単に寂しいだけで、さ。

学校に行くと、クラスの男子、「黒田」が近付いてきた。

「お前どうしたんだよ、風邪だった？」

「うん。でももう治ったから」

「それから浮気だった？」

「うん。でももう……」

待て。なんでお前がそんな事知ってたんだ？ 彩が言ったのか？

いや、彩は絶対にそんな事はしない。

じゃあ一体誰が――？

「榎本晴樹は浮気したんだぜー！」

廊下で中村一寿が騒いでる。

コイツか……。

「お、噂をすれば！ 榎本晴樹くんじゃあないかー！」

「お前何してんだ」

「事実をみんなに教えてあげてるだけだよ？ ……キミは最低な男だ、って事をさあ」

教室の中では、俺の事だけではとどまらず彩の事も噂になっていた。「榎本晴樹と付き合ってる」って事で。浮気されちゃって可哀想、いつまでも付き合ってる事ない、って。

「ホラホラ、キミのせいで小田彩乃まで噂になってるよ」

「なんて喚き散らしたんだ」

俺が言っても、中村一寿はニヤリと笑っただけで答えなかった。仕方ないからクラスの連中に聞いてみる。

「中村一寿の話？」「榎本晴樹は強引に元カノの唇を奪って、小田彩乃の前でこれ見よがしに何度も何度もキスをした」って」

……なんて事だ。俺は強引に奪ったんじゃない。奪われたんだ。  
中村一寿め。同級生、いや、全学年の生徒を使って俺達を仲違いさせようってのか？

や、元々今は仲良くないけど。

「なんだ、嘘なのか？」

クラスの1人が聞いてきた。

「当たり前だろ！ 何言ってるんだ！」

「そ、そんなに怒鳴んなよ……」

「あんなの嘘八百もいいとこだ！！ 俺は……」

危ない。全てここで言っちゃうところだった。これは彩だけに話  
すって決めてる。他の奴等も居るところで堂々と言う事じゃない。

これ以上この噂が広まるのを阻止しなくては！ 中村一寿をこらしめるのはその後。もつとずっと後。

俺は教室を飛び出して、全クラス回った。「今流れてる噂は全部嘘です！ マジで嘘です！」って叫びながら走った。でもその後ろから中村一寿が言葉を被せるから、俺の声は意味が無い。

それでも叫びを続ける。

2年の教室まで行った時、無駄に喉を哽かさなくていい方法があるって事に気が付いたから、俺は急いで教室に戻った。

「榎本晴樹は——んごっ」

中村一寿を捕まえてトイレに駆け込む。あとは中で待機してても  
らったクラスの男子達に任せて、俺はみんなの誤解を解かなくちゃ。

今度はそこまで声を張り上げる必要は無かった。

全クラス回ったところで、俺は自分のクラスに戻った。

「彩！」

名前を呼ぶと、彩は一瞬俺を見て目をそらした。けども面白い  
加減話さないと。ずっとこのままは嫌だ。

「彩、話聞いてほしいんだ」

彩は黙ったままだった。でも俺は彩の腕を掴んで、倉庫の前に連れてきた。ここなら人氣が無いから、誰かに見られるって事は無い。

「この間の事なんだけど……」

俺が言っても、彩は下を向いて口を閉じたままだ。

「話す。全部話す。言い訳がましくなるかもしれないけど、聞いてほしい」

それを言うと、少し頷いた気がした。頷いてくれたって信じて、俺はこの間、里砂との間にあった事を全部話した。凄い衝撃的だったから今でも鮮明に蘇る。

いやらしい口調、男を虜にしてもおかしくないような色っぽい目、軟らかい唇……。

……こんな事しか思い出せない自分が憎い。この手で絞め殺してやりたいくらいだ。

全て話し終わった。彩はまだブーツと下を見てるだけだ。動きもしなけりゃ喋りもしない。

「……話したくらいで簡単に許してもらえとは思ってない。でも本当の事を知っておいてほしかったんだ。……彩、ごめんな」  
しばらくの間、物凄く息苦しい、今にも逃げ出したくなる沈黙が続いたけど、ふいに彩は口を開いた。

「……話してくれてありがと……」

弱々しい、ヒョロヒョロした声だったけど、凄いきこちない言い方だったけど、とにかく彩はそう言った。

「私が勝手に勘違いして怒ってただけだったのかなあって思ったけど……でもやっぱりそうだったんだ……」

「……ごめん……」

「……もう、里砂さんとは……会わないでね……?」

彩は心配そう言った。

勿論！ 会わないさ。だけど里砂はまた来るだろうな。



いや、大丈夫。来たらキッチンと追いつくから。

俺が頷いて、彩も頷く。

……よっしゃあ！ 仲直りだぜ！ 一件落着だぜ！ 俺と彩は喧嘩したってすぐに仲直り出来ちゃうんだぜ！ これは「すぐに」とは言わないのかも知れないけど、でもやっぱり仲直り出来ちゃうんだぜ！

奈美さんありがとう！ 彩も許してくれてありがとう！ クボはなんにもしてないけど、とりあえずありがとう！

今の俺なら里砂でも犬塚でも追い払えちゃうぜ！ 来るなら来いってんだ！

そしたら、来た。

来るなら来いってんだ！ と言ったすぐその日に、やっぱり里砂は校門前で待ち伏せしてた。だけど追い払えるさ！

って思ったけど、俺は考えた。どうやって追い払うんだ？？

無視したって冷たい言葉使ったって懲りずに来るんだ。里砂には何を言ったって無意味な気がするけど……。

「はーるっ！」

俺と彩が校門から出ると、里砂は真っ先に飛びついてきた。まるで主人の帰りを待ちわびてた犬みたいだ。

「来るなって言ったら」

「晴が付き合ってくれるまで何度でも来ちゃうもおくん」

「だから付き合う気は無いって言ってるだろ。いい加減にしろ」

「やだ！ ね、康ちゃんとはキッパリ別れ……」

里砂のすぐ後ろの木を殴った。案の定ビックリしてる。……俺も手の痛さにビックリしてる。それを顔に出さないように我慢する。

今、俺は初めて犬塚に同情するよ。アイツだって本気で里砂を好きかもしれないのに。だって本気で好きでもなかったらいつも一緒

に居ないだろ。

それなのに知らない所で他の男に会われてる。

どれだけ悲しいか、どれだけ腹立たしいか、どれだけ情けないか……。以前の自分と重ね合わす事で、その気持ちは痛いほどよく分かる。

「二度と来るな」

里砂は驚きの顔から泣き顔に変わった。好きだった女が泣くのは嫌だけど、でも今俺が大切にすべきなのは彩1人だけなんだ。

後から手を見てみると、どれだけ強く殴ったんだってくらい青くなっていた。ああ……意識し始めたら急に痛みが増してきたぞ。ジンジンしてきたぞ。

「……大丈夫？」

彩が心配そうに俺を見てる。

「ああ！ 全然！ 全っ然平気！！」

どうにかしたいよ、この強がり。もっと普通に「痛い」って言えればいいのに。毎回口から出てくるのは真逆の言葉。

まあ、いっか。彩ニッコリ笑ってるし。痛い、なんて言っただけで心配させることないんだ。

「もう絶ッッ対、他の人とキスなんてしないから」

「うん」

言ってから「当たり前だろ」って思ったけど、彩はシッカリ頷いてくれた。これでまた前の俺達に戻ったってわけだ。

あ、中村一寿は……もうさすがに解放されてるか。

### 第35話 B B Q

金曜の帰り道。里砂は来なかった。犬塚と幸せにやってんのかなあ。

全く。幸せにやってた人等を仲違いさせといて暢気な奴だなあ。って思ってるはずなのに口元が緩むのは何故……？

それは、明後日、彩と会うからなのである！

ああー、ただ単に彼女と会うだけでこんなにも嬉しくなっちゃう俺って幸せな奴。

待ち合わせ場所はその公園。特に何をするでも無いけど、とりあえず会おうかって話になった。

日曜日、雪掻きじいさん家の前を通過って公園に行くと、もう彩が居た。早いなあ。

「彩」

「……あ、晴樹くん。おはよう」

「おはよ。早いね」

「……………楽しみになっちゃって……」

……………。

……………。

……………。

可愛いぜチクショウ！！！！

前から思ってたけどさ、彩ってさ、彩って、俺にはもったいないんじゃないか！？　こんなに可愛いしさあ、こんなに純粋でいい子だしさあ！

この時にはこんな風に思ってたけど、今思えば、こんな事思うんじゃない無かったって後悔してしまうー！。

「やあ榎本晴樹！」

日曜終わった次の日。月曜日。俺学校行く。中村一寿、俺を出迎える。俺嫌悪感をあらわにする。でも中村一寿には通じない。

「この間はよくもやってくれたね！　よくもよくもよくも！！！」  
「じゃ」

コイツには何を言っただって無駄って事が分かってるからスルー。分かっていてそれでも尚怒鳴り散らすだなんて体力の無駄遣いってもんだ。

教室に入ると、今度は彩が出迎えてくれる。

「晴樹くんおはよう！」

「おはよ」

彩の隣には奈美さん。こっち見てニツコリ笑った。

「よかったじゃない」

奈美さんは小声で言う。

「え？」

「仲直り。したんでしょ？　聞いたわよ。元カノ追い返したってやるう」

俺の腕を肘で突付いてきた。彩がもう言ったのか。でもまあそれなら言ってくれてもいいけどさ。嫌な思いはしないしさ。

「うん。ありがとう」

奈美さんのもっかい笑うと、教室を出ていった。

「ねえ晴樹くん」

「ん？」

「バーベキュー……」

「……は？」

さっき奈美さんが言ったらしい。

奈美さんと彩劇場。

「剛史がバーベキューやろって言ってきたんだけどさあ、彩乃も来ない？」

「え？ いいの？」

「だって2人でジュージュー肉焼くだけなんて……寂しくない？」

「そっか。そうだね。……あ、じゃあ晴樹くんも……」

「いいよいいよ。じゃあ言っというてね」

終。

ってなワケで、来週、4人でバーベキューをする事になった。

鉄板はクボが持ってきてくれるみたいだ。

でも鉄板持ってくるので精一杯だから、食材とかはこっちで持つてこいってさ。

なので学校が終わって、今、俺と彩と奈美さんとクボでスーパーに来ている。

なんでクボまで居るのかは、俺だって自分の食う飯くらい決めたいぞ！ って言うのが理由。

「……さて、何を買えばいいのかな？」

「適当に食いたいもん買えばいいじゃん」

「ばっか何言ってるの！ 予算の問題だってあるでしょーが」

「私ね、焼きトウモロコシが食べたいなあ」

……みんなバラバラだ。

もったとき、統一させようよ。こんな事ならリスト作ってこればよかったなあ。

「彩、紙って持ってる？」

「え？ あ、うん」

彩はカバンの中からメモ帳を取り出した。ちゃんとボールペンも一緒だ。

「さんきゅ。みんな食いたいもん挙げてって」

「豚肉牛肉鶏肉ジンギスカン！」

肉ばっかだな。クボ、お前そんなじゃ太るぞ。えーと、ジンギスカンは高級だから省かせてもらおうぞ。

「私ね、焼きトウモロコシが食べたいなあ」

うんうん。さっき聞いたよ。焼きトウモロコシ、と。

「エリンギエリンギ！」

さすが奈美さん。高級だねえ。でも高級すぎるから却下。

つつう事で、買うのはトウモロコシと豚肉牛肉鶏肉。でもちよつと寂しいぞ。もうちよこつと何か欲しいなあ。

野菜類がいいかな。

「野菜類で食べたい物挙げて」

「かぼちゃ！」

かぼちゃね、かぼちゃ。美味しいよねえ。

「ピーマン！」

ふんふん。子供は嫌いだけど大人になるにつれてよくなつてく食べ物だよね。

「バイキンマン！」

——それは、どこに属すんだ？  
って言うか言ったのは誰だ？

いや、聞くまでもないけどさ。こんなアンポンタンな事を抜かすのはアイツしか居ないじゃないか。

大久保剛史！

「クボ、頼むから真剣にやってくれ」

「じゃあニンジン」

お、今日素直だ。

「ニンジンか。クボもたまにはまともな事言えんじやん」

「……は？ 俺じゃないぞ」

メモ帳に書いてると、クボが眉をしかめて俺を見てきた。

「はあ？ 何言ってるんだ。お前以外誰が……」

クボの後ろに居た奴。そいつこそ真正銘アンポンタンだった。

中村一寿。

「やあやあみんなお揃いで」

中村一寿は彩に近付いて、肩に手を置いた。

「4人仲良く何やってんのー？」

ムカつく！ 気安く彩に触んなっつの！！

「デメエ何してんだよっ！」

強制的に手を下ろさせてやった。だけど怯まない。

くそ。つか何しに来たんだコイツ。

「材料から見ると……焼肉？ それともバーベキュー？」

中村一寿の視線は俺の持ってるカゴを集中攻撃していた。

なんか嫌な予感がする……けど。気のせいって事にしたい方がよさそうだ。

「僕も一緒に行ってい？」

嫌な予感的中。

雷と打ち上げ花火が一気に自分に落ちてきた時の衝撃よりも遥かに衝撃的だ。

実際そんな災難に合った事は無いけど。

一応俺等も抵抗したんだけど、中村一寿はしぶとかった。ゴ●●

りも参るほどにしぶとかった。多分普通の殺虫剤じゃあ参らないぞ。しぶとくて頑固で自己中。自己中だから他人の事を考えずに自分の意見押し通せる。最悪だなあ。

そんな奴と一緒に行く事になってしまった。日曜日は、全く待ち遠しくない日になってしまった。

### 第36話 待ち遠しくない日曜日

待ち遠しくなくても時間は過ぎてゆく。

待ち遠しくなくても日曜日は来てしまう。

全く待ち遠しくなくても。

——ちくしょう！ 来るなよ日曜！！ せっかくの休みなのに中村一寿に会わないといけなくなるじゃないか！！

だけど彩と会えるのは正直嬉しいし。でも中村一寿には会いたくないし。

だけれどもクボと奈美さんと彩と俺でバーベキューなんて楽しそうだし。でも、だけど、そこに中村一寿も加わるわけで、今までの4人では少なくとも居られなくなるわけだし。

って思いながらも、俺は来てしまった。

足が勝手に動いてしまった。

そうさ、もののけ姫のアシタカ、足バージョンさ！ 体のパーツが自分の意識とは別のところで勝手に動いてしまうのさ！

うん、だから仕方が無いんだ。今日はもう下手な抵抗はよして、素直に楽しもうじゃないか。中村一寿は無視しておけばいいんだから。

「晴樹くん！」

今日は待ち合わせは無し。会場直行。各自集合。大きな公園の芝生の所でやろうって事になった。そこに行ったら、もうすでに彩



と奈美さんが来てた。

彩がこっち見て手をブンブン振ってる。

「おはよう！」

「おはよ。奈美さんもおはよ」

「うん、おはよ」

「クボは？」

「まだみたいよ。あいつに時間きっちりを求めちゃダメよ。寝坊するのがオチ。きつと寝癖付けながら走って…」

あ、ホントに寝癖付けながら走ってきた。

「奈美ちゃあああん！ 遅れてゴメンよく！！ あ、榎本も彩乃ちやんもおはよう！」

焦ってる。すごい焦ってる。寝癖は一箇所だけでは収まらず、二箇所三箇所とピヨコピヨコはねてる。

寝癖が元気いいのはいんだけどさ、何か忘れてないかい？

「クボ、お前バーベキューの道具は？」

俺が聞くと、クボは顔を真っ青にした。走ってきたから真っ赤だった顔から熱が一気に引いてって、青い線が4本くらい入った。

「ゴメン忘れた！」

お先真っ暗？ 俺等の人生イバラ色？ 仏の顔も三度まで？

俺の後ろには、ホントに「仏の顔も三度まで」の人が居た。まあその人物ってのは言うまでもないだろうね。

「あんった…あたしらがココに集まった意味無いじゃないのよ！こんなに食べ物持ってきたあたしら馬鹿みたいじゃないのよ！！ただの大食いの馬鹿女じゃないのよ！！」

奈美さん何気に凄い事言ってるぞ。クボはひたすら謝ってるし。そしたら、来た。アイツが。

「やあやあやあみんな！」

この口調はやっぱアイツだ。

「やあおはよう！ 諸君元気かい？」

テメエのせいで元気が奪われたよ。……と言えないのが寂しい。

でも中村一寿の腕にはある物が。

「中村くん、それってバーベキューの道具……？」

彩が恐る恐る聞くと、中村一寿は鼻を鳴らした。

「ああそうだよ。大久保くんじゃあ頼りないと思って持ってきたんだ。……どうやら正解だったようだね。僕を誘つていてよかっただろ？」

お前が勝手に付いてきたんだろうが。……とも言えないのがもつと寂しい。

でも結局、中村一寿の持ってきたバーベキューセットを使わない事にはバーベキューは出来ないので、使う事になった。

自分の持ってきたバーベキューセットって事をいい事に、中村一寿が仕切り役にしゃしゃり出た。威張りくさっちゃってこの野郎。だけど怒ったところで仕方が無いので、喉が乾いた俺はジュースを買いに行く事にした。

嫌な奴からは少しでも離れたいしね。

やっぱバーベキューにはコーラかな。あ、でもこの『ワクワクメロンソーダ』ってのも気になる。あ、あ、あ、『子供だって美味しいんだもん』♪でお馴染みのQOO!〜レモン×ライム〜』ってのもある！

んでも俺高校生だし。電車だって大人料金だし。義務教育終わつたし。って事は「子供だって」の類には属さないって事じゃないか？　って言うのは属さない者が属さない物を買う事に何か違和感があるって事か？　ところがどっこい大人になってもQOOが好きなくらい居るよなあ。

それだったら俺なんてまだまだマシなんじゃないのかな。だって義務教育終わってからまだ3年しか経ってないし。親のスネ齧ってる時点でまだ子供だし。

だから大丈夫なんじゃないのかな？　俺がQOOを買っても。いいよね、誰も見てないんだし。120円入れて押すだけだもん。それにレモン×ライム味ってのも気になるしさ。凄い酸っぱそうだ

けど俺酸っぱいの苦手じゃないし。

色々と考えを巡らせて、俺はＱＯＯを買った。開けて飲んでみた。思った以上に酸味が強かった。強すぎた。これって常人じゃあ舌がしびれて飲めないんじゃないか？俺もその常人の中に入るけど。

ダメだね。酸味強すぎだね。無理無理。ゴメンよ120円。無駄になっちゃったね。

結局これ以上買ってもお金が勿体無い気がするから、とりあえず帰った。

なんかこの一件でＱＯＯを嫌いになったかもしれない。

だってＱＯＯのレモン×ライム味のせいで梅干食べたじいちゃんみたいな顔になっちゃったし。目が細細になって口がタコチューになっちゃったし。

しばらくは舌がしびれたまんまになるだろうな。

とにかく肉を食べて舌のしびれを癒そう。

### 第37話 必要な人（前書き）

遅れてごめんなさい！

やっとアップ出来ました！

なんかこれからもこんな不定期な投稿が続きそうですが………と  
にかくすみませんでした！

### 第37話 必要な人

バーベキューをやってる広場へ戻る途中、彩を見かけた。

誰かと話してる。ここからじゃ丁度木に隠れてて見えないや。クボかな？ 奈美さんかな？

いけないと分かってても盗み聞きしてしまう俺ってやな奴……。

「アイツのどこがいいの」

——この声は、クボでも奈美さんでも無いな。第一奈美さんがこんな男の声だったらそれはそれで問題っちゅーか気色悪いっちゅーか。

って事は、あと該当するのはアイツしか居ないじゃないか。

「なあ、榎本晴樹のどこがいいの、ってば」

やっぱり。俺の事をいちいちフルネームで呼ぶ奴はアイツしか居ない。

「アイツ浮気したんだろ？ あんたの事放ってさ」

「……放ってない！」

「だけど彩乃が見てるところでキスした。見せ付けたかったんじゃないのかなあ？」

中村一寿の奴、いつの間に「彩乃」なんて呼ぶようになったんだ！？

しかもちよっと待てよ。なんでアイツが俺と里砂の事を知ってるんだ？

浮気騒動でもそうだ。俺はアイツには話してない。話すはずが無い。なのを知ってた。彩が見てた時、近くには誰も居なかったし、誰も通らなかった。

学校のフェンスからは死角になってるはずだから見えるわけが無い！

なんでだ？ どうしてだ？ 今まで気にも留めてなかったけど、アイツ一体何者だ？

ただ単に彩を狙ってるだけとは違う気がする。

「晴樹くんはちゃんと里砂さんに言ってくれた!」

「言った? 何を?」

「……もう来るな、って……」

「へーえ。それがあの女と榎本晴樹とのシナリオだったとかつてのは考えなかったんだ?」

「……………え?」

あの野郎何言ってるんだ!!

「中村一寿ッ!!」

もう我慢の限界だ。勝手な事ばかり言いやがって! 堪忍袋の緒が切れたぞ!

突然の出現に中村一寿は少しビビッてた。だけどすぐに冷静な顔を装って、腕組みした。

「……盗み聞きとは関心しないなあ」

「お前こそ変な入れ知恵すんなよ!」

「ああほら、凶星だからこんなにムキになって怒っちゃってるんだよ」

中村一寿は笑いながら彩に言った。彩は困った顔をしてる。

ホントにコイツ、彩が好きなのか? 好きなら困らせるような事言わないだろ。

「榎本晴樹ってさ、ホントは彩乃の事好きじゃないのかもよ?」

そつと耳打ち。完璧なキザ男のやる事に、俺の血管はブツチンと音を立てた。

中村一寿の胸倉を掴んで、拳を作った。

「晴樹くん!!」

殴ってやりたい。コイツの顔を、ボコボコになるまで殴ってやりたい。

「俺が彩が好きじゃない? だったら1年間も一緒に居ねえよ!」  
芝生の上に倒した。少し拳を前に出せば殴る事が出来る。それでも中村一寿はニヤニヤ笑うばかりだ。

「僕には分からないなあ、好きなのに浮気する理由」  
浮気――。

確かに俺は彩と付き合ってるにも関わらず里砂とキスした。でもその後に色々2人で話し合って、決めて、きちんと仲直りしたんだ。

「お前に口出しされる事じゃない!」

里砂とだってもう会わない。会わないって決めた。また強引に迫ってこようが、今度は殴り飛ばしてでも里砂を近づけないようにする!

何があっても彩を優先する!

俺はちゃんとそうやって決めたんだ。それを今更コイツに言われる筋合いは無い。

「彩の事困惑させて何が楽しいんだ」

「困惑? 僕はそんな事させた覚えはないけど?」

「変な事言って困らせただろ!? 惑わせただろ!?!」

「僕は自分の考えに事実を織り込ませて言っただけさ。浮気するなんて、榎本晴樹は彩乃の事を好きじゃないんじゃないのかな、と思ったから言っただけだよ」

この野郎。余裕も調子もブツこきやがって。

「晴樹くんやめて? ね?」

彩が駆け寄ってきた。俺の腕を掴んで、必死に下ろそうとする。

「彩乃は騙されてるんじゃないの? コイツ、こんな顔して本当は凄い女だったらしいって」

中村一寿がそう言うのと、彩の手の力が緩んだ。彩の顔を見ると、彼女は中村一寿を睨んでた。迫力なんて無いけど、でも一生懸命に睨んでた。

「……晴樹くんはそんなじゃないよ」

「だって実際見ただろ? 元カノとキスしたの」

「中村くんは……晴樹くんの事何も知らないじゃない! 何も知らないのに勝手な事言わないで!!」

彩が怒った。

そしてかすかに、目が潤んだ。

驚いたけど少し嬉しい。男の俺がこんなんでもーすんだって思うけど、でもやっぱ嬉しい。

中村一寿はキョトンとした顔で彩を見てるだけ。

そんな中村一寿を置いて、彩は「行こ」とだけ言っただけで俺の腕を引っ張っていった。

しばらく歩いてから彩が急に止まった。

「彩……？」

「……足……」

「え？」

彩は、ストンと下に座った。

「ちよっ……彩大丈夫か？」

「足……足がね……ガクガクしちゃって……」

言う通り、足がガクガクブルブル震えてた。ついでに声も震えてた。多分、ああやって言うのにも凄い勇気が要ったんだ。

「……………彩、ありがと、な？ ……う、うれ、うれし……………う……」

「同じになっちゃう」

「うれ……………え？ 「同じ」？」

「殴っちゃったら……犬塚、さん？ の時と同じになっちゃうから……そうなっちゃったら、晴樹くんも嫌でしょう？」

だから、懸命に止めようとしてくれたのか？ だから、こんなに足が震えるまで言ってくれたのか？

「彩……」

「大丈夫！」

彩はニツコリと笑った。

「私、晴樹くんの事疑ってないよ。中村くんの言った事、信じてないよ」

……………彩は、どうしてこうも嬉しい事を言ってくれるんだ。俺の心



理が分かつちゃってるのか？ いやもう心理なんてどうでもいい。  
今分かるのは、「俺には彩が必要だ」って事だけ。  
ただそれだけ。

「……戻ろっか」

「おうっ！」

立ち上がると、彩が俺の手を握った。前にもこんな事があったぞ。  
えーっと、そうだ、あれは学校からの帰り道。初めて手え握った  
日。

初めてでも2回目でも、やっぱり嬉しさは変わらない。3回でも  
4回でも、5回でも6回でも何回でも来いってんだ！

その回数だけ、俺は幸せになれるんだからさ。

### 第38話 バーベキューセット

広場に戻ると、奈美さんとクボは膨れてた。同じように頬を膨らませて、同じように腕を組んでた。

「……どした……？」

声を掛けると、クボは自分の横を指差した。

「なんだよ。横がなに？」

「ちゃんと見ろよ！ バーベキューのセットが無いだろお！？」

あれ、ホントだ。確かに無い。バーベキューのセットだけがゴツソリ無くなってる。

「なんで？ なんで無いの？」

彩は奈美さんを揺すった。

「ジュース買ってこようと思ったのよ！ だからあっちの自販機に行って……帰ってきたら無くなってたの！」

あちゃあ。大分苛立ってますね。でもバーベキューのセットだけ持っていく人間って――？

「誰よ！ 誰が持っていくのよ！！ 大体、セットだけ持ってたってなんのメリットもありやしないじゃないの！ 食べ物が無きや意味ないでしょ！？」

――なんか、話の重点がズレてる気がするぞ。

でもそんな間抜けなドロボウなんて居るはずないし……って言うか、誰か足りないぞ？

あの俺が生理的にどうしても受け入れられない最低最悪のアイツ！  
里砂との一件が俺と里砂のシナリオだとか、嘘八百並べやがった  
アイツ！！

中む…

「中村くん！？」

彩が言った。

「……なーるほど。うんうん。俺もアイツじゃないかなーと推理

してたんだよねえ」

クボが言った。

「今気付いたって顔してんのはどこの誰よ」

奈美さんが言った。

「アイツしか居ない!!」

俺が言った。後ろでは炎がメラメラ燃えてる——ように見せ掛け  
てる。合成で。

俺は3人の前に立って、こう言った。

「よし、こうなったら中村一寿を捜し出そう! 名づけて、『中村  
一寿捜し出そう!』スパイ大作戦』だ!」

「アイツめ! 勝手に持ち出すなんてけしからん奴だ」

「元々アンタが持ってきてきてればよかった話でしょ! なんで毎回毎  
回大事なものばっつっつかり忘れるのよ! こちとら食べ物だけ持  
ってたって意味無い!」

「ねえ、そんな事言ってる場合じゃないよ!」

……………ダメだ。誰も俺の作戦名なんて聞いちゃいない。結構力  
ツコイイ名前だと思ったんだけどなあ。みんなの心にはそれほど響  
かない名前だったんだなあ。

スパイ……なんだけどなあ。スパイになる機会なんてそうそう無  
いと思うんだけどなあ。

「これじゃあ肉が焼けないじゃんかよお!」

「だーかーらアンタが持ってきてればこんな事には…」

「ねえってば! 早く捜そうよ!」

埒が明かない、ってのはこの事かな……?

でもだったら尚更、こんな所で言い合いしてる場合じゃないよな。

「彩、行こう! 奈美さんとクボは公園内捜して!」

俺は彩の手を引っ張ると、芝生の方へ向かった。バーベキューの  
セット持ちながらなんだからそんなにすぐに遠くへ行けるハズは無  
い。

それにこの公園は珍しく出入り口が一個しかない。この芝生を越

えた向こうにある出入り口だけだ。

不便だ、って愚痴ってた小中学生共が垣根の部分を引きちぎって  
出入り口を増やしたから他にもあるっちゃあるけど、でも大きな  
バーベキューセットを持ちながら出れる所は本来の出入り口しか無  
いハズだ！

そして公園内は奈美さんとクボの2人に任せた。抜かりは無いぜ！

「……あ、晴樹くん、あれ！」

公園を出たすぐの所で、彩が前方を指差した。大きな荷物持って  
えっちらほっちら歩いてる人が居る。

距離はそこまで離れてない。

「よっし！」

俺はターゲット目指して走り出した。ターゲットは『大きな荷物  
持ってえっちらほっちら歩いてる人』！

距離はどんどん縮まっていく。

「待てッ！！」

肩を掴むと、その人はこっちを驚いた顔で見た。

「……ひよわわ〜」

その人は、すっとんきょうな顔で言った。その後には腰を抜かした。  
人違いでした。すみません。そう謝ってから、後ろを向いて指でバ  
ツマークを作って彩に見せる。

「どこだ……どこ行きやがった中村一寿い！」

「もうちょつと捜してみよう？ あ、あっちに行ったかも知れない  
よ」

「そうだなあ。……中村一寿の家がどこに在るのか分かってればい  
いのにな」

「……………あ、私知ってる！」

「……なんでッ!？」

彩曰く、高校1年生の時に同じクラスになった事があるらしく、  
その時から中村一寿は彩に恋してたみたいだ。

それで夏休み、アイツは彩を自分の家に招いた。豪邸だったみた

いで、中に入るやいなや、中村一寿はすぐに家の自慢話を始めた。  
屋内プールがある、庭には2羽鶏が居る、庭には噴水もある、ベ  
ンツを持った執事が居る……。まるでリアルな「はなわ君」だった  
みたいだ。

彩を通して聞いただけでも、自慢話も甚だしい。

彩はそこで不快な思いをしたからか、ただ単に行った事あるから  
覚えてるだけなのか知らないけど、とにかく道を覚えてた。

それを辿って行けば、中村一寿と出くわすハズ！

あんなに大きなバーベキューセットを持ってんだ。速く移動でき  
るワケが無い。

「あ、居た！」

突然彩が声を上げた。前には大きな文字で『家族で楽しむ！バー  
ベキューセット』と書かれたデッカイ箱を持った者が歩いてた。

「今度こそ間違いなさそうだな」

「きっとそうだよ！」

「いよっしゃあ！ 待てコラ中村一寿いいいい！！！」

俺は調子に乗ってしまった。

完璧に乗ってしまった。だからこんな真昼間っから大声を出せた  
んだ。今思えば赤面物だ。

「捕まえたぞ！」

でもとにかく捕まえたんだからよしとしよう。終わりよければ  
全てよし、だ。

腕を掴むと、ソイツは振り向いた。かなり焦った顔で。

「え、榎本晴樹……！」

「勝手に付いてきて勝手に持って帰るのか！？」

「これは僕のだ。僕が帰りたい時に持って帰って何が悪いんだ！」

……あれ。確かにそうだな。

って言うか、なんでこんなに一生懸命になってコイツを捜してた  
んだ？ 別に帰ってくれるならそのまま帰ってもらった方がいいじ  
ゃないか。

あ、そうか。バーベキューセットが無いと奈美さんが怒っちゃうから。

でもだったら元々持ってくるハズだったクボが家までひとつ走りして持ってこればいい話だよな。

そうだよな。無駄に体力使うよりもそうしよう。そうすれば体力が減るのはクボだけって事になるから、自業自得。

うん、そうだ。そうしよう。

「彩、戻ろう」

「……………は？」

「中村一寿の言う通りだもんな。そりゃそーだ。クボに持ってこさせよう。ゴメンな中村一寿。帰っていいよ。じゃーな」

「ちよっ……ねえ晴樹くん？」

そうさ。クボが持ってたからおかしくなったんだ。中村一寿が帰ってくれるんならそれに越した事はないし。4人でワイワイいつも通り楽しくやれるんだからわざわざ引き止める必要なんて無いんだよな。

「ちよっと待てえい！」

「んあ？」

「僕を置いて彩乃とラブラブしようってのか！」

「……だってお前帰るんだろ？」

なんだコイツ。急にムキになってるぞ？

「いいや帰らないぞ！」

「はあ？」

「我が宿敵榎本晴樹！！自分ばかりカッコよくなろうとしやがって！僕は諦めないぞ！」

なーに言ってるんだ？

宿敵ねえ。って言ってもつい去年顔合わせたばかりだけど。

「榎本晴樹！ちよっと来い！」

「やだ」

……お。見える。見えるぞ。中村一寿のデコにムカつきマークが。

「……………いいから来いよっ!」

中村一寿はズカズカ歩いてくると、俺の服を引っ掴んで生垣の影へと連れてった。

### 第39話 黒い影（前書き）

遅れました。。

ホントに申し訳ありません。

……こんなんでもホントに完結まで辿り着けるんだろうか……。

えーと、とにかく、遅れてすいませんでした！！



### 第39話 黒い影

「なんだよ、放せて!」

影に来て、中村一寿はようやく服を放した。

「彩置いてきちゃったじゃん」

「彩乃は僕のだ」

俺が戻ろうとすると、中村一寿はそう言った。低い声で、俺を睨みながら。

「彩は誰の物でもないけど」

「僕は1年の時からずっと彩乃を見てた」

ストーカーかよ、ってツツコミたくなったけど、今はやめといた。

「お前よりもっと前から彩乃を見てたんだ!」

「だから何だよ」

「彩乃と別れろ」

急にまた何言い出すかと思ったら。

別れろ? やだね。誰がお前のために別れてなんてやるもんか。

彩を物みたいに言う奴の頼みなんて絶対聞かないね。

物みたいに言わない奴の頼みでも聞かないけど。

「お前の考え方は根本的に間違ってるんだよ」

俺が言うと、中村一寿は顔を真っ赤にして怒り出した。

「なんだと! ちょっと彼女が出来たからってすぐ調子に乗りやがって!」

「彩は物じゃない。俺の物でもお前の物でも、勿論他の誰の物でもないんだ」

「何を偉そうに……!」

「もうお前のバーベキューセットを使おうとは思わないよ。とにかく早く帰ってくれ」

コイツには何を言っても無駄だからな。こんなセリフ前にも言ったけど、もう一回同じセリフが言えちゃうくらいの強烈な「何を言

つても無駄」な奴なんだ。

歩き出した俺の後ろで、中村一寿が何やらギャーギャー叫んでる。叫べ叫べ。思う存分叫べ。俺は耳栓するから。

「あ、晴樹くん。大丈夫だった……？」

「何が？」

「あの、中村くん……何かされてないかなって……」

「ああ。大丈夫。全然大丈夫。逆にアイツの喉が心配なくらい」  
「へ？」

案の定彩は不思議そうな顔をしたけど、まあいつか。  
とにかく今はクボを走らせないと。バーベキューセットを取りに行かせないと。

その後、クボは家まで全速力で走ってバーベキューセットを取ってきた。

そして4人で楽しくワイワイ食べた。

うん、これだよ、これ。

やっぱライバルと一緒に食べたって美味しくないし。

でも、バーベキューも終わって帰ろうとした時、木の陰から覗いてる中村一寿を見つけた。

しつこい。しつこ過ぎるぞお前。

俺は反射的に彩の前に立って、中村一寿を睨んだ。アイツはニヤリと笑うと、俺と彩の方にトコトコ近付いてきた。

もう奈美さんとクボは帰ってる。

辺りも暗くなって、公園には3人しか居なくなってた。

バーベキューやってた時にはうるさい程だった子供達の遊ぶ声も、今じゃ全く聞こえやしない。

「楽しそうだったね」

……って、ずっと見てたのか？ コイツ。  
相当な暇人だなあ。

「お前さっきはカッコつけて逃げてったけどさ」

いや、カッコなんてつけてないけど。

俺が心の中でつつこんでるとも知らずに、中村一寿は続ける。

「彩乃は僕のだからな!!」

「……だからさ、」

「あぁっと! もうお前の戯言は聞かないぞ!」

ダメだこりゃ。

話にならないや。って言うか話聞こうとしないんだから話になるはずが無い。

「彩、行こ」

後ろでパチン、と音がした気がしたけど、これ以上付き合ってられないから無視して公園を出ようとした。

でも黒スーツの男達がそうさせてくれなかった。

出ようとした俺と彩の目の前に、黒スーツの男が5人程立ちはだかった。

「……!？」

「捕まえて」

中村一寿が言った。口元は微かに笑ってた。

その一言で、5人の男達は素早く動き出した。あっという間に俺達の後ろに回りこんで、俺と彩の腕を掴んだ。

そしてわけが分からないまま、デカくて黒い車に押し込まれた。

さつき公園の外見た時にはこんな車無かったのに。どう言う早業だ。

黒い布で足と腕を縛られてるから逃げようにも逃げられない。

なんでこんな連行みたいな事されなきゃならないんだ? 俺達は何も罪犯してないんだけどな。

ドラマでしか見た事がないベントの外見に負けじと、中も凄かった。後ろの席と前の席は壁で区切られてるし、壁にはワインとかまで置いてある。

ちよっと待てよ。

中村一寿は高校生だろ。

でもどうやらコイツには『常識』と言うものが通用しないみたいだ。

俺達の乗ってる後部座席に中村一寿も乗り込んで、壁に掛かってる電話を取った。

受話器に向かって彼は「出して」と一言だけ言って、また壁に戻した。

その後すぐに車が動き出して、そこでようやく俺はあの電話が前の席、運転席に繋がってるんだと理解した。

車の中は驚くほど静かだった。BGMも何も掛かってないし、会話も無い。時々振動がくるだけで、あとは何も無い。

静かすぎて辛い。なんか高価そうなワインを眺めてると、隣に居る彩が話し掛けてきた。

「私達、どこに連れて行かれるんだろうね……？」

当たり前だけど、声は緊張してた。俺の声も自然と緊張してしま

う。

「や。分かんない……」

話すくらい大丈夫と思っても、やっぱり小声になる。まるで俺達がいけない事をしてるみたいで、少し気分が悪かった。

窓際に座ってる彩の隣に俺が居て、その隣には中村一寿が居る。

俺の体は、彩の方の半分は全然リラックスしてるのに、中村一寿の方の半分は緊張して固まっている。

突然、俺の体半分を緊張させてる中村一寿が口を開いた。

「大丈夫、殺しやしないよ」

その言葉に、俺の体は更に緊張した。

そして心の中でつつこんだ。

『当たり前だろッ！！！！』

## 第40話 夜の脱走

大分走ってから、降ろされたのは大きな屋敷の前だった。

ドドーンと聳え立つデカイ屋敷を見て、彩は声を上げた。

「……ここ、中村くんの家だ……！」  
なるほど。

確かに庭には2羽鶏が居そうだ。

ポケーッと屋敷を見てる俺と彩乃を、中村一寿は後ろから押した。  
「さあ早く入れ」

命令形かよ。と思ってちょっとムカついたけど、夜風が冷たいからとりあえず入った。

入ると、外見は然る事ながら中も凄かった。

まずは真っ赤な絨毯。その上には大きなシャンデリア。こんなに  
大きいの見た事無い。

ホールの真ん中に設置されたこれまた大きな階段。そこにも真っ  
赤な絨毯が敷いてある。

部屋の数だって凄い。入ってすぐ、右側に見えるだけでも最低5  
つのドア。左側も同じだ。

中村一寿はこんない所に住んでるのか……。

こんなに嫌な奴がこんないい所に住んでるなんて。なんか生きる  
気力失っちゃうな。

だけど……もしかしたら、アイツも一生懸命なのかも知れない。

俺が彩を好きないように中村一寿も彩の事が好きなんだ。だから好  
きな人と一緒に居たいと思うのは至極当然の事であって。

俺も自分の好きな人を他の人に渡すのなんて嫌だし。

自分の力が足らなくてそう言う結果になったんだったら悔しさ倍  
増。

——でも何もしないで他の人に取られるんだったらそれは仕方無い事じゃん。

自分何もしないんだから気持ち伝わるはず無いじゃん。

なんでその怒りの矛先が俺に向くんだ？

俺何もしないぞ？

そうだよ！俺は何もしないじゃん。なのになんで中村一寿にこんな風に拉致されなきゃならないんだよ。

おまけに彩まで……。

「連れてって」

横で中村一寿が言った気がした。

見ると、それは執事に言った事だった。

「連れてって」？ どこに？

なんか嫌な予感。凄い嫌な予感。背筋がゾゾツとした。

当たるな、と念じたけど、その行動は無意味だった。

嫌な予感は見事的中。マツチヨなおじさんに連れられて、俺と彩は階段の窪みの所にある部屋の中に入れられた。

その部屋の中——四畳半くらいの狭い部屋——は薄暗かった。

頼りになる電気は上の方にある電球1つだけ。ホールにはあんなに大きなシャンデリアがぶら下がってたくせに。

しかも寒い。どうしよう、これ。

クラスメイトを暗くて狭くて寒いこんな部屋にぶち込むなんて。

まったく何考えてんだ。

「……彩、大丈夫か？」

「うん。……でもなんか……寒いね」

「あ、上着、着る？」

「ううん！！大丈夫！……大丈夫なんだけど……」

首を左右にブンブン振ってから、彩は下を向いた。

「私達……どうなるんだろうね……」

……そうだよな。不安なはずだよな。

俺達はただ単にバーベキューを楽しみたかっただけなんだけどなあ。

「……そうだ、携帯……」

ポケットを探った。無い。無い。無い。

そりゃ無いはずだ。元々持っていないんだから。

「彩、電話とか持ってない？」

「ううん。持ってない……」

——そっか。前にも言ってたな。持つんなら自分で金払わないといけないから、って。

あーくそ！ どうしよう！！

外に連絡すら出来ないじゃん！ 彩の両親心配しちゃうじゃん！俺の親………は、まあいいとして。

「……よし！」

頭に浮かんだ考えはただ1つだった。

「逃げよう！」

暗くて狭くて寒い部屋の中で、俺と彩は顔き合った。

中村一寿に仕返しとか、屋敷をぶち壊してやるとか、そんなデッ

カイ目標じゃない。

目標はただ1つ。逃げる事。それだけ。

出口目指して突っ走る。

……突っ走るとはいいいんだけど、まずはどうやってここから出るかなんだよな。

ピッキングの技を習得してる奴でも居ればよかったんだけど、生憎俺達はそんな技備えてない。

こうなったら目の前にあるドアを開ける方法は1つだ。

蹴破れコンチクショウ！！

って事で、ドアに体当たりを何度も何度もやった。ドアがミシミシ言ってるのが分かる。

そのすぐ後、ドアが吹っ飛んだ。凄い音がしたけど、幸い誰も気付かなかったみたいだ。

近くには誰も居なかったから、逃げ出すのは意外と簡単だった。屋敷を飛び出して、大きな噴水が真ん中に置いてある庭まで出てきた。だけど門をもうすぐで抜けられるって時、門は勢いよく閉まった。

「え!？」

もう少しで顔面衝突するところだった……。

門の手前にしゃがみ込んだ時、後ろから足音がした。振り返ると、中村一寿がゆっくりこちに歩いてきていた。

すぐそこまで来て、中村一寿は手を振り上げた。

反射的に目を瞑ったけど何も衝撃は来ない。恐る恐る目を開けてみると、中村一寿は彩の腕を掴んでいた。

「……お前何してんだっ!!」

立ち上がった瞬間に、中村一寿は彩の手を引っ張って走ってった。

「んっ……!!」

意外と足が速い事にビックリした。だっていつも部屋にこもって本読んでたりするばかりだと思ってた。

でも俺の方がちよつとは速いみたいだったから少し安心。距離はどんどん縮まってく。

彩の腕を掴める、と思ったら、2人は屋敷の裏に消えてった。

俺も急いで追いかける。

曲がった先に2人の姿は見えなかった。

「どこ行っただ……?」

ふと横に目をやると、屋敷の壁には大きくポツカリ穴が開いていた。

裏口かな。

入ろうとした時、急に人が出てきた。

「おわっ!!」

後ろに転んでから、それが誰なのか分かった。



「あれ。彩。……大丈夫か？」

「え、あ、ん？ あ、うん！」

なんだ？ なんなんだ？ なんか挙動不審になってるぞ？

まあいいや。とにかく今は早く逃げないと。

屋敷の中から中村一寿の怒鳴り声が聞こえてきた。また捕まるのも時間の問題だ。

今度こそ門を抜けて、しばらく行ったところにあるベンチの上に腰を下ろした。

「はあー」

座ると同時にため息が出た。なんか凄く久しぶりな気がした。

話し辛い空気が漂ってる。多分、俺も彩も疲れたんだ。

「……監禁罪で捕まるよな、あれ！」

笑いを取ろうとしたけど——全然取れなかった。1人で空振りして終わった。

それから俺の口から笑いを取ろうとする言葉が出てくることは無かった。

## 第41話 彩ちゃん元気なあれ（前書き）

更新かなり遅れてしまつて本当にすいませんでした！　これから  
また少しずつですが書いていくので、どうぞよろしくお願いします。

## 第41話 彩ちゃん元氣なあれ

あの非現実的な体験をした次の日、彩は学校へ来なかった。多分、中村一寿に会いたくないからだ。

あんな目に合わせた奴に会いたなんて思う人は世界中探しても居ないと思う。

下手な事したらボディガードの奴等に何かされるかも、と言う恐怖と、もう帰れないかも知れない、と言う恐怖。

うごめく恐怖の中、どうしたらいいか分からなかった。

中村一寿の家に行った事は無かったから家がどの位置に在るのか分からないし。

だけど中村一寿は、何事も無かったかのような顔で平然とやってきた。

それどころか、「なんで逃げたんだ」と俺を責めてきた。

結構慣れた手つきだったから、以前もやった事があるんだろうか。それでなんで捕まらないんだろうか。

いくら考えたところで俺に分かるはずがない。

ちよつとでも彩のショックを和らげるために、俺は彩の家にお見舞いに行った。

「……あ、晴樹くん」

扉を開けた彩は、俺の顔を見てフツとため息を漏らした。

「大丈夫か？」

「うん……。ごめんね、今日行けなくて」

「いやいや、いいよ」

「あ。上がって」

彩は体を横にずらして、俺が入れるくらいのスペースを開けた。

「お邪魔します」

リビングは、以前コタツが置いてあったところにテーブルが置い

てあるだけで、後は全く変わっていなかった。  
なんだか懐かしい。

「彩」

「うん？」

「昨日の事……お父さんやお母さんには話した？」

しばらく俺の顔を見ていた彩は、やがてゆっくりを首を横に振った。

やっぱりそうだな。

「……俺も」

話せない。話せるはずが無いんだ。

親に心配掛けさせたくない。かと言ってまだまだガキで何も出来ない俺達は、ただ口を閉ざすしか無い。

彩の場合女の子だから、両親は余計に心配するだろう。

だからこそ、言えないんだ。

「中村、来てたよ」

「……」

彩は何も言わなかった。

そのまま時間だけが過ぎていく。

「はやく」

20分くらいした時、彩が突然口を開いた。

「はやく……卒業したいね……」

そうだ。

卒業すれば中村一寿に会うことも無くなるだろう。

「……そうだね」

俺は彩を元気付けるために来たのに。

逆に元気を無くさせたかも知れない。

だけど何を話せば彼女は元気になるのか、分からない。今の状態では何を言っても変わらない気がする。

ただ俺には、傍に居てやる事しか――。

その時、インターホンが鳴った。それに気付いて彩が玄関へ向かう。

聞きなれた声でした。

「お邪魔しまーす！ あ、榎本くんも居たんだー？」

「……ああ……。奈美さん……に、クボ」

「なんだ、なんだ。俺はオマケか？」

2人とも。凄い高いよ、テンション。

クボは遠慮無しにテーブルの横に腰を下ろすと、自分の家のような振る舞いで奈美さんと彩を座らせた。

「何しに来たんだよ」

クボの隣に居る俺は、小声で言った。

「なーに言ってたんだ！ 心配して来てやったんじゃないか。彩乃ちゃん学校来ないし、お前はさっさと帰っちゃうし……。なんかあると思うだろう？」

恩着せがましいな、チクショウ。

でも……2人が来てくれて良かったかも知れない。だってあのままだったら、俺だけだったら、彩を元気付ける事が出来なかったと思う。

今はこの2人のハイテンションさに感謝だな。

「おい榎本！ お茶！」

「あ？」

「喉渴いたんだよ。お茶！」

「なんで俺に言うんだよっ」

「元気なさそうな女の子に言えるわけ無いだろ！」  
女には優しいんだな、お前は……。

まあ、そんなもんか。

「あ、いいよ。私やるから」

彩は立ち上がると、キッチンへと向かった。

「ホラ見ろ。お前がすぐに行かないから……」

「あのなあっ！」

——仕方ない。抑えろ、俺。

人生、こんな些細な事で怒ってたらもったいないぞ。

怒る暇があるなら手伝いに行こう。そうだ、手伝いに行こう。

「彩、俺持ってくよ」

コップの乗ったお盆を持ち上げ、テーブルまで持っていった。

「あ。ありがとう」

笑顔が見れた。それは単純に嬉しかった、けど。いつもの笑顔とは、やっぱりどこか違う。

無理して笑ってるわけじゃないけど、本気で笑ってるわけでもないような。

やっぱそりゃ、な。こんなすぐに笑えるわけがない。

それでも頑張って笑おうとしてる彩を見て、胸が痛んだ。なんで彩がこんなに無理して、なんで中村一寿は平々凡々と学校に来てるんだ。

——絶対おかしい。絶対間違ってる。

何も悪い事してない彩ばかり損じゃん！

とにかく今は彩の元気を取り戻す！

そのためには俺が頑張るんだ。

彼女の一人幸せに出来ないで何が彼氏だってんだ！

この日から、俺の

「彩元気にさせるぞ作戦」が実行された。

計画なんてもんは一切なかったけど。

## 第42話      ディズニー？ナガシマ？

俺はひとまず家に帰って考えた。

机に向かってひたすら考える。

どうやったら彩の元気を取り戻せるのか。

自分に置き換えてみた。もしも俺だったら…。

何をされたら嬉しいか。

やっぱあれか？      絶叫マシンとかそーゆーのか？

でも彩の場合ジェットコースターよりメリーゴーランドとかに乗ってそう…。

俺メリーゴーランドだけは一緒には乗れないぞ。

ある意味ジェットコースターより怖い。

乗ってる最中に俺に注がれる周囲の目が。

ナガシマでも一緒に行ってみようか。

それとも女の子ってディズニーとかのがいいのかな。

——よし。それなら…。

夜の7時。母さんがご飯を知らせてるのをパスして、彩の家へと走った。

全速力で向かって、インターホンを押す。

中から出てきた彩は、めっちゃ驚きましたって顔をした。

「晴樹くん！？      どうしたの？」

「選んで！」

「え？」

「ディズニーかなガシマどっちが好き？ 答えて！」  
彩はわけが分からんという顔をしたけど、悩んだ。

「早く！ 3、2、1」

カウントダウン開始。

「え、え、えっと、じゃあディズニー！」

反射的に、急いで答えた。

そーかそーか、やっぱ女の子はディズニーか。  
待ってろよ。すぐに俺が連れてってやつから。

「おっけーサンキュ！」

「…なんだったの？」

「へへっ。あのさ…」

「うん？」

俺は軽く彩の頬にキスした。

「ナイショ。っつーかお楽しみ」

後になって急に恥ずかしくなった。

…やべ。今俺絶対顔赤い！

自分からやるときながら彩の顔見れないし！

「え…と。じゃあね」

思い切って言いながら顔を上げてみた。

そしたら彩も真っ赤だった。

なんか無性に笑えてきて、大笑いした。

だってウブなのはお互い様だったんだ。

楽しくて、可笑しくて、嬉しかった。

だけど…。

「もうやだ…」

彩のこの一言で、俺は地獄に堕ちた。

「え…。え？」

何が…？

俺なんかした！？

え…あの…な



んかゴメン！」

一応謝ってみた。だけど、彩は首を振った。

「違うのー！ 私…晴樹くんの事大好きで…もうやだー！」

何が！？ いや、好きなら好きでいいんじゃないん？

俺には分かんないなあ…。

でもニヤけてる俺が居る。

そりゃそうだ。好きな女に大好きって言われて、

嫌な男なんているはずがない。

「俺も…好き、かも」

「…かも？」

「いや、ううん。好き」

二人して照れながら笑った。

良かった。これだけでも彩が笑ったじゃないか。

デイズニーとかじゃないのか。

なんか嬉しい。俺だけでも笑わせることが出来たんだ。

俺達は門越しにキスして別れた。

なんか今にもスキップ出来そうなくらいハッピーだった。

## 第43話 プラス

次の日の金曜日、彩から電話がきた。  
ニヤニヤしながら受話器を渡す姉貴にムカつきながら、電話に出た。

「彩？ どうした？」

【あ…あのね…あの…。お願いがあって……】

「ん、何？」

【あの……晴樹くんには迷惑かもしれないんだけどね、学校に一緒に行ってもらえないかなって……】

これは……お誘いか！

お誘いだ！ お誘いキター！

「いいよ！ 全然オッケー！ どこ行けばいい？ 彩の家迎に行こうか？」

【お…お願いしてもいいかなあ】

「もちろん！ 任しとけて！」

【ありがとう……】

受話器を置いて、俺はスピード着替えした。  
早く彩乃姫をお迎えにあがらねば。

5分後、家を出た。走って彩の家に向かう。  
彩はもう家から出ていた。門の前で待ってる。

「彩！」

俺がそう呼ぶと、彩はを勢いよく振り向いた。

「おはよ！」

「おはよう！ あの…ごめんね？」

「大丈夫！ 気にすんなって」

俺は笑いながらガッツポーズを決めてみた。

彩もそれを見て少し笑ったけど、すぐに笑顔が消えた。

「……どうした？」

「あの……怖くて……。またどこか連れていかれちゃうんじゃないかって……。は、晴樹くんを巻き込もうとかそういうんじゃないんだけど……」

「うん」

「……上手く、言えないんだけどね……？」

「うん、いいよ。ゆっくりでいいから」

彩は深呼吸してから口を開いた。

「私……あの時、一人じゃ絶対逃げ出せなかった。……と、思う。一緒に晴樹くんが居てくれたから……。だから私も此処に居られるの……。多分。……うん、絶対」

「……うん」

「だから……。私、学校行くのも晴樹くんが一緒ならって……。ごめんね、ほんとに私のわがままばかりでごめんなさい」

嬉しかった。謝る必要なんてない。

彩が俺を必要としてくれてたって事だけで、プラマイゼロなんてもんじゃない。

プラスプラスプラスだ。

「彩」

「……はい……？」

声が震えてた。目にも涙が溜まってる。

「話してくれてありがとう」

俺の言葉で、彩の目から涙がドバツと溢れ出した。

……どうしよう、こんな時。目が！ 視線が！ 突き刺さるー！

普通に見たら俺が泣かせてる図だし。

他の男達はこんな時どうしてるんだ！？

俺が迷ってる間にも彩は泣いてる。

ええいこうなったら！

道端ではちよつとハズイけど！

俺が彩を抱きしめようとした時、急に彩が顔を上げた。  
途中まで出てた手を慌てて引っ込めた。

「……ごめんね、私泣いてばっか……もっと強くなんなきゃ……」

「あー。あ、ああ。そう、だよなぁー！　はははっ！」

焦ってる事気付かれたかな。

うーんでも……彩は今のままがいいなあ。でなきゃ男の出る幕なくなっちゃう。

くそー！　あともう少しだったのに！！

「ごめんね、時間取らせちゃって……学校、行こっか」

彩は涙を拭って笑顔を見せた。

惜しかったけど、まあいいや。

彩は笑顔になって、俺も嬉しくなったんだし。

結果オーライだー！！

## 第44話 電話

季節は

「春になりそうで、でもまだ春になりきれない冬」。

人と同じように、季節だって簡単には変わってくれない。  
たくさんの時間が必要。

中村一寿も、変わるのに時間が必要だ。

だけど俺は生憎、その変化を待つて仲直りしてやれるほど、穏和な性格でもなけりや器のデカイ男でもない。

「孤独」で罪を悔い改めろってやつだ。

彩も大分元気になったけど、やっぱり思い出すのか、時々急に不安そうな顔をする。

でもね大丈夫だよ、彩。

彩には俺も奈美さんもクボも付いてるじゃん。  
もちろんお父さんやお母さんも。

それに比べて中村は独り。

そりゃあガタイのいいボディーガードは付いてるかもしれない。

でもさ、それは金で繋ぎ止められてる関係だから、いつか必ず終わりがくる。

それに俺決めたから。

もう絶対中村を彩には近付かせないし、なんかしようとしたらただじゃ済まさないから。

俺が絶対彩の事護るんだ。決めたんだ。

もっと早く決めてたら良かったのに。

——なんかさ、これって、相手が彩だからそう思えたんだよな。だって奈美さんだったら、一人で蹴散らしそうだもん。逆に護られそう……。

とにかく！ 彩は安心したまえ。

……とかってかっこよく言えたらなあって、最近よく思う。彩に伝えたい。

不安になる必要なんて、もうどこにも無いんだよって。

安心していいんだよって。

だけど伝え方が分かんないって言うか、わざわざ言うような事でもないのかなって言うか……。

よく分かんないけど、とにかく要は言うのが照れるってわけだ。だからまだ彩にはナイショ。

いつか俺にもっと度胸がついたら、ゆっくり聞いてほしいな。俺も頑張って言うからさ。

——って考えてた時だった。

急に電話が鳴った。思わず飛び上がって受話器を取る。

「はい榎本です」

【お！ 大久保ってモンですけど晴樹プー居ますかあ？ あははー

！ なーんちゃっ…】

受話器を置いた。

イタズラ電話として受け止めよう。

そうしたらまた掛かってきた。

「おいクボ！ 怒るぞ！」

【……クボ？】

聞こえてきたのは女の声だった。

しまった。

「…あ、間違えました。今のなしで」

【？ はあい。…あ、榎本晴樹くんって居ますか？】

「俺ですけど？」

【あ、そうなんだー。えっとお、率直に言いますね。あたしと付き合ってください】

……………はい？

俺は何度も目をパチパチさせた。

一体なんなんだ？ ということだ？

俺向こうの素性一切知らないし。向こうがなんで俺の名前知ってんのかも分かんないし。

【おーい。大丈夫う？】

「…わけ分かんないんですけど。なんで急に？」

【急じゃないよお。あたし晴ポンの事ずうっと見てたもん】  
晴ポンって…。

【あ、付き合ってって言っても、そんな大それたことじゃないの。ただ一緒に遊んでくれればいいの】

「あのー……すいませんけど俺好きな子いるんで」

【ええ！ ……あ、分かったあ。小田って子でしょ？ 大丈夫！

とりあえず晴ポンの学校まで来て。じゃあねえ】

そう言うと、一方的に電話を切られた。

やだね。絶対行くもんか。

電話の前でふくれてると、また掛かってきた。

【言い忘れてたあ。晴ポン来てくれないと、彼女さんどうなっちゃ  
うか分かんないよお？ だから来てね】

……どうやら行かざるを得ないみたいだ。



## 第45話 嫌な声

考えた結果、行くは行くけど彩を連れて行こうって事にした。だって一人で来いなんて事は言われてない。

すぐに彩に電話して、家を出た。彩は公園に居る。走れ、俺！

「あ、晴樹くん」

「ごめん急に」

「うん、いいけど……どうしたの？」

「さっき変な女から電話あって……学校に来てくれって」

彩の顔がなんとなく固まった気がした。

「……会うの？」

「だって会わなきゃしょうがないんだよ」

「わ……私は……嫌だなあ」

「なんで！」

「だって……私は……その、晴樹くんの……か、彼女だし、晴樹くんが他の女の人と会うなんてやだ」

「なんで？ 二人っきりで会うんなら嫌だろうけど……」

「俺が内緒で行ったら彩も嫌な思いするだろうなって思って、だから一緒に連れてくんじゃん！」

「なっ……なんかその言い方嫌……！」

「はあ？ じゃあ俺にどうしろって言うんだよ」

「会わないで！ ……ほしい」

でも会わないと彩がどうなるか分かんないんだよ。

だけど、もしかしたらそれは嘘かも知れないし——それでも、彩に無駄に怖い思いしてほしくなかったから、言えなかった。

「……分かった。じゃあ会わないかわりに、俺の家来て」

「え？」

「いいから」

彩の手を引っ張って、俺の家まで連れていく。

その道中で、彩が何も喋らなかったから、俺も何も喋らなかった。彩の家じゃ知られてるかもしれないし、外でもいつ何が起こるか分からない。

女の子の家に男が堂々と何度も上がり込むのも、なんか嫌だし。そう考えると、俺の家が1番無難だった。勝手もよく分かってるし。

今日は居るのは母さんだけだし。

「あらあら小田さん。いらっしやい」

「あ……こんにちは！ お、お邪魔します」

「どうぞどうぞ。あ、晴樹、あとでお茶取りに来なさいね。Q O Oもあるけどそっちのがいいかしら？」

「もー！ ガキじゃないんだからお茶でいいよ！」

そう言っていると、母さんは男の子は乱暴な言葉遣いねえとか言いながら、台所へ消えてった。

「ごめんな、母さんうるさくて……」

「ううん。私、晴樹くんのお母さん好きだよ」

「そう？ ならいっか」

いつの間にか、二人のわだかまりは消えてた。ここに居ればとりあえず安心。きっと大丈夫だ。

「そういえば、晴樹くんって家に居るとき、いつも何してるの？」

彩が唐突に質問をぶつけてきた。

「んー……。大体ゲームばっかやってるかな。気が向いたらポテチ食べたりね」

「ゲームかあ……私はやったことないなあ」

「え！ やったことないんだ」

彩はこくんと頷いた。

よし、それなら俺のゲームを見せてやるぜ！

「ちょっと来て」

ふっふっふ。

ドラクエ、バーチャファイター、首都高レース……どれがいいかなあ。

「じゃーん！」

ゲームが置いてある部屋のドアを開けた。

だけど、彩は『？』って顔してる。

「…あれ？ お気に召しませんでした？」

「あ、ううん！ そうじゃないの。そうじゃないんだけど……」

部屋の中を見ると、スツカラカン。

あるのはテレビとゲームキューブとPS2だけ。

テレビの前には紙が置いてあった。

紙の内容は『晴樹！ 悪いけど今日一日あんたのゲーム借りる。

友達と一緒に燃えるから。また今度コメダでなんか奢るから許してね♪』だ。

「姉貴のやつ……！ 俺承諾してねーし！」

「お姉さんって権力握ってるんだね……」

「もうこれは権力どうこうって問題じゃないよ……。横暴だ！ くそー！」

っていうかコメダで奢るとか安っ！

どうせバナナジュースだけ、とかだぞ。俺のゲームソフトの総額くらいのもん奢れよ！

「でもなんか楽しいお姉さんだね。私一人っ子だから羨ましい」

「いやあ、これが毎日となるともう嫌になるよ。あ、一回家交換してみる？」

「えー？」

彩は笑った。俺も笑った。

こんな平和で幸せな時間が過ぎてってるんだ。

きっと今日の電話はイタ電。嘘っぱちだ。

そう思いたい。

その時、母さんが下から呼んできた。

「晴樹ー！」

「なに？」

部屋から顔を出して言う。

「電話よー」

一瞬ドキッとした。まさかあの女？  
階段を降りて受話器を取る。

聞こえてきたのは――あの声だった。

## 第46話 『かつちゃん』

どうやらコイツは平穏な時間を送らせてくれないらしい。

この声を聞くと、なんだか胸騒ぎがする。

【ひーどーいー！ どーゆーつもりよう！ 女の子をこんな寒空の下で待たせるなんて。しかも来ないしいー。ふくれちゃうぞ！ ぷくう〜】

「俺行くって言ってないじゃん」

【あー！ そんな風な口効いちゃっていいのお？】

「今俺ん家に居るし。手え出そうったって無駄だよ」  
すると、受話器の向こうから笑う声がしてきた。

【分かったあ。今彼女さんとエッチの最中だったんだあ！ お楽しみ邪魔しちゃってごめんねえ】

……………。

……不謹慎だぞ、俺！

こんな時に顔を赤らめるな！！

「…あんた一体何なんだ？ 頼むからもう電話してこないでくれ」

【ええ？ なんで？ 晴ポンどうしたの？】

「どうしたもこうしたもないよ…。自分の行為が迷惑だって分かんないのか？」

【だあってえー。かつちゃんに言われちゃったんだからしよーがな……あ、言っちゃった……。あはは。ごめんキャッチー！】

とか言って、電話の向こうの女は、わざとらしく電話を切った。  
なんなんだ。目的は俺と彩との仲を切り裂くこと……？

かつちゃんって誰だ。

色んなハテナがモヤモヤに変わって、ムカムカしてきた。

——や、ダメだ。

それこそ奴の思い通りってもんだ。  
ここで俺が怒ったら彩は不安になる。心配する。  
だけど俺は関係ないよの一点張りになる。  
そうなたらどうだ。  
その先は見えてる。

別　　離。

嫌だ！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！

無理無理無理無理！！

やっぱりここは下手に刺激しないで済ませるしかないな……。  
彩にはなんとしてでも隠し通さなきゃ！  
とにかく最初は『かっちゃん』が誰なのかを突き止めないと。  
そいつが黒幕。

女使ってまで俺と彩の仲を引き裂きたいって奴は誰だ…？

——なんか心当たりがあるぞ。

そうだよ！　考えたらすぐ分かるじゃん！

あいつだ。絶対あいつだ。

俺は決心した。

必ず学校で問い詰めてやる。

人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ！　ってやつだ。

でもとりあえず一端部屋に戻ろう。

部屋のドアを開けると、彩が床にぺたんと座って待っていた。

「あれ…。ソファとか使っていないのに」

「ああー…でも…その家の人が居ないのに勝手に座っちゃうのって  
どうなのかなーって…。あ、でもね大丈夫だよ！ 私こっちの方が  
いいって言うか…何て言うのかな…。あ！　ところで！　あの、  
電話！」

「ああ、うん」

言葉にはしなかったけど、彩の顔見て分かった。  
誰からだったのか凄い気になってる顔だ。

「大丈夫だよ。ただの中学ん時の同級生！」

「…そう、なんだ」

それからは、二人で何をするでもなく、床に転がって天井を見て  
た。

何か話したくなったら話してた。

こんなんで、彩は退屈じゃないのかなって思ってたなら、彩は

「こういう時間もたまにはあるといいね」　って言ってたから、ちょ  
っと安心した。

隣に彩が居るってだけで心臓がバクンバクン言うのに、寝転  
がってるともなると、もうはち切れそうだった。

俺はその時改めて確信した。

俺には彩が必要だ。

失いたくない。

彩という時間を、彩がいる空間を、彩自身を。

失いたくない。

「…誰にも…壊させるもんか」

「え？」

「彩！　俺何者にも邪魔させないから！」

「…え？　あの…うん、でも…何？　どういう…」

「っしやあ！！　俄然やる気になってきたあ！」

後になって思えば、彩はこの時、一人で勝手に暴走する俺を見て、  
変なやつって思っただろうな。

いや、言い方はもうちょっと優しいと思うけどね？

変わってるなあとか、晴樹くんどうしたんだろうとか。

けどとにかく、やる気が出たから叫ばなきゃって思った。

決戦は月曜日だな。

待ってろよ黒幕！！



## 第47話 悪魔の囁き

月曜日。

学校に着いた俺は、真っ先にあいつの所へ向かった。

……だけど、後ろでクボがうるさい。

「なあなあ榎本ってば！　なんで来てくんなかったんだよう！　もっかい掛けてみても話し中だしさあ。やっとな繋がったって思ったら今度は出掛けてるって言うし？　まあ結局は俺と奈美ちゃんであラブできたからいっけど？　でもさあ、それにしたってさあ、ちょっとくらいは話聞いたって…」

「っだー！！　クボ！　分かった悪かった！　だから頼むから黙れ！」

いい加減キレた。

こっちは今から決戦に向かうってのに、後ろでそんな話されちゃうるさすぎる。

そんな時奈美さんを見つけた。

「あ、奈美さん！　丁度よかった。クボのことよろしく！」

「ええ？　あたし？」

「奈美ちゃんよろピーコ」

「黙れ！」

俺と奈美さんでダブル攻撃喰らったからか、クボはようやく大人しくなった。

よし、今度こそ！

だけど……すぐそばに行って肩を掴もうって時、先生が入ってきた。

「ほらー、席につけ」

マジかよう。

あと5cm、いや4cm！

くっそお！

もうさ、こうなったらさ、学校終わってから！  
放課後に捕まえるしかないよな！

で、チャイムが鳴った。6時限目も無事終わり、あとは中村一寿の一件だけ。

「なあなあ榎本お。今日ちょっと付き合わねえ？ 特別に埋め合わせさせてやるからさ！」

クボが誘ってきた。かなり偉そうに。

「なあクボ」

「ん？」

「バイバイ」

「えええー！」

叫ぶクボをほったらかしにして、走った。

早くしないと。早く捕まえないと。

「中村っ！」

中村一寿はフツとこっちを見たけど、呼んだ相手が俺だと分かる  
と、無視してまた歩き出した。

「：おいっ！ 中村！ 中村一寿っ！！」

「なんだようるさいな。あのさ、人の名前大声で連呼しないでもら  
える？」

「聞きたい事がある！」

「はあ？」

中村一寿は、あからさまに嫌そうな顔をした。

「だけど気にしない。コイツのこういう行動をいちいち気にしてた  
んじゃ、いくらストレス無さすぎると死んじやう人間だって身体が  
もたないぞ。」

「……お前：何か企んでるのか？」

「何？ 聞きたい事ってそんな事？」

「答えろ！ 何か企んでるのか？ 『かつちゃん』ってお前か！？」

しばらく黙って睨んでた中村一寿だったけど、急にクックククと笑い出した。

「かっちゃん、ねえ」

「…何だよ」

「いや？ 懐かしいなあと思ってさ」  
やっぱり。

電話女と中村は知り合いだったんだ！

この件には中村が関わってんだろうなとは思ってたけど…。

「なんで女なんか使ったんだ？」

「…つまらないなあ」

「は？」

「もっと混乱してよ。もっともっと事を荒立ててよ。お互い別れるまでズタズタに傷付け合ってよ。…マジつまんねえ」

プツンって音が聞こえた気がした。

もう抑えろっていう心の声も聞こえない。

「お前さあ！！ どこまで性格ひん曲がってんの！？ 彩はもう十

分傷付いたんだ！ お前のせいだな！！ なのになんでまたこんな

……」

中村は、妙に冷めた目で俺を見ていた。

ハッとして手元を見ると、中村の襟の部分を掴んでいた。

慌てて手を放す。

「……一体、何がしたいんだよ」

俺がそう言うのと中村は目をそらした。横を向いて、口だけで笑う。

「君ってさ、幸せ者だよね」

「何がだよ」

「今だって俺がなんとかしないって、俺が彩を護らなきゃって思  
ってんだろ？ 小田彩乃の気持ちなんてそっちのけでさ。一人でヒ  
ーロー気取りか？ 虫酸が走るね」

意味が分からなかった。確かに、彩を護らなきゃとは思った。  
だってこの間、彩は言ったじゃないか。俺が居てよかったんだっ

て。

「もしかして気付いてなかったの…？ おめでたい奴。小田彩乃はさ、無駄に正義感振りかざすお前見てちよっとウザそうな顔してたぜ？」

——うそだ。

だけど、そう言われると胸張って否定出来ない…。  
もしかしたらそうなのかも…。

「っていうかさ、君少しは頭使えば？ 君が小田彩乃から離るのが1番の防護策なんじゃないの？」

…え……？

もう頭の中がぐちゃぐちゃだ。

どういうことだ？ 俺が離ればいいのか？

そうか。そうなんだ。

少しの間でいいんだ。

中村の嫌がらせがおさまるまでで…。

頭ん中ぐっちゃぐちゃになってた俺は、馬鹿みたいに中村の言うことを真に受けてしまった——。

## 第48話      Double Date

次の日、火曜日。

彩との待ち合わせ場所に、俺は行けなかった。

もう彩には近付かない方がいいんだ……。

一人で学校に行くと、やっぱり彩は居ない。

家を出る前に電話しておけば良かったかも知れない。

今更だけど…。

朝のチャイムが鳴る直前に、彩が走って入ってきた。

息が切れてる。可哀相な事をしてしまった。

だけど近付いちゃいけない！俺が近付かなきゃいい話なんだ。

1時限目が終わると、彩がこっちに来た。

「…晴樹くん。おはよう…。今日、どうしたの？」

「別に。一人で行きたかった。…もうこれから一人で行って」

「…え？　だって……あの、どうしたの？　私、何か出来ることあれば」

「いいから！　もう近寄るなよ！」

言い過ぎた、とハツとしたけど、もう遅かった。

彩は震える声で、やっとのことでゴメンと言うと、小走りで自分の席に戻った。

ごめん、彩。

そんな日が続いて、5日目くらいの時だった。

クボから遊びのお誘いがきた。

その日は日曜で、家でぼーっとしてて暇だったから行った。

「はよ。どーしたんだよ」

公園に来てくれて言われたから行ってみたら、クボがヘラヘラして待っていた。

「どーしたって？ 暇な時に誘っちゃダメなのか？」

「いや別にそういうわけじゃないけどさ……」

すると、向こうの方から奈美さんがやってきた。

「やっほー！」

その後ろに居るのは――彩だった。

思わず顔ごとそらしてしまった。

「…お、おはよう……」

「おはよー彩乃ちゃん！」

「……おはよ」

隣でヘラヘラして彩に挨拶するクボが、無性にムカついた。

腕を引っ張って後ろを向かせる。

「なんなんだよ！ 俺聞いてないぞ！？」

「だって言ってるじゃないもん」

「クボーッ！！ お前覚えてろよ！」

俺がそう言っても、クボは何にも関係ないって顔をしてた。

「大体さあ、彩乃ちゃんと何があったんだよ？ なーんかおかしいぞ？」

「」

痛いところを付かれて、うつとなった。

「別に……クボには関係ないだろ！？」

「だったら俺が彩乃ちゃん呼ぼうが呼ばまいが関係ないだろ？」

何も言えなかった。そっかって思ったから。

「……なあ榎本。お前って悩み事極限まで自分の中に溜め込むだろ？」

？ 俺心配なんだって。いつか爆発するぞ？」

――クボ……。なんだよお前。そんな風に心配してくれてたのか。

だったらそう言ってるの。

「なあんてな！ 実は一部始終知りたいただけだったりして！」

まあ、な。

そんな奴だろうとは思ってたからさ、今更ショックもくそもないけどさ。

「剛史！ どーすんのよこれから。呼んだからには何か考えてんで

しょ？」

「いや、何も！」

クボがそう自信満々に言うと、奈美さんはキッと睨んだ。  
目で殺すってこういうことなのか？

「分かった。大丈夫。任せてよ！ 今考えついた！」

クボは焦って言った。

その後行った場所はというと。

動物園だった。そう、前に来た……彩と二人で来た動物園だ。

「ね、ね、ダブルデートっぽいっしょ？」

いや、動物園ってダブルデートで行くところか？

まあ俺はいいんだけどさ。

「ほらほら！ 榎本も彩乃ちゃんもカッポーらしく手繋いで」

「ちよっ……何すんだよクボ！」

「いいからいいから！」

ってなって、俺らは無理矢理手を繋がされた。

彩も気まずそうだ。

とりあえず、手を放した。彩が一瞬こっちを見たけど、そっぽ向いて知らん顔してしまった。

ここで前の俺に戻ったら、きっとまた彩は傷付く。

俺と一緒にいるせいで。多分、中村は彩がフリーになればいいんだ。

俺には彩をふるなんてこと出来ない…。

だから、彩から離れていくのを待つしかないんだ。

気まずいばかりの俺達を置いて、クボはまた無理矢理に奈美さんと手を繋いで歩いてった。

## 第49話 喝!!

力無くぶら下がった手を、どうしたらいいのか分からずに迷っていた。

そうしたら彩が口を開いた。

「あ……あの…晴樹くん、私…」

「俺帰るわ」

「え…?」

彩が袖を掴もうとしから、つい乱暴にはらってしまった。

両者とも啞然として立ち尽くしたけど、しばらくしてから俺は出口に向かった。

「あの、晴樹くん……ちょっと話…」

後ろから彩が追い掛けてきてることは分かってたけど、振り返ることは出来ない。

振り返ったら終わりなんだ。

次の日の月曜日、俺が学校に行くと、彩はチラリと見て、寂しそうに視線をそらした。

彩との仲が悪くなってから、一日がつまらない。

今までの楽しさがどこかに隠れたみたいだ。

なんとなく一日を過ごして、さようならの時間になった。

鞆を持って帰ろうとした時、後ろから呼ぶ声がした。

「榎本くん!」

振り向くと、奈美さんだった。

「急いでる?」

「いや、別に」



「じゃあちよつと話し相手になってよ。あたし委員会まで時間あるんだよね」

「うん…まあいいけど」

そっか。奈美さん体育委員だっけ。

俺は何にも入らなくてよかった。って言っても奈美さんも自分から進んで入ったわけじゃないけど。

奈美さんが休みの時に先生が勝手に入れちゃったらしい。

俺はクラスの誰かの椅子を借りて、そこに座った。

「何時から？」

「んーと、確か4時から…かな？」

「そっか」

あと15分か。そんなに時間ないじゃん。

「…あたしね、榎本くんに聞きたいことあんのよ」

「何？」

って言った途端、奈美さんは俺の目の前の机にバンと手を置いた。教室内が静かだったためもあって、すごい響いた。

「どういうつもり？」

「……………は？」

突然に奈美さんの目が肉食獣みたいになったもんだから、驚いた。

「昨日、あたしらが帰るとき出入口の前で彩乃が泣き崩れてたのよ。

何があったのか聞いても『晴樹くんが…』としか言わなくて」

「……………ああ…」

「前からちよつと態度が変だなあとは思ってたんだけど」

「うん……」

そうか。やっぱり気付いてたんだ。

奈美さんになら……言っても大丈夫かな。

俺は、あったことを全部話した。

今までにされた嫌がらせ、中村の言葉、彩を傷付けたくないって気持ち——。

奈美さんは最後まで黙って聞いてくれた。

「……終わり、です」

なんとか話し終えたけど、奈美さんは少し呆れたように額を押さえてた。

「……とさ……一つ言ってもいいかな」

「うん、どうぞ」

「ばか！」

「は!？」

ビククリした。

ビククリした。

急にばかとか驚いた。

だってそれは、クボにのみ向けられる言葉だと思ってた。

「あのさあ、そんな理由で彩乃にあんな態度とってたわけ？　もうホンツト呆れた！」

「何が？　なんで！　だって俺、それが彩を護る方法なんだって……」

「だからってあんな事……。彩乃はねえ！　榎本くんが思ってるほど弱くないし、分からず屋でもないわけ！　ちゃんと説明すれば分かってくれる子なわけ!!」

「だって説明したって……中村は、そんなんじゃ諦めないかなって……」

なんだかどんどんモゴモゴになってく。

奈美さんに言われて気が付いた。俺は何か勘違いしていた。

俺と彩が完全に別れなきやいけない、って。

そう思ってた。

だけど、別にそれこそ芝居でも構わないわけだ。分かったぞ。

「奈美さん……ありがとう」

「いーえ」

「ごめん、俺……帰る！」

「うん、行ってあげな」

奈美さんはやっぱり『イイ奴』だ。

俺がこうなるってこと、分かってたのかな。

あ、そういえば、委員会……。

時計を見ると、もう4時5分。教室から奈美さんが出て来る様子はない。

嘘か。

まあ、こういう嘘ならいいか。そのおかげで俺は自分の間違いに気付けたんだ。

だけど……帰り道、俺は少しショックだった。だって、こうなるまで分からなかったんだ。

彩を護るって、そう豪語してたくせに……。

1番傷付けてたのは、

俺だったんだ――。

## 第50話 拒絶反応（前書き）

ついに50話です！あと50話で100話です！（笑 読んでく  
れている方、感想をくれた方、ホントにありがとうございます！！  
m（ m

## 第50話 拒絶反応

今更……。

今更謝ったところで、彩は許してくれるのだろうか。

俺は彩をすごく傷付けた。

胸の奥を爪でえぐるように。

……だけど、こんなところで悩んでも仕方ない。行動あるのみだ。俺は走った。走って走って走った。

息を思いつ切り切らして、彩の家の前に着いた。

インターホンを鳴らすことに戸惑う。

よし、3、2、1でいくぞ。

3、2……

「おーう榎本う！」

ピンポーン（インターホン&正解音）

……前もあつたぞこんなこと……。

見るとクボがいた。

前は奈美さん、次はクボ。チクショウ、嬉しいような、助かったような、だけど悔しいような……。

「何してんだ？」

脳天気なクボがヘラヘラ笑って聞いてきた。  
なんか無性にムカついてきた。

「いや……別に。お前って至る所に出現すんのかな」

「んあ？ 何が？ あ、俺ってばなんかしっちゃった？」

もういいよ……

クボくんや。頼むから向こうに行ってももらえないかね。

その時、ドアが開いた。

出てきたのは彩のお母さんだった。

「はい……あら。あらあらまあまあ！ 晴樹くんじゃないの」

「あ、どうもこんにちは！」

「彩乃居るわよ。まあ上がった」

「あ、あの……いや、えっと……」

彩のお母さんはクイクイと手招きして、俺を中に入れた。

「いいからいいから。彩乃も喜ぶんじゃない？」

いや、多分それはないと思います……。

「ささ、上がって上がって」

あれ、でもクボ……

見ると、もう居なくなってた。なんなんだ一体。

変な奴だなあ。

「彩乃ー！」

「何？」

彩がリビングから顔をだした。……けど、また顔を引っ込めた。

「あら彩乃？」

「わ、私、自分の部屋行ってる！」

そう言うと、彩は階段をドタドタ上がっていった。

ああやっぱり。

やっぱ拒絶されるよな。

「……どうしたのかしら？　もう、失礼な子ねえ」

「や、いいんです。悪いの俺なんで」

「あらそうなの？　でも自分が悪いって分かってるなら大丈夫よ。」

「……若いっていいわねえ」

はい？

いいのか？

うーん……いいのかあ。

「あの、すみません、彩の……えと、彩乃さんの部屋のところ行ってもいいですか……？」

「ああ！　そうねそうね。どうぞ。ごめんなさいね、お茶も出さずに立ちっぱなしで……」

「あ、いや、それは……大丈夫です。ホント気にしないでください」  
やっぱこの親子似てるわ。

彩と会ってすぐみたいな感じだもん。

なんか懐かしいなあ。

俺は家に上がらせてもらって、彩の部屋へと向かった。

ドアの前に立って、コンコンとノックした。

「……お母さん？　晴樹くんは……」

「俺。ごめん、彩。話聞いてほしくて」

しばらく返事を待ったけど、返ってこない。

「彩？」

「ず……ズルイよ！　私の話は全然聞いてくれなかったのに……」

「……ごめん。でもあれは」

「か、帰って。今は……話したく、ない」

「……彩」

「帰ってってば！」

やっぱそうか……。

そりゃそうだよな。俺ヒドイことしたし。  
だけど彩が怒鳴るなんてショックだった。

俺、どうしたらいいんだろう……。

とにかく、今は会えないみたいだ。階段を降りると彩のお母さんが居た。

「あ、晴樹くん。彩乃どうだった？ 何か失礼な事……」

「いや、大丈夫ですよ。……失礼なのは俺の方なんで」

「え？」

「すみません。お邪魔しました」

逃げるようにその場を去った。

なんで俺がショック受けるんだ。1番ショックなのは彩だろ！？俺が落ち込むのは筋違いだ。そんなんじや彩にもっと嫌われる。

でももう、誰とも話したくないや……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3329b/>

---

そして僕等は此処に居る。

2010年10月8日14時42分発行